人物ノ能否ヲ計リ、隨意ニ配置シ得ルヲ以テ、啻ニ便利ノミナラズ、事業熟達事務整頓ノ上ニ於テモ大ニ浩益ヲ與フルコトト存ズ。然ラバ茲ニ將校ノ腦裡モ安堵シテ職掌ヲ盡スコトヲ得ベシ。

右陳述ノ如クニシテ監視ノ實ヲ盡シ、考課ノ統計ヲ大臣ノ官房ニ整理シ、全般ヲ監督セラルルニ於テハ、軍風紀ヲ一變スルニ到ルベシ。然ルトキハ數年ヲ出デズシテ我海軍ノ發達スルハ疑ヒナカルベシト存ズ。自然之等ノ事ヲ改正セラルルニ於テハ、進級條規ヲ改良セラルベキト思料ス。宜シク詮議アランコトヲ望ム。

機關士及ビ技士ノ件

機關士ノ件ニ付歐洲全般ノ海軍ニ於ケル事實ヲ考察スルニ、日ニ月ニ進ム處ノ利器ハ啻ニ新發明ノ盛ナルニ止マラズ、亦從テ其施術ニ迄巧ミニ進歩シ、共ニ發達スルノ勢ヒハ實ニ當ルベカラザルナリ。今哉直接ニ我海軍ニ於テ其主務タル機關士ノ有樣ヲ考フレバ、兵機學校合併ノ時ヨリ大ニ紛擾ノ聲ヲ聞クニ至リ、遂ニ昨年學校ノ組織ヲ改良セラレタリト雖モ、未デ以テ完全無缺ト云フ能ハザルナリ。唯單ニ生活ノ方針ニ付一段落ヲ畫シタル而已ニシテ、機關士技士等ノ取扱及ビ技能ノ得失ヲ研究監査シ、各職掌ヲ定ムルノ順序ニ至テハ未ダ完全セザルガ如シ。之等ノ點ハ今日略ボ第一局ノ負擔スル處ナレドモ、考ヘ來レバ或ハ錯雜ノ觀ナキ能ハズ。果シテ夫レヲシテ過チナカラシメバ、之等ノコトヲ處理スルハ晩近ノ急務ト存候。仰ギ願クバ改良ノ方針ヲ取リ、統轄ノ區別ヲ明カニシ、監督ノ方法ヲ制定アランコトヲ。之レ既ニ時機迫レリト云フベキナリ。

抑モ機關學校合併シテヨリ、元此校ノ生徒タリシ者ハ今度土國航海ノ金剛、比叡兩艦ニ乘組シ候補生ニテ全數ヲ終リタリトス。此生徒等ハ此實業ノ末ニ至リテ後ハ本職ノ專門ニ進ムモノナレドモ、今日卒業者ノ一部分ニハ大臣ヨリ各自ノ方向ヲ問ハレテ始メテ專門ニ進マシムベシトノコト、想フニ此專門ニ進ムモノノ不幸ハ實ニ如何ゾヤ。誠ニ不都合ノ極ト云フベシ。

將又茲ニ未來ノ機關士ノコトヲ考フルニ、一期（四ケ年）生徒ノ募集ヲ延バスニ於テハ、先キ六七ケ年ニ至リテ人員不足ノ大困難ヲ生ズベシ。之レ道理ニ於テ然リトス。今之レニ比較スル一例ヲ擧グレバ、明治十四年榎本海軍卿ノ時、經濟不足ノ都合ヲ以テ一年生徒ヲ募集セザリシコトアリシガ、此結果ハ則チ明治十七年ノ比ニ至リ小官學校次長トシテ大ニ感ズルノミナラズ、大臣ニ於テモ其不都合ヲ說カレテ成ル可ク卒業ノ期ヲ早メンコトニ迄注意セラルルニ至リタリ。之レ正ニ確證スル處ナリ。故ニ今日ハ無形方針ヲ明カニナシ、未來ニ對スル統計ノ必要ヲモ講ゼザルヲ得ザルモノト存候。

購買部ノ件

購買部ヲ設クルニ付、小官斯ニ需用物品ノコトニ付曾テ聞見スル所ト其實驗トニ依リ思考スルニ、其取扱方法ノ如何ニ在テ著シキ得失ヲ視ル蓋シ鮮少ナラザルナリ。依之小官本職ノ餘暇毎ニ需用物品ノ輕視スベカラザルヲ知リ、往々探究之レ勉ム、然ルニ最モ親シク之ヲ實驗ニ徵セシハ專ラ西南ノ役之ナリ。當時小官艦隊指揮官ニ隨從シ、艦船及ビ陸地等ニ奔走周旋機務鞅掌ノ際、最モ困難ヲ感ジタルハ需用物品ノ件ナリ。當時未ダ兵器彈藥モ其進達ノ度滿足ナラザリシハ餘儀ナキコトト雖モ、通常物品ハ過半本邦品ナルニモ拘ラズ、之ガ調達ニ苦ム。況ンヤ外國品ニ於テヲヤ。若シ此時ヲシテ取扱順序ノ基礎確立セシナランニハ、何ゾ本邦品ニ限ラン。亦外國購買ニ係ル物品モ決シテ困難患フルニ足ラザルナラン。既ニ該役中實驗ニ於テモ之ヲ視ルニ、軍器兵具ノミ何ゾ重要ト云ハンヤ。通常物品モ時ノ場合ニ臨ミ其需用緊急ニシテ決シテ兵器ト何ゾ擇バン。既ニ鹿兒島灣ニ於ケル清輝艦ノ彈丸ノ如キハ勿論、諸需用品ニ至リテモ其調達ニ苦シミ、配置運搬其宜シキヲ得ザルヨリ、各艦ノ需用ニ對シ其供給ヲ缺キ、其苦情囂々トシテ實ニ名狀スベカラザル慘狀歎ヲ極メタリ。顧テ之レヲ考較シ來レバ、西南ノ役猶且斯ノ如シ。況ンヤ外國ニ事アルノ日ニ於テヲヤ。實ニ戰時ノ機務ヲ考味スレバ通常物品モ共ニ兵器ト需用ヲ同フス、若シ此調達ニ欠缺アルトキハ一艦一身ノ働キヲ爲シ得ザル理ニシテ、坐ナガラ樞要ノ機ヲ失スルニ到ラン。故ニ兵備品ハ勿論、通常物品モ概シテ購買運搬及ビ保存等ニ至ル迄、共ニ平素取扱ヲ整シ其練磨一日モ忽ニスベカラザルベシ。且亦小官舊火藥工廠長在職中、凡ソ一ヶ年餘實驗スルモノニ於テ、其錯雜多クハ物品購買ニ在リ。他ノ各廳及ビ艦船ノ如キモ同樣ノ錯雜スルコトアランモノトセバ、實ニ軍略上容易ナラザル事柄ニシテ、之ヲ深ク推測セバ海軍全部ノ豫算モ實算モ確實トシテ證據スベカラザルニ到ラン。既ニ舊火藥工廠購買ノ成リ來リハ全ク整理方法完全ナラザルヲ知ル。細カニ之ヲ考フレバ或ハ隱然タル弊害ノナキトモ云ヒ難シ。乍併現ニ此不整理ヲシテ將來ヲ慮ルニ、工場ハ勿論不知不識艦船ニ迄モ自然此慣害ヲ及ボスガ如キニ至ツテハ、恐クハ軍紀風紀ニ關シ重大ノ弊害ト云ハザルヲ得ズ。加之經濟的ニモ直接ナルヲ以テ、玆ニ諄々鄙見ヲ縷述スルノ止ムヲ得ザルニ臻レリ。而シテ其要ハ此弊害ヲ芟鋤スルノ方案ニシテ、卽チ鄙見ノ主眼ハ今般更ニ購買部ヲ設立セラレ、需用物品ノ事務ハ一途ニ包括シ該部ヘ收攬掌握セシメラレンコトヲ切望スルニ在リ。

既ニ去ル十九年督買部ノ設ケラレタル當時ニ在テ、弘一ハ之ヲ贊揚シ實ニ良法美擧ナルモノト信ジタリ。而シテ實際良法ナラザルハナシ。則チ其大體ヲ案ズルニ、購買ヲ一途ニ歸セシメ、配置調達ヲ綜理シ、細大遺スナシ。且經濟ノ點ヨリスルモ亦タ統計上ヨリスルモ明瞭確實眞ニ無上ノ得策タル明カナリ。然レドモ永ク該部ノ存在ヲ視ザルハ或ハ其細則ノ完カラザルモノ其一因ナラザルナキヲ得ンヤ。實ニ之ヲ遺憾ト云フベシ。此時ニ方ツテ兵學校ハ需用品ノ規定數ヲ豫量シ、需用ノ順序ト供給ノ節度ヲ算畫シ、年何回ト要求ハ時日ヲ定メ之ヲ督買部ニ求メタルニ聊カ差支ナカリシ。

乍併要求品物ノ好惡時ニ變易シ、實際不便ヲ免カレズ。夫レノミナラズ種々各廳ニ於テモ厭フモノアルヲ視ル。蓋シ之レガ不都合ノ原由ヲ査竅セバ固ヨリ督買部設立ノ大體ハ良法ニ相違ナキモ、取扱順序其細則ノ完全ナラザルヨリ、良法モ反テ錯雜シ、遂ニ其方針ヲ誤マルニ到ラシメタルナラン。進ンデ其缺點ヲ思測セバ或ハ一般ノ要求者ニ於テモ豫算方法緊密ナラザルモノナラン、亦タ供給者ニモ一定ノ識見完カラザルモノアラン。互ニ其良法ヲシテ欠缺セシメタルモノ其原因ニアラザルハナシ。既往ハ諄々之ヲ說クヲ要セズ、若シ今後新ニ購買部ヲ設立セラレンニハ左ノ條目ニ注意シ、良法ノ大體ヲシテ錯雜ナカラシメンコトヲ企望ス。

第一　要求者ノ規定方法ト豫算ノ確實ナクシテ要求セシメザルコト。

第二　該部員ノ之ニ應ズルニ細則ナル取扱順序ノ規定完全ナラシメ其執行ニ於テ不行屆ナカラシメンコト。

第三　要求者ノ規定豫算ノ得失ヲ能ク探知シ得テ之レガ要求ニ應ゼシムルコト。

第四　關係商人ノ得失ト購買部員ノ得失ト又之等ノ媒介ニ係ル情實トニ姑息ノ弊ナカラシムルコト。

右第一、第二、第三、第四トノ基立ヲ確定シ、然ル後チ能ク其方案ヲ定ムル以上ハ今年設立シ來年之レヲ閉廢スルガ如キコトハ有間敷ト存候。小官火藥工廠長在職ノ當時ニ在ツテ、逐一之等ヲ探知シ窃ニ之レガ整否如何ヲ試ミ、此例ヲ兵學校ニ取リシニ、兵學校ハ壯年者ノ如クニシテ、工廠ハ幼稚ト云ハザルヲ得ズ。然ラバ前項云フ所ノ如キ工廠ノ錯雜ト同一ノ成リ來リナルモノアラバ玆ニ矯正ノ方案ヲ講ゼザル可カラズ。

今又各物品ノ調査ヲ爲サンニ、若シ純然タル之レガ確實信證ヲ求ムルモ容易ナラザルベシ。然ルニ第一二三四ノ實績ヲ成功セバ信證シ得テ確實ナリ。既ニ舊工廠ノ如キ、去ル十九年、二十年ノ如キ不完全ハ要求者ノ豫算規定ナクシテ唯想像ニ依リ取扱レタルヨリ、其結果不適當ヲ來セシナルベシ。且又他廳ノコトニ於ケルモ、若シ工廠ト同樣ノモノニアラントセバ後患ヲ慮カラザルベカラズ。故ニ購買部ノ設立ヲ企望スルノ理由トシテ之レヲ證スル所ナリ。

猶又他ニ慮ヲ轉ズレバ、官制ヨリ見ルモ夫々重任者ハ軍令ノ基軸ヲ掌理シ、各部ノ統計ヲ標準トシテ軍令ヲ發行ス。而シテ其行ハルルト行ハレザルトハ統計整理ノ得失ニ據ルベシ。平常ノ研究ハ則チ有事ノ日ニ錯雜ナカラシメンコトヲ目的トス。然ラバ物品モ軍令ト共ニ同一ノ動作ヲナサザルベカラズ。若シ一需用品ヲ缺クトキハ一身ノ不具ニ陷リタルト同ジキ道理ニシテ、舊工廠ノ如キハ其製造一種類ナレドモ、造船部造兵廠ノ如キハ頻煩ノ數品ヲ製造シ、而シテ一品ノ成立チハ數種ノ雜品ヨリ成立ツモノアリテ、其一種一物ハ常ニ皆悉ク購買ノ手數ヲ觸レザルハナシ。然ル故不整理ナル購買方法ヲ改良セラルベキ期ニ到ルモ、或ハ法律外ニ人情ニ原因シテ招クノ妨害ハ是亦恐ルベ

シ。且又是非ヲ詳悉セズ、多數ニノミ賛同スルノ弊及ビ表面美樣ヲ飾リ事實ナキモノノ如キモ、亦タ一ノ害物ニシテ完全ナル良法ヲ妨ゲ、遂ニ得策良法モ之レガ爲メ挫破セラルルコトモアラン。然ラバ之レヲ能ク腦裏ニ顧ミ、玆ニ反復注意ヲ爲サザルベカラズ。依之此等ヲ査竅調理セント欲セバ、先ヅ左ノ順序ニ從ヒ大略設立ノ方針ヲ定メラレンコトヲ要ス。以上述ブル所ヲ以テ購買部設立ノ理由ハ粗概言スルト雖モ、未ダ盡サザルアルモノハ冀クバ口述ヲ以テ其細意ヲ開陳セシメラレンコトヲ。

第一　各工場及ビ艦船ノ實際取扱ヒノコトヲ調査シテ之レガ實計ヲ視ルコト。

第二　豫算ニ於テ確定シタル定數ト、實際ニ需用シタル數トヲ調査シ、之レヲ十九年ヨリ平均シテ其比例ヲ取リ、而シテ工場ノ製出高ト日數トヲ合セテ通計照算シ、亦タ工費材料等モ區別シテ明カニ調査スベシ。

第三　第一、第二ニ調査シタルモノヲ明カニシテ類別表ヲ製シナバ、歴年ノ得失其要點ヲ探知スルナラン。然ルトキハ是迄ノ施行順序及ビ始終ノ結果モ明瞭スベキヲ信認ス。且併セテ非常ナル經濟點ヲ見出スノミナラズ、統計ノ必要ヲモ發覺スルニ至ルベシ。

第四　右一、二、三ノ調査ニ依リ斷然設立スベキ其要點ヲ明カニ見ルニ至ルトキハ則チ其方法ヲ調査セラルベキヲ望ム。

右四條ノ調査順序ニ於テハ未ダ滿足ナラザルモノアルモ、漸次委員ノ吟味ニ依リ部門ヲ別チ詮議ヲ得テ確定セラレシナレバ、數年ヲ出ズシテ他ニ優出スル整理ノ組織ヲ得ラルベシ。仰ギ願クバ舊員ヲ一掃シ能者其人ヲ得テ趣意貫徹セラレンコトヲ希望仕候也。

明治二十四年五月

海軍大佐　伊地知弘一

海軍大臣子爵　樺山資紀殿

明治二十二年五月二十八日勅令第七十二號
鎮守府條例及ビ其他鎮守府ニ關係スル諸般條約例中條項ノ改正ニ係ル勅令

第一條　鎮守府條例第六條ニ定メタル鎮守府司令長官ノ官制ヲ左ノ如ク定ム。

鎮守府司令長官一人ヲ置キ海軍少將ヲ以テ之ニ補シ、海軍大臣ノ指揮ヲ受ケ所管海區ノ軍事及軍政ヲ統理ス。

但中將ヲ以テ司令長官ノ事ヲ行ハシムルコトヲ得。

第二條　鎮守府參謀長ヲ廢シ、參謀及祕書ハ司令長官ノ命ヲ受ル者トシ、鎮守府條例第十八條及其他參謀長ノ事務ハ長官之ヲ行フ。

第三條　鎮守府文庫主管ヲ廢シ其事務ハ祕書之ヲ兼掌ス。

第四條　軍港司令官及副官及司令官傳令使ヲ廢ス、軍港司令官ノ事務ハ鎮守府司令長官之ヲ行フ。軍港知港事ハ鎮守府司令長官ニ屬ス。

第五條　豫備艦長豫備機關長ハ其軍港ニ豫備艦ノ制度ヲ全備セザル間ハ之ヲ置カズ。

第六條　軍港ノ副知港事ヲ廢ス

第七條　要港ノ知港事ヲ廢シ其事務ハ要港司令官之ヲ兼掌ス。

第八條　鎮守府ニ造船廠ノ設アル場所ニ限リ造船部ヲ置ク、其他ハ之ヲ置カズ。造船部ヲ置カザル場合ニ於テ兵器部中製造課ヲシテ艦船屬具ノ製造修理及艤裝ヲ掌ラシムベシ。造船材料倉庫ハ材料課長之ヲ主管シ、別ニ倉庫主管ヲ置カズ。

第九條　主計部中病院課、衣糧課ヲ廢シ、病院ノ事務ハ部長之ヲ管理シ、衣糧課ノ事務ハ出納課ヲシテ之ヲ兼掌セシム。

第十條　兵器部ノ主幹及主計部ノ課長ハ總テ士官ヲ用ヰ上長官ヲ用ヰズ。

第十一條　鎮守府ニ監獄竝監獄課ヲ置クハ其必要ナル場所ニ限ル、其他ハ之ヲ置カズ。監獄ヲ置カザル場合ニ於テハ拘留所ヲ置キ知港事ノ管掌ニ屬セシム。

第十二條　鎮守府衛生會議ヲ廢シ各鎮守府ニ病院長トシテ軍醫大監又ハ少監一人ヲ置キ、司令長官ニ屬シ、他ニ藥劑官一人書記文官一人及必要ニ從ヒ軍醫看護手及其他ノ助手ヲ置キ、病院長ノ管理ニ屬セシム。

海軍衛生會議條例第十九、二十、二十一、二十二、二十三條ノ事務ハ病院長之ヲ行フ。

艦船軍醫ノ監督ハ總テ中央衛生會議議長ニ屬ス。

第十三條　各鎮守府ノ會計監督部ニ主計大監又ハ少監一人ヲ置ク。

第十四條　此勅令ニ依リ更ニ細則ヲ定メ、鎮守府條例及他ノ關係セル勅令ト疏通シテ施行スルハ海軍大臣ノ任タルベシ。

衛生會議條例ニ依レバ院長一人軍醫長一人定員軍醫五人監軍一人少監一人大監一人書記大軍醫一人兼府職員一人兼輔職員一人ハ鎮守府ノ他ノ軍醫二人ヲ以テ輔ヲ以テ議ヲ

明治二十四年四月十一日

有地海軍中將

海防意見書

恭テ惟フニ、陸海ノ軍備ハ内外ノ平和ヲ保全スル爲メニ歳ヲ積ミテ完實ヲ期セザル可ラズトハ辱クモ　皇帝陛下ノ詔勅アラセラレ玉フ所ナリキ。我海軍大臣閣下モ既ニ海軍ノ擴張ヲ計畫セラレ、曩キニ議會ニ於テ此六七年間ニ十二萬噸ノ軍艦ヲ保タンコトヲ欲スト明言セラレタレバ、着々其方針ニ進歩セラル可キハ疑ヲ容レザル所ナリ。然ルニ財政上ノ許否ハ是ガ直接ノ關係ヲ有スルモノニ付、專ラ軍機ノ參畫ニ任ズル當局者ノ擴張策モ自カラ財政問題ノ爲メニ牽掣セラレ、往々其目的ヲ果タスコト能ハズ、其立案ヲシテ空シク筐底ニ埋藏セシムルハ實ニ慨痛ニ堪ヘザル所ナリ、抑モ海軍ノ强弱ハ大ニ國權ノ消長ニ關係スルモノナレバ、其主義ヲ決定シ其標準ヲ確立シ、其程度ニ達スル迄斷乎トシテ長足ノ歩ニ進マザルベカラズ。今ヤ國勢ヲ觀察スルニ海軍ヲ振起シテ海防ヲ整頓スルハ立國上猶豫ス可ザルノ時ナリ、又茲ニ輿論ノ傾向ヲ聞見スルニ海軍ノ擴張ヲ論ズルモ財政ノ點

ヨリ其成效ヲ數十年ノ後ニ期シ、甚キニ至テハ海軍ノ擴張ハ費用ノ莫大ナルヲ空想シ其利害ノ歸スル所ヲモ研究セズ、徒ニ傍觀スル者アリ、サレバ當局省ノ外此六七年間ニ我國ヲシテ東洋ニ於ケル海上ノ威力ヲ壯大ナラシムルノ方策ヲ說ク者アラザルヤ明ケシ、是ヲ以テ本官ハ今日ノ形勢ニ於テ我海軍ヲシテ先ヅ守勢上、即チ國防上必要トスル勢力ヲ得セシメンコトヲ熱望シ、我國ノ位地ト形勢トヲ考ヘ、以テ其國防艦隊ヲ編制ス可キ軍略上ノ要點ト作戰上ノ計畫トヲ案ジ、此六七年間ニ新造ス可キ其艦種ノ選擇及其費用ノ支出ニ關スル意見ヲ左ニ略述シ、以テ　詔勅ノ聖旨ト大臣閣下ノ盛意トニ協ハントス。

抑モ守勢上、即チ國防上ニ就キ海軍ノ主義程度ヲ確定センニハ敵ノ我ニ對スル攻勢方略ヲ專ラ講究セザルベカラズ。今我海軍ノ勢力敵ヨリ極メテ薄弱ナルモノトセン乎、彼ハ輙チ我沿岸又ハ島嶼ニ於ケル無備ノ灣港ヲ占領シテ、其根據ノ地ヲ定メ然ル後大ニ我ヲ攻擊ス可キ方略ヲ取ルナラン。若シ我海軍彼ニ比シ充分ノ勢力ヲ有スルモノトセン乎、彼ハ直ニ我地ニ攻擊ノ勢力ヲ集中スル能ハズ、先ヅ我海軍ヲ擊破シ以テ我ヲ懾服セシム可キ方略ヲ取ルナラン。爰ニ敵ノ海軍ハ我海軍ヲ擊破スルノ目的二途アリ、即チ軍港及艦隊是レナリ、因テ我軍港ハ假令艦隊ノ應援ヲ得ザルモ、常ニ敵ヲシテ容易ニ攻擊セシムル能ハザルノ防禦ニ遺策ナカラシムルハ勿論ナレドモ、我艦隊ハ作戰上彼艦隊ヨリ强大ナラザレバ我ニ勝算ナキモノナリ。故ニ我ニ於テモ國防ノ本體ナル强大ノ艦隊ヲ備ヘ

ザル可カラズ。而シテ此艦隊ニ要スベキ艦種ト艦數トノ點ニ至テハ須ラク我國ノ位地ト政略上關係ヲ有スル諸外國海軍ノ勢力トニ依テ之ヲ定ムベシ、而シテ敵ノ艦船派遣ノ便否及軍需供給ノ許否如何ハ最モ考察セザル可カラザルノ一緊要事トス。彼レ苟モ我地ニ迫リ我艦隊ヲ擊破セント欲セバ必ズ彼ハ我ニ勝ルノ勢力ナカラザル可ラズト雖ドモ、彼ノ歐洲强國ノ國防ニ充ル所謂戰鬪艦ト稱スルモノノ如キハ、到底我近海ニ軍需ノ供給點ナキ以上ハ決シテ之ヲ派遣スルヲ得サルベシ、故ニ今日我國防上ニ强大ナル艦隊ヲ有シ以テ彼ガ我ニ加ヘント欲スル勢力ヲ減殺スルヲ努メザル可カラズ。因テ速カニ意ヲ決シ一萬噸乃至一萬二千噸ノ戰鬪艦六隻、卽チ敵ノ巡航艦十八隻ニ匹敵ス可キモノヲ備ヘ、軍略上我要點ニ之ヲ浮ブルヲ緊急ノコトナリトス。更ニ之ヲ詳說スレバ現在蘇士運河ノ深サハ二十八呎ニシテ、實際吃水二十五呎迄ノ軍艦ニ非ザレバ通航シ難キガ故ニ、歐洲ヨリ我勢力ニ超過スル戰鬪艦ヲ派遣セント欲セバ必ズヤ喜望峯ノ遠路ヲ囘航スルノ外ナシ、而シテ斯ル迂遠ノ航路ヲ取ルハ決シテ能クスベキコトニ非ザルナリ。今ヤ英佛露伊西ノ五ケ國ノ著名ナル戰鬪艦ノ炭量ヲ平均スルニ一艦ニ付八百七十七噸餘ナリ、戰時中全速力ニシテ一晝夜ノ費量ヲ計算スルハ凡ソ三百二噸四アリ。然レバ其全量僅ニ二日半餘ヲ繼續シ得ベキ計算ナレドモ、若シ之ヲ經濟速力ニテ消費セバ凡ソ一晝夜一百七十二噸八ニテ五日間ヲ繼續シ得ン。先年佛國ノ大演習ニ於テ一等艦ノ積炭量ハ五日間ヲ繼續セシト。此頃我海軍顧問「イングルス」氏ノ言ニ據ルモ亦戰鬪艦ノ積炭量ハ其實辛フジテ三日間支フルコトヲ得ント。故ニ右全經二種ノ速力ヲ平均センカ四日毎ニ其積入ヲ爲サザル可カラズ。是ニ由テ一萬噸ノ軍艦一隻ニ於テ一日石炭凡ソ二百噸ヲ消費スベシ。假ニ四隻ヲ派遣スルモノトセンカ凡ソ一週間五千六百噸ヲ要セザルヲ得ズ。夫レ東洋諸國局面ノ上海、香港ニ於ケル石炭ノ多量ハ日本ノ輸出ニ係リ、今之ヲ外國炭ト比較スルニ九倍乃至七倍ナリ。故ニ其輸出ヲ絕タバ此需要炭量ハ殆ド供給ノ途ナカルベク況ンヤ我近海ニ來テヲヤ。此ノ如キ事情ナルガ故ニ我ヲ攻擊スル敵國ハ平時如何ナル盛大ナル海軍ノ勢力ヲ有スルモ到底戰時緊急ノ場合ニ及ンデ强大ナル戰鬪艦ヲ派遣シテ其勢力ヲ逞クスルヲ得ズ。由テ彼ハ已ムヲ得ズ、巡航艦ニテ編制シタル艦隊ヲ遠ク派遣スルニ至ルベシ。然ルニ强大ナル艦隊ノ編制法ハ戰鬪艦ヲ本體トシテ、之ニ巡航ヲ附屬シテ交戰セシムルモノナルニヨリ、我海軍ハ新タニ戰鬪艦六隻ヲ造リ、之ニ加フル既成既畫ノ軍艦ヲ以テシ、以テ艦隊ヲ編制セバ我沿海軍ヲ要擊、若クハ封鎖シ得ルコト實ニ容易ナラン。然ラバ則チ其戰鬪艦六隻ニシテ計六萬噸乃至七萬二千噸ヲ增加スレバ、是レ實ニ我國防ノ實ヲ擧グルモノニシテ便チ海軍ノ勢力ヲ强大ナラシメ、其結果ハ以テ東洋ノ海上權ヲ掌握スルニ至ル可キト心セリ。

然レドモ、玆ニ最モ苦慮スベキハ製造費ノ點ナリ、今一隻ヲ六百萬圓乃至七百萬圓ト見積レバ六隻ニテ三千六百萬圓乃至四千二百萬圓ヲ要ス。然ルニ今日ノ我國力ハ斯ル巨大ナル金額ヲ支出スルヲ得ベキヤ否ヤヲ考フルニ、我國ハ歐洲各國ノ如ク國債ヲ募ルヲ要セズ。又妄ニ他ノ財源ヲ求ムル

ノ必要ナシ。既ニ本年議會ニ於テ議決ノ上節減セル政費六百五十餘萬圓ハ實ニ是レ適當ナル財源タル可キヲ信ズ。蓋シ議會ガ此節減ヲ議決シタル所以ノモノハ民力休養ノ目的ヲ達セントスルニ外ナラザルハ彼ノ地租條例改正案ノ衆議院ヲ通過セシヲ以テモ知ルベクシテ、其目的ハ誠ニ美ナリト雖ドモ、然レドモ地租ヲ輕減シテ民力ヲ休養スルモノ果シテ幾何カアル。是レ目前ノ小利ヲ見テ國家ノ大計ヲ顧ミザルモノト謂ハザルヲ得ズ。夫レ我國ノ現況ヲ一顧スレバ條約ノ改正未ダ成立セズ、通商ノ權利未ダ發達セズ、焉ゾ能ク此ノ如クニシテ東洋一帝國ノ名聲ヲ煥發スルヲ得ンヤ。仍テ二十五年度ヨリ向フ五ケ年間卽チ二十九年度迄地租ノ輕減ヲ允サズ、之ニ代フルニ海軍ノ擴張ヲ實行セシムルニ至ラバ六隻ノ戰鬪艦ヲ海上ニ雄飛セシメ以テ國家ノ干城トナルコトヲ期スベキナリ。而シテ其戰鬪艦ノ命數少クトモ二十年ト豫定シ及其製造ニ五年ヲ費スモノトセバ其間外敵ノ睥睨スルニ足ルモノトス、我國四千萬ノ人民ハ既ニ立憲政治ノ下ニ相立ツモノナリ。又地勢ヲ觀察スレバ實ニ一萬五千二百里ノ海岸アリテ良港要灣甚ダ多ク且ツ石炭ノ產出ニ富ミ自カラ世界ノ一大商業區タリ、今ヤ既ニ「ニカラグワ」或ハ「パナマ」運河ノ開通ニ着手セリ。其竣工ヲ見ルニ及ンデハ我日本ハ交通上現時ノ如キ絕東國ニ非ズシテ東洋貿易ノ中心ヲ占メ、其衝路ニ當リ大ニ貿易ノ發達ス可キハ實ニ明白ナリ。サレバ其影響ノ及ブ所遠大ニシテ之ガ爲メ東洋ノ局面ハ一變シ外國ノ交涉ハ益々頻繁ヲ來スニ至ラン、而シテ其時ハ我國ノ最モ多ク望ヲ屬スル時ニシテ亦最モ多ク患ヲ生ズベキノ時ナリ。其時ニ至リ甫メテ海軍ヲ擴張スルノ必要ヲ感ズル如キアラバ臍ヲ噛ムモ及ブ無キモノナリ。苟モ軍國ノ事ニ任ズル者ハ今日ニ於テ豫メ計畫スル所ナクシテ可ナランヤ。語ニ曰ク、天ノ未ダ陰雨セザルニ及ビ牖戶ヲ綢繆スト。

以上陳述セシ所ノ計畫ヲ實行セラルルニ至ラバ條約改正ノ實效ヲ見ルコトハ勿論、平時ハ貿易ノ安全ヲ保護シ以テ東洋ノ商權ヲ握ルコトヲ得、戰時ハ强敵ヲ海上ニ邀擊封鎖スル等ノ運動ヲ爲スハ自在タルベキナリ。斯ノ如クニシテ始メテ日東一帝國ノ眞面目ヲ發揚シ併セテ民力休養ノ實利ヲ亨有セシムルニ庶幾ラン乎、希クバ此計畫ヲ稱贊シ以テ直ニ之ヲ實行セラレンコトヲ。尙ホ詳細ノ造船計畫等ハ其主務者ニ調査セシメラレ度候也。

明治二十四年四月十一日

海軍改革意見

一、海軍ノ改革ハ分チテ兩段トセザルベカラズ兩段トハ、

一　大綱

一、海軍大臣及次官タルノ資格ヲ改定ス

二、海軍本省ノ武官組織ヲ改ム

三、將官佐官ノ定員ヲ限ル

四、鎮守府ノ制ヲ改ム

二　細目

一、鎮守府及各所ノ工事ヲ縮減ス

二、士官養成ノ法ヲ定メ海軍教育ノ制ヲ設ケ、軍醫及主計學校ヲ廢ス

三、豫備戰艦ノ制ヲ設ク

四、會計ヲ整理ス

五、現役士官及屬官ヲ減少ス

六、海法委員ヲ設ク

七、北海道軍港及千島調査

右大綱ハ帷幕ニ於テ　宸斷ヲ以テ之ヲ定メラレ、其細目ハ當局其人ヲ待チテ之ニ委任セラルベシ。

一、海軍大臣ノ資格ハ必シモ武官ニ限ラザルコト今日ノ便宜ナルベシ。次官モ亦同ジ、但米國ニ倣ヒ大臣ハ武官ニ限ラザルモ、次官ハ必ズ武官トスルモ亦可ナラン。此問題ニ付軍令軍政ノ區別スベキヲ論ジ、從テ海軍司令本部ヲ設クルノ必要ヲ說ク者アリ。杉田氏建議　然ルニ軍令軍政ノ形式ヲ區別スルハ固ヨリ善シト雖、海軍省ノ外ニ別ニ司令本部ヲ設クルニ至リテハ却リテ政令多岐ノ弊ヲ生ゼントス。各國ノ例ヲ按ズルニ、大抵海軍省ヲ以テ海軍司令本部ヲ兼ネ、或ハ省ノ下ニ參謀部ヲ置クコト佛國ノ例ニ同ジ。彼ノ獨逸國ノ如キハ千八百五十九年　海軍局ヲ軍政部、軍令部ノ二部ニ分チタレドモ、六十一年ニ至リ海軍局ヲ改メテ省トシ、七十一年ニ軍令部ノ事部ヲ以テ海軍大臣ニ委任セリ。

一、海軍本省ノ武官組織ヲ改ムルハ固ヨリ當然ノ事ナリ。風ヲ冒シ濤ヲ蹴ルノ士ヲシテ薄書刀筆ニ從事セシメ、或ハ製圖編纂ノ學士ヲシテ進級條例ノ拘束ヲ受ケ、海上勤務ニ從事セシムルハ尤モ不便ノ制タリ。今之ヲ改ムルニ躊躇スベキニ非ズ。海軍省ニシテ軍人ニテ兼掌セシムルノ現制ニ

依ルトキハ、各局課ノ性質ニ從ヒテ或ハ武官ヲ用ヰ（參謀本部ノ如キ）或ハ軍屬ヲ用ヰ（主計軍醫技術士）或ハ文官ヲ用ヰ（會計文書糧食法規等）ザルベカラズ。（伊國海軍組織一覽表ヲ見ヨ）

一、將校ノ定員ヲ限ルハ尤モ必要ノ急務タリ。彼ノ米國ノ如キハ大將一人中將一人少將十人大佐二十人少佐三十五人、蓋シ一將校ニ配スル水兵三十人ニシテ我ガ國ハ現在中將五人少將八人大佐四十五人少佐□□人ノ多キニ至リ、蓋シ一將校ニ配スル水兵十人ニ充ルニ至ラズト云フ。此ノ如キ多數ノ現役將校ヲ使用スル爲メニ鎮守府ノ制置張大ニ過ギ、各鎮守府ニ中將ノ長官ヲ置キ之ニ附屬スル參謀部及各部局アリ（大佐少佐各一人）、而シテ又少將ノ軍港司令官ヲ置ケリ。（之レ蓋シ佛國ノ制ニ倣ヘルモノニシテ英國ノ如キハ各海區ニ必シモ鎮守府ヲ置カズ其鎮守府ヲ置クモ亦中將或ハ少將ノ司令官アリテ他ニ軍港司令官ナシ）船艦ニ在リテ米國ノ如キハ大艦ニ大佐一人大尉五人或ハ六人、中艦ニ少佐一人大尉三人或ハ四人ナルニ、又軍醫主計技監各一人或ハ二人ナルニ、我ガ高千穗艦ハ大佐一人少佐一人大尉七人ニシテ、軍醫少監主計監機關少監各一人、軍醫主計機關士各々二人ナリ。世人爲人設官ノ酷評ヲ爲スハ蓋シ之ガ爲ナリ。今將校ノ定員ヲ減ジテ現今ノ三分一ヲ存シ、他ハ皆豫備員トナスベシ、之レ改革目中ノ至大至難ナルモノナリ。

一、鎮守府ノ制ハ縮小ヲ主トシ一ノ軍港司令官ヲシテ海區方面ノ事務官ヲ兼ネシムルヲ以テ目的トスレバ足レリ。今ノ制ハ一面ニハ海軍省ノ出張所トシテ一方面ノ軍政ヲ行ヒ、一面ニハ又時アリテ一方面ノ艦隊ヲ指揮スルコトアリ。（二十四年海軍演習ノ時）頗ル誤謬ニ陷ルモノト謂フベシ。（露國浦鹽港ノ海鎮長官少將エルモラーエフ氏ハ西比利艦隊司令官ヲ兼ヌ之レ稀ニ見ルノ例ナリ）今吳、佐世保、横須賀ノ三府ヲ縮小シ、其經費ヲ移シテ速ニ舞鶴及北海道ノ一軍港ニ二等鎮守府ヲ置クコトニ着手セリ。

以上四件ノ改革ヲ行フ爲メニハ海軍省官制將校分限令、進級條例定員表、鎮守府條例等ノ改正發布ヲ要ス。

其他ノ細目ハ之ヲ當局ニ委任シテ改正セシメ、裁可ノ後施行セシメラルベシ。

右草々錄呈スルヲ以テ各國ノ統計ノ如キ差謬ナキヲ保シ難シト雖モ、亦其大猷ヲ誤ラザルヲ信ズ。伏乞諒恕。

獨逸千八百七十一年六月十五日ノ上等海軍廳執務規程

海軍上等指令部ノ組織及職員ヲ解キ本年同日ノ勅令ヲ以テ其職掌ヲ海軍大臣（海軍省）ニ委任シ

タルニ付、朕ハ海軍事件ヲ統一ニ指揮セシムル爲メ及上等海軍廳ノ事務ヲ執行セシムル爲メ左ノ規定ヲ定ム。

一、海軍省ノ事務ハ獨逸海軍ノ編成、維持、改進及使用ニ關スル一切ノ事件ヲ包括シテ餘ス所ナシ。千八百七十年七月二十九日ノ勅令ヲ以テ臨時設置シタル指令部ハ自今猶存立シ、海軍省ノ一部ト成リ海軍大臣ノ機關トシテ其事務ヲ掌ル。

二、海軍大臣ハ海軍省內部及該省ト所屬行政廳トノ間ノ執務整理ニ關シ行政長トシテ有スル所ノ權利義務ノ外、自今亦從來上等指令部ニ屬セシ職權及上等裁判權竝ニ懲戒權ヲ委任セラルルモノトス。

三、海軍大臣ノ下ニ總長(ブレンゼス)ヲ置キ海軍省ノ事務ヲ指揮セシム。總長ハ諸般ノ關係ニ於テ大臣ノ常置代理人ニシテ、該省ノ總職員及海軍行政ノ總職員竝官廳ハ皆均ク之ニ從屬ス。總長ハ海軍一切ノ行政ヲ整理統一シ、且確實ナルコトニ付共同ノ責ニ當リ又海軍大臣ノ獨裁ニ依ラザル一切ノ事件ヲ獨立シテ裁決シ及之ニ署名ス。

總長ハ師團指令官ノ懲戒權ヲ有シ又故障アルトキハ大臣ヲ代理スルコトアル場合ノ爲自己ニ委任セラレタル上等裁判權ヲ有ス。

四、朕親ラ發セザル指令事件ニ關スル總テノ處分及命令ハ自今海軍大臣ノ署名ヲ以テ又ハ其代理トシテ總長之ヲ發スルモノトス。

五、從來職員ノ身事ニ付上等指令部ヨリ直ニ朕ニ上奏シタルモノハ後來總長ノ具申ニ依リ海軍大臣ヨリ之ヲ上奏シ、朕ノ裁決ヲ經タル後該大臣ヲ經由シテ海軍省ニ致シ之ヲ公布執行スルモノトス。

六、從來上等指令部ヲ經由シテ鎭守府及艦隊指令官ニ達セシ海軍大臣ノ行政規則及命令ハ自今海軍大臣又ハ海軍省ヨリ直接ニ鎭守府、艦隊指令官、海軍會計官(インテンダント)及地方行政廳ニ達スルモノトス。

七、朕ガ命令竝朕ノ名及委任ニ於テ發布シタル海軍諸規則ノ執行ヲ監督スル爲、海軍各部ヲ常期ノ檢閲ニ付ス。此檢閲ハ海軍監督長又ハ海軍大臣ノ命ニ依リ年資最高ノ海軍將校之ヲ行ヒ、監督長ヨリ直接ニ其結果ヲ朕ニ上奏スベシ。監督長檢閲ヲ行フニハ常備艦隊、海軍各部及營造物ノ爲發布シタル編製規則及行政規則ノ執行如何ノ狀況ヲ檢査スルニ止ムベク、監督長ハ之ガ爲海軍省ヨリ時々海軍ニ關係アル一切ノ編製及規則ノ通牒ヲ受クルモノトス。

八、海軍大臣ニ於テ編製及技術上ノ問題ヲ解ク爲、海軍省ニ屬セザル經驗ニ富ム將校及技術ニ達スル鑑定人ノ意見ヲ要スト認ムルトキハ、該大臣ハ從來ノ如ク海軍顧問會ヲ召集シテ會議ヲ開キ、之ニ問題ヲ提出シテ意見ヲ述ベシムルノ權ヲ有ス。海軍監督長ハ海軍顧問會ノ常定員ニシテ、其他海軍大臣ノ指定シタル省員及其召集シタル將校、官吏及技術家ヲ以テ組織シ、該大臣之カ議長ト成ル此會議ニ付テハ議事筆記ヲ作リ各議員ノ署名ヲ具ヘ海軍省ノ公文トシテ之ヲ保存スベシ。

九、海軍會計官ハ海軍省ニ對シ從來ノ地位ヲ存有シ時宜ニ依テハ上等指令官タル資格ニ於ケル海軍大臣ノ報告員(レポレント)ト成ル。

十、總テ此規則ニ抵觸スル成規ハ廢止ス。

「リヨン子」氏孛國々法論　第一卷第六百八十丁

獨逸海軍局(アドミラリテート)ハ獨逸帝國ノ官廳ニシテ、孛國ト一モ連絡ヲ有セズ。故ニ孛國海軍省ハ現今成立セズ。是ヨリ先北獨聯邦ヲ創立スル前孛國ニ海軍アリ、其指揮監督ヲ假リニ陸軍省ニ委任シタリ（千八百四十八年九月五日ノ勅令）其後千八百五十三年十一月十四日ノ勅令ヲ以テ之ヲ陸軍省ヨリ分離シテ獨立ノ中央廳ト成シ、海軍省(アドミラルテート)ノ名稱ヲ付シ、指令及行政ノ事ヲ掌ラシメタレドモ、又千八百五十九年三月十四日ノ勅令ヲ以テ千八百五十三年ノ勅令ヲ廢シ、海軍局ノ組織ニ改革ヲ施シ、海軍ノ行政ヲ掌ル所ノ部ト上等指令ヲ掌ル所ノ部トニ分離シタリ。終ニ千八百六十一年四月十六日ニ至リ又勅令ヲ發シテ千八百五十九年ノ勅令ヲ廢シ、海軍局ヲ改メテ海軍省ト成シ從來ノ事務ヲ掌ラシメタレドモ上等指令部ハ依然トシテ存立セリ。（其後七十一年ノ改革アリ）

桂太郎起草侍中武官條例及侍中武官服務規則ノ件

小官等昨明治十七年閣下歐洲巡視ノ際隨行被仰付特ニ該洲各國宮中侍中武官ノ組織及ビ其職制ノ取調ヲ命ゼラレ且我國侍中武官ノ組織及ビ其職制案調査之事ヲモ併セテ命ゼラレタリ然ルニ各國滯在ノ日多カラザルヲ以テ從テ其取調之件ニ至テモ餘ス所少ナカラズト雖ドモ彼ニ依リ是ニ就キ其組織及職制ノ大半ヲ調査シ彼ノ制度中我國ニ適當スベキ者ヲ取リ侍中武官條例及ビ侍中武官服務規則ヲ起稿ス依テ右草案幷ニ各國侍中武官之組織及ビ職制等相添復命仕候也

明治十八年六月

陸軍少將　桂　太　郎

陸軍少將　川　上　操　六

陸軍卿伯爵　大　山　巖殿

侍中武官條例

第一條　凡ソ侍中武官ノ職ハ、宮闈ニ伺候シテ兵事ニ關スル上旨ヲ宣令シ、又ハ兵事諸般ノ顧問ヲ奉ゲ、及ビ祭儀禮典宴會親臨謁見等ニ陪從シ出入扈從シテ常備補衛ニ任ズルモノトス。

第二條　凡ソ交際國ノ君主或ハ皇族來訪ノ事アルトキハ之ヲ送迎シ、滯在中之ニ給仕シ、且其國ニ於テ祭儀禮典等ノ大禮アリテ、特派大使若クハ公使ノ差遣ヲ要スルトキハ侍中武官其職ニ任ズルコトアルベシ。

（符箋）此條ヲ除ク

第三條　侍中武官ハ陸海軍將校ノ中左ノ諸官ノ者ヲ以テ之ニ兼任ス。

陸軍將官	若干名	
內一名ハ侍中武官長ニ兼任ス		
步兵佐官		同
騎砲工兵少佐		同
海軍佐官		同
步騎砲工兵尉官		同
海軍尉官		同

第四條　侍中武官ハ上旨ヲ奉ゲテ皇太子及ビ皇族ニモ常侍セシム。

第五條　侍中武官ヲ撰任スルハ參謀本部長陸軍卿ト合議シ、上旨ヲ奉ジ、陸軍及海軍ノ將校中其學術ニ精通シ、其實際ノ事業ニ練熟シ性質直實行狀方正ナル者ヲ拔擢シテ或ハ之ヲ專務トシ或ハ之ヲ兼務トス。

第六條　將校ノ中老練ニシテ兵事ニ熟達シ勳勞拔群ノ者ハ特旨ヲ以テ侍中武官ニ任ズルコトアルベシ

第七條　兼務ノ侍中武官及特旨ニ出ル侍中武官ハ臨時扈從スルノ榮典ヲ帶ブル者ニシテ常侍當直ヲナサズト雖モ他ノ侍中武官ト同ジク宮闈ニ出入スルコトヲ得。

（附箋）條兼務及特旨ニ出ツル侍中武官常侍扈從及當直ヲナサスト雖ドモ沙汰ニヨリ臨時扈從スル榮典ヲ得ルモノトス

第八條　侍中武官ハ陸海軍諸般ノ學術武器兵史兵事誌及ビ操練技術等ニ係ル顧問ヲ奉ルコトアラバ、其事由ヲ審カニシ其景狀ヲ明カニシテ之ヲ上奏スベシ。

第九條　陸海軍ノ兵備鎭臺鎭守府要塞砲塾艦隊隊伍造船所諸兵學校砲工兵方面砲兵工廠及ビ檢閱徵兵形法刑法軍紀操練資給軍需等ノ事ニ就テ顧問ヲ奉ルコトアラバ、其所轄ノ關係ヲ審カニシ、陸軍省參謀本部監軍部近衞若クハ海軍省鎭守府等ニ通牒シ該事件ニ對スル精密ナル報告ヲ採テ上奏シ、或ハ上旨ヲ奉ジ其主任長官ヲシテ直チニ之ヲ上奏セシムルコトアルベシ。

（附箋）第一條ハ同ニ記載ニ性質ナルニ付ク

第十條　觀兵行軍野外演習艦隊操練及ビ內外ノ艦船等ニ親臨アル時ハ侍中武官扈從シテ宣令ノ職ニ

任ジ、又騎馬泛舟田獵馳驅等ノ御遊及ビ各地巡行等ノ時ニ於テモ亦扈從スルヲ例トス。

第十一條　戰時或ハ非常ニ際シ親征ノ事アル時ハ、參謀本部長陸軍卿海軍卿ト合議シ、上旨ヲ奉ジ、陸海軍一般將校中ヨリ其器幹アル者ヲ精撰シテ侍中武官ノ員ヲ增加ス。

第十二條　親征ノ時ニ於テハ侍中武官ハ專ラ宣令使ノ任ヲ掌ルモノトス。

第十三條　宮闈ニ扈從シ、竝ニ宮中ノ禮典ニ陪會シ、及ビ宮中ノ法令規則ヲ遵奉スル等ノコトニ當テハ侍中武官ハ總テ宮內省官員ト異ナルコトナシ。

第十四條　侍中武官ハ顧問宣令ノ事及ビ各兵科專門ノ事ニ從事ス。而シテ其主務管掌ノコトハ每週土曜日侍中武官長ヨリ後週ノ課程ニ付キ上旨ヲ奉ジテ其事ニ從ハシム。若シ各自直チニ上旨ヲ奉ゲタル時ハ之ヲ侍中武官長ニ報ジ、其事ヲ竣レバ侍中武官長ヲ經テ上奏ス仍ホ解說ヲ要スルコトアラバ自ラ隨從シテ之ヲ進言スルコトヲ得。

第十五條　侍中武官ハ上奏進言ノ際政治ノ得失ヲ議シ、現行實施ノ軍政兵備等ノ是非利害ヲ論ジ、及ビ人臣ノ賢否ヲ評スルコトヲ許サズ。

第十六條　侍中武官ハ其徽章トシテ左臂上ニ菊花（白絹金緣形チ如圖）ノ臂章ヲ着ク。

（符箋）二枚

符　箋　△

其一

第十三條　侍中武官ハ陸海軍兵事ニ關スル事柄ヲ除クノ外、宮中ノ法令規則ヲ遵奉スルコト宮內省官員ト異ナルコトナシ。

其二

第十三條　侍中武官ハ宮闈ニ伺候シ、祭儀禮典宴會親臨謁見等ニ陪從スルヲ以テ陸海軍兵事ニ關スル事柄ヲ除クノ外、宮中ノ法令規則ヲ遵奉スルコト宮內省官員ト異ナルコトナシ。

侍中武官服務規則

第一條　侍中武官ノ職掌ハ侍中武官條例ニ揭示スト雖トモ、尙ホ其服務ノ細目ヲ定ムルコト左ノ如シ。

第二條　侍中武官長ハ侍中武官ニ關スル諸般ノ事務ヲ總判シ、兼テ其勤怠能否ヲ監視スベシ。

第三條　侍中武官長ハ每日午前第九時ヨリ上直シ、事ナキ時ハ午後第三時ニ退出ス。但上旨ヲ請ヒ允許ヲ受クルモノハ此ノ限ニ在ラズ。

桂太郎起草侍中武官條例及侍中武官服務規則ノ件

侍中武官ハ交番ヲ以テ毎日正午ヨリ翌日正午マデ當直スベシ。

第四條　侍中武官長ハ毎日午前第十一時當直ノ侍中武官ヨリ其當直ノ報告書ヲ受領シ、點檢シテ事ノ進奏スベキモノハ直チニ之ヲ上奏スベシ。

第五條　侍中武官長ハ宣令スベキ上旨、及ビ指令スベキ事件ハ直チニ之ヲ侍中武官ニ命ズルヲ例トス。

第六條　侍中武官交番當直ノ法ハ陸軍佐官一名尉官一名及ビ海軍佐官一名尉官一名トス。其順次ハ其官級ニ應ジ同級ハ停年ノ席次ニ從フ。若シ疾病事故アル時ハ佐官ハ佐官尉官ニ尉官ト交換スベシ。

第七條　侍中武官長以下ノ局室及侍中武官ノ寢室ハ宮中ニ於テ各別ニ之ヲ置キ、其場所ト員數ハ適宜ニ從フ但傳詔局ハ宮中武官互ニ兼用ス。

第八條　侍中武官ハ毎日午前第九時一同宮中ニ伺候シ、侍中武官長ノ局室ニ會シ、侍中武官長ヨリ指令スルコトアレバ其事務ニ服シ、事ナケレバ當直人員ノ外皆退出スルヲ許ス。

但其事務ニ服スルモノハ其事件ト其緩急トヲ量リ宮中ニ於テスルト自宅ニ於テスルトハ總テ侍中武官長ノ處決ニ任ズ。

第九條　侍中武官ノ服裝ハ左ノ定規ニ從フ。

第一　祭儀禮典朝拜參賀宴會謁見及ビ外賓ノ謁見若クハ親臨其他儀仗盛會等扈從スル時ハ陸軍將校ハ正裝ヲ用ヒ海軍將校ハ大禮服ヲ用フ。

第二　常時當直ニハ陸軍將校ハ軍裝ヲ用ヒ海軍將校ハ常服ニ肩章ヲ附ス。

獨逸國宮儀拔萃

抑モ武科的華麗全體ナルモノハ單ニ所謂日常現勤ノ侍中武官ノミヲ云フニ非ズ。廣ク華麗ノ意味ヲ擴張スレバ彼ノ衞城隊及衞城戍番モ亦此體ニ屬スベシト雖、姑ク說述本旨ヲ緊執シ、玆ニ侍中武官〔但シ原語ハ羅丁語ニテ adjutans ト云ヒ佛語ニテ aide de camp ト云ヒ獨逸語ニテ adjutant ト云ヒ齊シク「戰時ニ於ケル加功者或ハ加功スル士官」ト云フ義ナリ故ニ侍中武官ノ譯ハ甚タ穩當ナラズ寧ロ參贊或ハ陪從武官ト譯シテ可ナルガ如シ〕ノ組織及職掌ヲ說クベシ。但シ組織職掌及人員ノ多少等ハ各國ノ大小幷ニ其君主嗜好ノ特殊アルニ準ジ、彼此甚ダ不同ナレドモ、獨魯澳三國ニ於テハ一ニ大同小異アルノミ依テ單ニ獨國ノ規例ニ據ル。

獨逸皇帝ニ陪從スル武官ノ等級ハ別ツテ之ヲ三個トナス。卽チ

第一　參贊將官（General adjutant）〔卽チ戰地ニ於テ皇帝ニ加功スル將官ト云フ意味ナリ〕

但シ目今該將官ノ員數ハ六名ニシテ其內騎兵中將二名步兵中將二名及中將二名アリ〔騎步兵中將ノ階級ハ大將ト尋常中將トノ中間ニ班スルモノナリ〕

第二　陪從將官（General a la suite）〔原語 ala suite トノ意味ハ某士官現ニ兵隊ニ附屬セズ單ニ某指令官ニ陪從スル者ヲ云フナリ故ニ本文ノ將官モ亦然リ現ニ師旅團ヲ帥ヒス單ニ君主ニ陪從スル者ナリ〕

但シ目今其人數ハ五名ニシテ其內中將三名少將二名アリ。

第三　羽翼陪從武官（Flugel adjutant）〔原語 Flugel トハ全ク羽翼ノ意味ナリ但シ此語ヲ兵學ニ徵スレバ一隊一軍ノ左右ニ位置スル兩端ヲ目シテ羽翼ト云フナリ此意ヲ擴張シテ本文ノ稱呼ヲ解スベシ要スルニ羽翼武官トハ參贊及陪從武將官ノ近接密邇スルニ反シ君主ノ左右兩端ニ陪從スル加功者ト云フ意味ニシテ戰地及練兵場ニ於テハ君主ノ命令ヲ四端ニ傳ヘルモノナリ〕

但シ目今該武官ノ員數ハ九名ニシテ其內步兵大佐三名騎兵大佐一名步兵中少佐各一名騎兵中佐一名同少佐二名ナリ。

往昔右參贊陪從及羽翼陪從武官ヲ設置シタルノ本旨ハ他ナシ、要スルニ歐洲各國ノ君主特ニ普露生歷代ノ諸公及諸王ハ、兵事アルニ會スルヤ必ズ躬親ラ師旅ヲ帥キテ陣頭ニ立チ、戰鬪計畫ヲ以テ共任トナスニ由テ、平素豫メ才幹雄略ニ富メル武官ヲ撰拔シテ自己ノ左右ニ陪從セシメ、緩急事アルニ方リテハ之ヲ引率シテ戰場ニ臨ミ、或ハ帷幕ノ議ニ參與セシメ、或ハ馳驅傳令ヲ任ゼシムルニアルナリ。然ルトキハ彼ノ幕僚參謀ノ事務タル、今モ尙該參贊陪從ノ將校ニ委任シテ可ナルガ如シト雖ドモ、世運開明文物隆盛ニ赴キ文學ナリ武學ナリ專門的之ヲ修了シ、及其翹發奬勵ニ加功セシナレバ學域廣大疆理詳密タルヲ以テ終生ヲ期シ、專一此ニ從事セザルベカラズ。陪從扈從及馳驅奔

走ヲ主務トスル者焉ゾ幕僚ノ計畫ニ參與スルコトヲ得ン。縷々説明ヲ要セザルナリ。故ニ前百年紀間、彼ノ全軍ニ係ル參謀本部ヲ設置セル以來、參贊及陪從將校ノ職掌ハ頗ル其樣態ヲ一變セリ。而シテ今世ニ至リテハ平素陪從ノ際其執掌スル事務ハ殆ンド文官侍從ノ事務ニ同ジ。玆ニ其戰時及平時ノ事務ヲ陳列センニ概ネ左ノ如シ。

戰時

君主ニ扈從シテ戰地ニ赴キ、乃チ帷幕ニ陪ス。此際執掌スル事務幕内ニ在テハ概ネ將校ノ參謁ヲ上奏シ、乃之ニ上意ヲ傳フル等ニ過ギザレドモ、君主果シテ戰鬪ノ實地ニ臨ミ、自ラ鬪格ヲ指揮スルトキハ各將校親シク左右ニ陪從シ、甲點某軍乙點某隊ノ戰況ヲ指示上奏シテ君主ノ注意ヲ喚呼シ、又羽翼陪從武官ハ君主ノ命令ヲ某軍某隊ノ將校ニ傳達シ及其奏上事件ヲ報復スルモノナリ。但シ陪從將校中此際或ハ君主ノ下聞ヲ承ケ、戰略ヲ獻スル等ノ機會ニ移スルコトアルベシト雖ドモ、戰時ニ方リテハ彼ノ全軍參謀本部長タル者通常帷幕ニ陪從シテ君主ノ計畫ニ加功スルヲ以テ、若シ陪從武官下問ニ接スルトナレバ、該擧ハ平素ノ倍倚ニ起由スル私懇ノ情實ニ由ルモノナリ。

平時

甲　觀兵式及大小練兵ノ實地ニ扈從スルコト。

乙　冠婚喪祭其他君主ノ會盟等大小儀式ニ參會シテ君主ニ陪從スルコト。

丙　他國ノ君主或ハ王皇族來訪スルニ會シ之ヲ國境或ハ近郊ニ送迎シ及其滯在間旅館ニ宿直シテ其用ニ任ズルコト。

但甲乙國ノ君主ニシテ其威權同等タルトキハ甲國君主ノ來訪ニ會シ乙國君主ハ之ヲ近郊ニ送迎スルコト一般ノ慣例ナレドモ、甲乙國君主ノ位級權勢不同アルトキハ本文ノ例ヲ執行スルコトアリ、又乙國君主ニシテ來訪セル甲國君主及王皇族ノ爲メ自己ノ侍中武官ヲ派シ宿直給仕セシムルコトハ一ニ尊敬ヲ表示スルノ旨趣ナリ。

丁　他國ノ宮中ニ於テ冠婚喪祭其他儀式アルトキハ君主ノ命ヲ帶テ之ニ參會スルコト。

但シ他國ノ儀式大小アルト及公私的ノ異同アルニ準ジ、侍中武官或ハ其他ノ文武等所謂大儀參會公使トシテ特殊ニ派遣セラルルコトアリ〔此場合ニハ公使必ズ國書ヲ提携ス〕又ハ侍中武官依然其性質ヲ維持シ單ニ君命ヲ帶ビテ私懇的ニ〔此場合ニ於テハ參會者單ニ君主ノ内書ヲ提携スルノミ〕參會スルコトアルノ例類是ナリ。

戊　君主ニ扈從シテ内外各地ニ旅行スルコト。

己　君主ノ名ニ代リ百官及自他人民ヲ訪フテ祝祠及弔詞等ヲ傳達スルコト。

但大臣及貴族ノ冠婚喪祭ニハ君主親臨スルコト其例多キニ居レドモ、君主會々親臨スルコト能ハズ。或ハ親臨ヲ以テ無要トスルトキハ侍中武官ヲ派遣スル慣例ナリ。

庚　大使公使ノ謁見式ニ列スルコト。

但シ此際ニ方リテハ侍中武官式部官員〔職長ヲ除ク〕及侍從官ハ謁見室ノ前室ニ滯止スルモノナリ。

辛　交代順序ヲ定メ毎當日御内ニ出勤スルコト。

但シ當直ノ日ハ定刻ヨリ出勤シテ侍中武官控所ニ待命シ、上奏及傳令ニ任ズルモノトス。而シテ上奏ノ事タル概ネ參謁者ノ姓名ヲ白シ、引見ノ許可ヲ問フ等是ナリ。傳令ノ個條ハ之ニ反シ、一ニ君主ノ隨意及必需ニ起由スルヲ以テ茲ニ其類例ヲ枚擧シ難シ。

壬　君主ノ出御及尋問ニ扈從スルコト。

但シ出御トハ散歩的ニ徒歩シ或ハ馳驅スルヲ云ナリ。此際侍中武官一名必ズ君主ノ左側〔徒歩或ハ乘車ナレバ〕或ハ其後〔乘馬ナレバ〕ニ陪從スルモノトス〔普國ニ於テ皇帝或ハ承冠太子散歩的外出セラルルトキハ武官一名ノ外必ズ馬丁一名或ハ獵僕一名モ亦タ扈從スルモノトス但シ皇帝乘馬スレバ馬丁亦タ乘馬シ皇馬乘車スレバ獵僕ハ馭者ノ左側ニ坐ス〕將又此段尋問トノ意ハ君主ノ日常其眷族大臣及貴族ヲ尋問シ、或ハ其宴會ニ親臨シ、又ハ舞場劇場、博覽會場及美術師工場等ニ親臨スル尋問ヲ云フナリ。

前述ノ外侍中武官ノ執掌擔任スル事項ハ一々枚擧スルニ遑マアラズト雖、他ハ君主ノ資格ト生活ノ實際ニ徵シ想像シテ可ナルガ如シ。然レドモ尚ホ茲ニ數言ヲ要スルモノアリ、依テ之ヲ左ニ陳述ス。

夫レ獨帝侍中武官ノ階級タル一齊同等ナラズ、上騎兵中將ヨリ下騎歩兵少佐〔承冠太子及自他皇族ノ侍中武官ハ少尉ヨリ中佐マデヲ限リトス〕ニ至ルマデヲ限リ其任ニ當ルモノトス。故ニ皇帝該將校ヲ待ツノ樣モ亦一ナラザルナリ。現ニ騎歩兵中將及故參ノ中將ハ單ニ前顯甲乙丙丁戊己庚ノ事項ヲ以テ其任トナシ、反之新參中將以下ノ武官ハ單ニ甲乙丙丁戊己庚ノ事項ニ從事スルノミナラズ、辛壬ノ事項ヲ以テ全ク其任トナス者ナリ。然レドモ新參中將以下ノ武官中現ニ九名ハ參謀本部次長樞密軍事局次長近衛旅團及聯隊長ヲ以テ其本職トナシ、單ニ榮譽的陪從及羽翼陪從武官ノ名ヲ辱スルヲ以テ、純ラ辛壬ノ事情ヲ擔當スル者ハ中將二名中佐一名及少佐二名ニ過ギザルナリ。而シテ該陪從及羽翼陪從武官ハ君主寵遇ノ厚薄アル等ニ準ジ、或ハ終生其職ニ止マリ、或ハ三四年ヲ經過シ更ニ軍隊ノ現役ニ從事スル慣例ナリ。將又獨帝侍中武官ノ職掌ハ實ニ前顯ノ條項タルヲ以テ、會々某々文官等

ノ拜謁及文武官等ノ陪食ヲ命ゼラルルニ方テハ〔但シ此ノ場合ニ於テハ當直ノ侍中武官モ亦タ必ラズ陪食スルモノナリ〕宮城監督長或ハ家政監督長タル者出勤シテ其任ヲ充塞スト雖、日常宮中ニ侍御シテ皇帝ノ使役ニ當ル者ハ文科侍從ニ非ズ一々武官ナリ〔但シ承冠太子以下皇族ノ宮中ニ於ケルモ亦タ然リ〕抑モ普露生ハ國初以來武ヲ以テ歐洲ニ鳴リ、緩急事アレバ君主元帥トナリテ親ラ戰陣ニ臨ムコト慣例ナリ。故ニ國初以來皇族タル者ハ誰彼ヲ問ハズ兵學ニ從事シ、自他ノ武官ト齊シク操練演習シ特ニ緊シク指令官ノ叱咤ニ服從シ、及一分時モ註遇セザルベク、投機應變スル事ヲ以テ幼年間ノ課業トナズナリ。由テ某皇族〔但シ某字ヲ用ユルノ旨趣他ナシ要スルニ當代ノ君主ニシテ實子ナキトキハ皇族ノ中承繼權利ヲ有スル者祚階ヲ踐ム家法アレバナリ〕長ジテ萬機ヲ親裁スルニ至ルモ、前後武官ノ熟練嚴肅ヲ固守シテ擧動シ、加之日常軍服ヲ着用スルコト其定規ナリ〔就中「ウヰルヘルム」皇帝ハ日常生活ノ擧動最モ嚴肅ナリト云フ玆ニ其一例ヲ擧ゲンニ同帝每朝七時臥床ヲ離ルルヤ寢室ニ於テ業已軍服ヲ着シ鞋ヲハキ復ビ臥床ニ就クマデハ更ニ容裝ヲ改メズ且從前殆ド上鞋ヲ用ヒラレシコトナシト云フ〕但シ上奏傳令及扈從ノ事タル文官侍從之ヲ擔當スルモ可ナルガ如シト雖、武官專ラ其職ニ當ルモノハ蓋シ歷世練武嚴肅ノ慣習ヲ固守シ且文武雜裝ノ容儀ヲ避ルノ旨趣其多ニ居レルガ如シ

其他獨帝ノ朝ニ在テハ樞密軍事局〔樞密文事局アリテ之ニ對峙ス〕ト稱呼スル一局アリ。該局ハ外貌的陸軍省ノ管轄ヲ脫シ、全ク樞密忠告官體ノ實ヲ兼ネ帝宮ノ華麗全體ニ屬スルモノナリ〔樞密文事局モ亦然リ〕而シテ局長タル將官ハ陸海軍卿ノ敎令ヲ得テ武官ノ黜陟褒貶ニ關スル事項ヲ上聞シテ決裁ヲ取リ、及尋常省務ニシテ皇帝ノ決ヲ要スル事項ヲ上奏シテ裁旨ヲ領シ之ヲ陸海軍卿ニ通知スル者ナリ〔本文ノ局長ハ一方ニ在テハ武官褒貶黜陟ヲ司ルヲ以テ所謂人員局長ノ資格ヲ有シ、又一方ニ在テハ省務ヲ上奏シ及裁旨ヲ傳達スルヲ以テ皇帝ト陸海軍卿間ノ媒介者タリ。而シテ本文尋常省務ノ文字ニハ頗ル意味アリ、要スルニ一省卿日常執掌裁決スル事項ハ數百個ニ下ラザルヲ以テ、每日參朝シテ自ラ皇帝ノ裁決ヲ仰グニ餘ナシ、故ニ尋常省務ハ本文局長ニ倚テ之ヲ上聞ニ達シ、緊要及非常ノ事項ニ非レバ身ラ上奏セザルノ慣例ナリ。自他ノ各省卿モ亦タ尋常事務ハ樞密文事局長ヲ介シテ之ヲ上奏シ、及該官ノ傳達ヲ要スルモノトス。但シ外交政務ニ限リ更ニ媒介者ヲ容レズ、一ニ皇帝ノ親裁ニ出ルモノナリ。故ニ外務卿及其代理者ハ事ノ必需ニ應ジ每日參朝シテ皇帝ノ親裁ヲ仰グモノトス〕然ルトキハ該局長將官ノ事務タル最モ機密ニ涉リ、特ニ公明正大的ノ執掌ヲ要スルヲ以テ、其人ト爲リ、心ヲ執ルヤ公平身ヲ修ムルヤ端正ニシテ啻ニ皇帝ノミナラズ陸海軍卿ノ倍倚ヲ得タル者此任ニ當ラザルベカラズ。故ニ獨帝ノ朝ニ在テハ其參贊將官タル者局長ノ本務ヲ執リ、上下ノ間ニ立テ必需ノ怡和ヲ維持スルノ慣例タリ。但シ實際ニ就テ現勤局長ノ職掌ヲ檢査スレバ、該將官必シモ事々物々每ニ陸海軍卿ノ敎令ニ據テ之ヲ上奏スルニ非ズ。隨テ其樣稍々例規ニ違フガ如シト雖ドモ、是皇帝ノ信倚ト局長ガ陸續實施スル公平ノ外裁ニ由テ自然權柄ヲ其身ニ歸セルモノナリ。

澳國皇帝陛下ノ軍務內局摘要

軍務內局（ミリテールアンツライ）ハ澳國大元帥タル皇帝陛下ノ機關ニシテ、陸海軍ニ關スル諸件ニ就キ該卿若クハ其官僚ト往復交通スルノ權ヲ有ス。

軍務內局長

軍務內局長ハ將官一人之ニ任ジ、諸省卿ト直ニ交通シ且負擔ノ事務ニ就キテ奉議スルコトヲ得。

職務ノ權限

軍務內局長ノ主務ハ皇帝陛下ノ軍事ニ係ル報告ヲ管掌ス。

事務

諸省卿ノ建議中皇帝陛下ノ親裁若クハ制可ヲ仰グベキモノハ渾テ奉議式ニ依リテ之ヲ陛下ニ捧呈ス。

軍務內局ハ該奉議ノ可否ヲ檢案シ副申書ヲ調整シテ之ヲ上奏ス。

皇帝陛下ノ維也納府ニアルト行在所ニ在ルトニ拘ハラズ、軍務內局長之ニ侍從スルトキハ日々到達スル公務ニ關スル書類（例ヘバ奏議緊要ナル意見書及直ニ叡覽ニ供ス可カラザル電報ノ類）ハ之ヲ奏聞シ、其勅裁ヲ仰グ可キモノハ特ニ裁制ヲ請フモノトス。

諸卿ノ奏議事件ハ之ヲ取扱フベキ諸定規ノ內ニ記載シ置クヲ得。

軍務內局ハ此奏議ヲ拔出シ已ニ陛下ノ親裁セラレタルモノト假定シテ勅裁案ヲ起草ス。

勳章（アルテンスカンツテイ）局竝ニ兵務ニ關セザル諸卿ニ下ス所ノ勅令ハ之ヲ陛下ノ親書ト名ク。此親書ハ陛下ヨリ皇族若クハ外國諸王族ト交通スル所ノ書式ヲ用フ。

兵事專務ノ諸卿ニ下ス所ノ勅令ハ之ヲ命令書（ヘフエーレスシユライベン）ト名ヅク。皇帝陛下ノ裁決案竝ニ勅裁ヲ要スベキ文書其外肝要ノ兵事報告及電報竝ニ叡覽ニ供スベキ日誌中殊ニ要所ニ紅墨ヲ以テ點線ヲ附シタルモノ、又ハ軍人ノ謁見ニ於テ捧呈セル歎願書、若クハ軍務內局ノ奏上ニ依テ陛下ノ押號ヲ要スベキ軍人ノ歎願書ハ共ニ日々之ヲ文通（ポルテホルン）ニ聚納ス。

歎願ハ陛下ノ內閣（カビネツトカンツイ）ニ宛テ信書ノ如ク之ヲ上呈セシメ、又ハ該官ニ於テ之ヲ筆記スト雖ドモ軍事若クハ軍人ニ關スル歎願ハ軍務內局ニ申呈セシムベシ。

請願書中參考ニ供スベキモノハ奏議紙（レピラートボーゲン）ニ記載スベキ標點ヲ付シ（紙末ニ內局長ノ意見ヲ付ス）叡覽ニ供シテ押號ヲ請フ。

此ノ如キ請願ヲ記載スルハ一定ノ制限ナク全ク其主意ヲ登記スベシ。

陛下ノ面前ニ於テ捧呈セル歎願書ハ直ニ陛下ノ押號ヲ加フルト雖ドモ、其然ラザルモノハ郵便ニ

テ到達シ、若クハ内閣ニ上呈シタル歎願書ト均シク處分ス。但シ此場合ニ於テハ諸請願ヲ一纒ニシテ奏聞紙ニ登記シテ叡覽ニ供シ毎通意見ヲ附シテ陛下ノ押號ヲ請フヲ要セズ。

陛下ニ謁見シテ捧呈セル請願ハ渾テ奏議式ニ依テ叡覽ニ供スルヲ通規トス。

陛下ノ押號ヲ附シタル請願書（押號票ヲ付ス）ハ奏議主任ノ卿ニ交付ス。

陛下ノ押號ヲ附セザル請願書ハ判決スベキ權アル官衙ノ順序ヲ經テ之ヲ却下セシム。

毎年軍務内局ハ其交付セラレタル若干ノ資金ヲ以テ軍人ノ貧困者ヲ救助スト雖ドモ又其外救恤ノ諸件ニ就キ陛下ニ建議スルコトヲ得。

宰相會議

軍事内局長ハ宰相會議ヲ開クニ方リ、聖旨ヲ承ケ陛下ヲ議長トシ軍事ニ關スル諸件ヲ審議スルニ臨ミ、若シ疑惑ノ件アルトキハ主務卿及軍人ヲ招喚シテ説明ヲ要メ、且自ラ該會ニ參與シ其責任ヲ以テ草案掛ノ士官一人ヲシテ議場筆記ニ從事セシメ又之ヲ各議員ニ回送スルノ任アリトス。

勤務及職務

軍務内局ノ勤務及職務ハ其他ノ陸軍官衙ト異ナルコトナシ。

軍務内局長ハ皇帝陛下第二ノ參將ヲ兼ヌル者トス。

草案掛

草案掛ノ吏員ハ豫メ定員ヲ設ケズ、概ネ參謀將校ヲ以テ之ニ充ツ、而シテ現時ノ總員ハ大佐中佐少佐大尉海軍士官（大尉相當）各々一人、其外宮内書記官（ホーフラート）及宮内書記生（ホーフセクレテール）トス。

運送掛

運送掛員ハ又公務ニ關スル書類ノ淨書ヲ兼掌スルモノニシテ、七等若クハ八等給ノ官吏四人ヲ以テ之ニ充ツ、陛下若シ軍務内局設置ノ地ヲ離レ他ニ行幸アルトキハ必ラズ其官吏ノ内一人之ニ陪從シ急使（コウリール）ノ齎シタル（文通ニ收メタル）文書ヲ處分ス。

急使ハ往復掛卽チ本文ニ掲グル所ノ官吏ヨリ之ヲ發ス。

急使ハ近衛歩兵中隊ノ兵又ハ近衛騎兵中隊下士相當ノ兵ナリ。

此官吏ハ陛下ノ裁決案成ルヤ之ヲ其奏議書末尾ノ左傍ニ淨書シ文通ニ納メテ再ビ、陛下ニ捧呈ス。

皇帝在城ノ時文匣捧呈ハ日々事務ヲ終ルノ後ニ於テス。其外緊要ノ事件ハ毎々新誌ト共ニ第二ノ文通ニ收メテ之ヲ捧呈ス。

第一參將

第一參（ゲネラールアジエタント）將ハ皇帝陛下左右ノ勤務ニ服ス。

參將ハ皇帝發輦ノ指揮ヲ掌リ諸計畫令ヲ出スベキモノトス。

第一參將ハ公事ニ在テ皇帝陛下ヲ護衛スルコト猶出輦ノ時ニ於ケルガ如シ。

參將ハ外國陸軍ノ貴賓ト交通シ、且聖旨ヲ承ケテ例ヘバ陸軍閲兵式ヲ其貴賓ノ閲覽ニ供スル等ノ事ヲ掌ル。

參將ハ右ノ外皇居ニ備フル哨兵ノ警備勤務ニ關スルコトヲ檢察スルノミナラズ、特別ノ場合ニ於テハ其計畫ヲナスコトアルベシ。

奉　詔　官

奉詔官（フリユヤールアジユタント）ハ軍務上ノ諸件ニ於テハ參將ニ隷屬シ、其官等ハ上長官トス。該官ハ維也納ニ於テハ必ズ一人陛下ノ側ニ侍シ各々二十四時間ニシテ交替ス。

陛下若シ宮城外ノ近傍ニ出御アルトキハ、必ズ奉詔官二人交替シテ各々若干時ノ勤務ニ服スルモノトス。

奉詔官ハ外國帝王等ノ賓客皇居ニ駐留アルトキハ又其側ニ侍從セシム。而シテ我ガ陛下行幸ノ時ニ在リテハ又二人ノ奉詔官（當番）參將ト共ニ之ニ扈從スル者トス。

章　服

參將及奉詔官竝ニ軍務内局ノ將校ハ特別ノ章服ヲ着ス。其服裝ハ參謀官ニ異ナラズ但シ宮中勤務ノ海軍將校ハ此限ニアラズ。

此上長官及海軍將校ハ宮中勤務ノ時限ヲ過グレバ再ビ隊附勤務若クハ海軍勤務ニ服スル者トス。

魯國皇帝陛下大本營ニ係ル法令

第一條　大本營ハ大本營長同副長及ビ「エードドカン」將官、陛下ニ扈從スル所ノ少將、「エードドカン」佐尉官、侍從將官本營司令官一名、特別ノ任務ヲ奉ズル將校一名（「エードドカン」ノ内）、侍醫一名及大軍僧一名ヨリ成ル者トス。

第二條　大本營ニ屬スル者次ノ如シ。

其一、大本營祕書局

其二、護　衛　兵

第三條　祕書局ハ長一名及課僚數名ヨリ成ル。

第四條　課僚ノ分擔ハ局長之ヲ規定ス。

第五條　祕書官ハ皇帝ノ旅行ニ陪從ス。皇帝軍中ニ在ルトキハ祕書官ハ凡テ大本營長ヲ經由シテ陛下ニ上申スベキ書信往復ニ任ジ勅令ヲ軍隊ニ傳達ス。

第六條　大本營祕書局ノ職權次ノ如シ。

其一、帝側ニ侍從スル「エードドカン」ノ命補ヲ宣告スル事、

其二、帝側ニ侍從スル「ヱードドカン」（「ヱードドカン」中ノ大部分ハ軍隊中ニ在リ）ニ係ル一般ノ事務ヲ施行スル事、

其三、「ヱードドカン」ノ俸金ヲ支給シ本營ノ定額金ヲ使用スル事、

其四、護衛兵ニ係ル往復ヲ司ル事、

其五、皇帝旅行中本營長或ハ日直「ヱードドカン」ヲ經テ奏請スル所ノ事件幷ニ郵送ヲ以テ請願スル所ノ事件ヲ審査スル事、

其六、旅行中必要ノ金額ヲ請求スル事、

其七、勳章及贈物ヲ用意スル事、

其八、凡ソ陛下ノ命令ヲ實施スル事、

第七條　皇帝旅行ニ當リ陸軍卿隨行スルトキハ、大本營祕書局ハ尙ホ卿ヨリ委任スル所ノ往復通信ヲ司ル。

第八條　大本營祕書局ハ軍事ニ關スル事ノミナラズ一般行政上ニ係ル要件狀報ヲ蒐聚ス。

大本營長ノ職權

第九條　大本營長ハ皇帝親ラ之ヲ選任ス。

第十條　大本營ノ人員ハ總テ本營長ノ所轄ニ屬ス。

第十一條　大本營長ハ陛下ノ勅令ヲ其部下ニ傳達ス。

第十二條　陛下ノ護衛ニ係ル事務ヲ總理ス。

第十三條　旅行中大本營ニ來テ拜謁スル者ヲ紹介ス。

第十四條　大本營ノ舍宅及儲品ヲ配給ス。

第十五條　陛下旅行中大本營長ハ護衛當番ノ兵隊ヲ指揮シ行在所ニ備フル哨所ノ數ヲ定ム。

第十六條　戰時ニ方リ皇帝軍中ニ在ルトキ大本營長ハ總テ本營ヲ去ル者ニ通行免狀ヲ給與ス。

第十七條　旅行中大本營祕書局ニ於テ費消スル所ノ金額計算ハ本營長ノ檢査ヲ受クベシ。

第十八條　計算報告書ハ本營長ノ上奏ニ依テ陛下ノ允可ヲ受クベシ。

第十九條　皇帝旅行中陸軍卿不在ノ節大本營長ハ勅令ヲ奉承シテ之ヲ陸軍卿ニ知達シ、又日常ノ命令ニ捺印ス。

第二十條　皇帝旅行中勅令ヲ各省卿ニ傳達ス。

第二十一條　旅行中總テ陛下ニ請願スル所ノ事件ヲ上奏シ勅裁ヲ下知ス。

第二十二條　大本營長ハ其祕書官ニ對シテ中央行政部長ノ權ヲ有シ陛下ノ護衛兵ニ對シテハ軍管長ノ權ヲ有ス。

大本營副長ノ職權

第二十三條　大本營副長ハ「エードドカン」將官ノ中ヨリ大本營長之ヲ選擧シテ特ニ之ヲ命ズ。

第二十四條　副長ハ本營長ニ直隷ス。

第二十五條　本營長疾病ノ節ハ副長之ガ代理ヲナス。

第二十六條　陛下護衞ノ兵ニ對シテハ管區長ノ權ヲ有ス。

大本營祕書局長ノ職權

第二十七條　祕書局長ハ本營長之ヲ選任ス。

第二十八條　祕書局長ハ本營長ニ直隷ス。

第二十九條　祕書局ノ事務ニ係リ又局員ニ對シテ中央行政部副長ノ權ヲ有ス。

大本營人員表

職務	員數	列位
長	一	大中將ノ官ニ在ルエードドカン
副長	一	中少將ノ官ニ在ルエードドカン
エードドカン將官	無定	大將及中將
陛下ニ陪從スル諸將官		少將
エードドカン		佐官及尉官
陛下ニ侍從スル諸將官		將官
司令官	一	少將或ハ大佐
特別任務ニ服スル士官	一	大佐或ハ中佐
侍醫	一	
大軍僧	一	
長	一	大佐
副長	一	五等
課長	二	六等
副課長	三	八等
金庫主管	一	六等
同副官	二	八等
新誌記者	一	七等
同副	一	八等

祕書局　文官

書記　六
使役　四

伊國侍中武官階級及定員

伊國皇帝陛下及皇族ノ侍中武官ノ階級及其定員

其ノ一　皇帝陛下ノ侍中武官

侍中武官長　陸軍大中將ノ內一

侍中將官　陸軍中少將ノ內三
　　海軍中少將ノ內一

侍中佐官　陸軍上長官八
　　但シ　列外將校（オールカードル）　海軍上長官二

同　陸軍大佐一

計　十五名

其ノ二　「アオスタ」侯殿下附侍中武官

侍中武官長

但シ　列外將校　陸軍中少佐ノ内一
侍中武官　陸軍大尉二
但シ　前同斷
傳令使
但シ　前同斷
計　四　名

其ノ三　「ジエヌア」侯殿下附侍中武官　陸軍大佐若クハ海軍大佐ノ内一
侍中武官長　陸軍中少佐若クハ海軍中少佐ノ内一
侍中武官　陸軍大尉若クハ海軍大尉ノ内二
傳令使
計　四　名

其ノ四　「カリニヤノ」侯殿下附侍中武官　陸軍大佐一
侍中武官長
但シ　列外將校　陸軍中少佐ノ内一
侍中武官
但シ前同斷
傳令使　陸軍大尉二
計　四　名

備考「ジエヌア」侯殿下附侍中武官ニ限リ陸海軍將校ヲ以テ侍中武官ニ當ツルハ殿下海軍ノ將官タルヲ以テナリ。○列外將校トアルハ隊外ノ將校ヲ云フナリ。

解答

現役軍人ノ定義
現役軍人選被權ノ事

〔一〕現役軍人ノ定義

休職停職ノ將校モ亦在職ト同ジク現役トナスハ左ノ原由ニ依ル。

從來非職將校ハ其職務ハ取ラザルモ恩給停年及年齡致仕ノ制限等一々在職ト同ジキ取扱ヲナセリ。此ノ理由ニ由リ今般提出ノ分限令ニ於テモ在職休職停職ヲ併セテ現役トナセリ。尙ホ普國ノ例ニ據レバ現役ノ內在職ノ外ニオフヒセノルデル、アルメー卽チ「アラシユイツト」ナルモノアリ。此ノ將校ハ現ニ奉職ナラザルモ任用ノ必要ニ從ヒ豫定ノ位置ニ就職スベキ資格ヲ備ヘタル將校ニ屬シ、卽チ我休職停職ニ概當スルモノトス。依テ現役ト總稱シタルナリ。然レドモ現役ノ定義、選擧權ノ名目ニ關シ不都合ナラバ左ノ如ク義解セラルヽモ妨ナシ。

現役トハ現ニ職務ヲ奉ズル者ナリ。其休職停職トナリ職務ナキ者モ亦現役ニ同ジ。

〔二〕現役軍人選擧權被選擧權ノ事

現役軍人ニ選擧權ヲ停止シ被選擧權ヲ與フル云々、普國ノ例ニ於テハ實ニ來示ノ如シ。然レドモ我邦ニ在テハ現役軍人ニ此ノ權ヲ與フルハ殊ニ必要ナシト斷言セザルヲ得ズ。

其理由ヲ左ニ開陳ス。

歐洲列國ノ建國法立憲ノ法章ヲ設クルハ概ネ臣民ヨリ迫リテ成ルモノ多シ。故ニ法章ハ善美ヲ具フト雖モ實際猶ホ名實相符セザルモノアリ。洵トニ已ムヲ得ザルニ出ヅ。今ヤ我立憲制定ノ時ニ方リ悉ク單純ニ彼ノ法章ノミヲ取テ安心スベキナランヤ。今普國ノ實例ヲ擧ンニ、軍人ニ在テハ被選擧權ヲ有スルノミナラズ、憲法ニ據レバ選擧權ヲモ停ムル所ニアラズ。然レドモ特別ノ法章ヲ以テ選擧權ハ停メタルノミ。又被選擧權ヲ有スト雖ドモ彼ノ數千ノ將校中從來被選ニ當リタル者ハ將官モルトケ、スタインメツ、ゴルツ、ノ三名ナリト云フ。蓋シ實際當選スルモ軍人ニ在テ議場ニ馳騁スルモ害アルモ益ナキニ因ル。殊ニ傍ヲ帝室ニ於テ簇下ノ軍人ヲシテ國務ニ干涉スルノ必要ナキヲ以テ、勉メテ之ヲ檢束スルノ策ヲ取リ、若シ軍人ニシテ當選スルトキハ隊長長官ノ許可ヲ要シ、若シ許可セラレザルトキハ速ニ辭スルヲ得ベキノ例アリ。大凡斯ノ如キハ洵ニ實際已ムヲ得ザルノ變則ニ出デ、事實習慣トナリ、亦人民ト雖モ軍人ヲ選擧スル者ハ絕ヘテアルコトナシト云。方今我邦ノ輿情民心ニ照スニ、始メヨリ普國ノ變則ヲ用ンヨリハ寧ロ斷然法章ニ於テ選擧被選擧權共ニ與ヘザルヲ正例トナス方適當ナルハ識者ヲ待テ後知

ルニアラザルナリ。

陸軍次官　桂　太郎

海防水雷布設費別途御下付ノ義上請

海防水雷布設ノ義ハ當省ヘ御委任相成候ニ付、十六年二月中祕ニ第百八號ヲ以テ豫メ具申仕候通リ、海防緊要ノ港灣東京長崎下ノ關等同年中詳密實測ヲ遂ゲ候末、水雷布設等ノ諸費夫々取調候處巨額ノ費用ヲ要スルノミナラズ、重大ノ事業ニ付諸港一時ニ起業候共、急速落成ノ見込無之、依テ先ヅ右港灣ノ内最モ至急ヲ要スル東京長崎港ノ二ケ所ヨリ着手致シ、其他ハ尚緩急ヲ酌量シ、逐年起業候方可然ト思考候。就テハ右兩所ヘ布設スベキ水雷器具ノ購買製作及布設ニ係ル諸費ノ内、差向別冊仕譯書ノ通リ金三十萬六百三十四圓來十八年度ニ於テ別途御下府ノ義特別ノ御詮議ヲ以テ御允裁相成度此段上請候也。

明治十八年五月廿八日

海軍卿伯爵　川村純義

太政大臣公爵　三條實美殿

軍艦製造費之義ニ付上申

曩ニ去ル十四年軍艦六十隻ヲ製造シ、艦隊ヲ編制スルノ計畫ヲ上申セシニ、其翌十五年ニ至リ十六年度以降八ケ年間ニ一ケ年金三百萬圓ヲ目途トシ軍艦ヲ製造スベキノ命ヲ受タリ。依テ其際八ケ年間ニシテ此金額ヲ以テ製造シ得ベキ軍艦ノ種類ト隻數トヲ調査シ、艦隊編制ノ方案ヲ開陳セント欲セシト雖モ、之ヲ實際ニ就キ調査センニハ先適任ノ者ヲ歐洲ニ派遣シ、以テ各國現時ノ海軍ノ實況ト軍艦ノ種類艦隊ノ編制等ノ如何ヲ視察シ、其利害得失ヲ較計シ、而シテ我艦隊編制ノ方案ヲ立テ、軍艦製造ノ經費ヲ調査スルニ非ザレバ確實ナルヲ得ベカラズ。之ヲ得ルニハ許多ノ年月ヲ要シ、爲メニ若干年數ヲ經過シ事ノ遷引スルノ患有ルヲ以テ、先ヅ從前外國ニ製造セシ金剛艦ノ如キト、內國ニ製造セシ軍艦ノ費額トヲ斟酌シ、時々經伺シテ英國及ビ佛國又ハ內國ニ之ヲ製造セシメ、此一兩年ヲ出ズシテ各種軍艦十隻ヲ得ルニ至ラントス。然ルニ曩ニ軍艦製造ノ議ヲ上申セシ十四年ノ頃ハ、金剛海門天城等ノ如キ諸艦モ艦隊ニ編制シ、主トシテ戰艦ノ用ニ適セシト雖ドモ、今ヤ海外各國ニ於テ戰艦ノ構造著大ノ改良進步ヲ來シ、爲メニ艦隊ノ編制ヲ一變シ、巨大ニシテ厚キ鐵甲ノ甲鐵艦トヲ配合シ編制スルニ非ザレバ、海戰ノ用ニ適セザルモノ、如シ。今茲ニ一例ヲ擧ゲンニ、

英國新製ノ戰艦「イフレキシブル」號ノ如キハ排水積一萬千八百噸、甲鐵ノ厚サ十六吋乃至二十四吋ナリ。「アガメン」號ノ如キハ（支那日本艦隊ニ編入スベキモノ）排水積八千四百九十噸、甲鐵ノ厚サ十六吋乃至十八吋ナリ。又佛國新鑑「アシラルボーダン」號ノ如キ、排水積一萬四百四十噸、甲鐵ノ厚サ十三吋四分一乃至二十一吋八分五ナリ。伊國軍艦「イタリヤ」號竝ニ「レバント」號ノ如キハ排水積一萬三千八百五十一噸、甲鐵ノ厚サ十六吋乃至二十三吋ナリ。然リ而シテ扶桑艦ノ如キハ我海軍ノ最大ナル甲鐵艦ナルモ、其排水積僅ニ三千八百噸、甲鐵ノ厚サ最厚ノ部ト雖モ僅ニ九吋ニ過ギズ。十五栂ノ砲彈能ク之ヲ洞貫スルヲ得ベシ。況ヤ其他ノ軍艦ニ於テヲヤ。此ヲ以テ艦隊中ニハ必ズ前陳各國甲鐵艦ニ匹敵スベキ甲鐵艦無ルベカラズ。又斯ノ如キ甲鐵艦ノ外尙ホ左ノ二項ニ適當セル軍艦ヲ必要トス。曰ク敵ノ船舶ヲ奪略シ、中立國ノ船舶ヲ檢討シ、我運輸船ヲ護送シ、敵ノ巡洋艦ト戰フベキ巡洋艦、曰ク海水ノ淺キ海上ニ戰ヒ、敵岸ニ上陸スル陸兵ヲ掩護スベキ砲艦、又艦隊ニ水雷船數十隻ヲ副ヘ其輔翼タラシムルコト最モ緊要トス。夫レ輓近水雷術ノ進步改良ヲ來セシコト實ニ大ニシテ、其效力殆ンド大砲ノ上ニ出デントシ、一擊ノ下能ク甲鐵大戰艦ト雖モ瞬間ニシテ覆沒スルコトヲ得、是レ水雷船ノ必ズ艦隊ニ分配附屬セシメザル可カラザル所以ナリ。以上開陳スルガ如ク、目下海軍ノ形勢茲ニ一變シ、時勢亦隨テ切迫ナルガ故ニ我海軍ニ於テ備ヘザル可ラザル軍艦左ノ如シ。

甲鐵艦　八隻
一等巡洋艦　十六隻
二等巡洋艦　十二隻
砲　艦　二十四隻
水雷船運輸船　四隻
計　六十四隻

此レニ分配付屬セシムル水雷船ハ左ノ如シ。

一等水雷船　十二隻
二等同　三十二隻

以上艦船ノ數ヲ有スルトキハ、甲鐵艦二隻、巡洋艦七隻、砲艦六隻ヲ以テ編制スル四艦隊ヲ備フルコトヲ得ベク、將タ時宜ト地方トニヨリ分テ數多ノ艦隊ヲモ編制スルコトヲ得ベシ。而シテ現在ノ軍艦ノ中扶桑金剛比叡海門天龍筑紫磐城ノ如キ七艦、幷ニ目下製造中ノ浪速高千穗畝傍葛城大和武藏愛宕摩耶ノ八艦、其他未ダ命名セザル一艦ヲ合スルトキハ十六隻トナリ、是等ノ軍艦ハ皆ナ巡洋艦或ハ砲艦トシテ艦隊ニ編入シ用ルニ足ルベシ。故ニ今此十六隻ヲ前陳六十四隻中ヨリ除去スルトキハ尙ホ要スル所ノ軍艦四十八隻、幷ニ一二等ノ水雷船四十四隻ニシテ、卽チ別紙甲號ノ表ニ記スルガ如ク一等甲鐵艦八隻、一等巡洋艦十二隻、二等巡洋艦五隻、砲艦十九隻、水雷船運輸船四隻外ニ水雷船四十四隻トス。其甲鐵艦一等巡洋艦ノ如キハ未ダ之ヲ內國ニテ製造スルコトヲ得ザルガ故ニ、曩ニ歐洲ニ派遣セシ當省官員ヲシテ詳細ニ其經費ヲ調査セシメ、又內國ニ於テ製造シ得ベキ者ハ目下製造中ノ者ニ較計シ調査セシニ、卽チ同表ニ記載スルガ如ク軍艦四十八隻水雷船四十四隻之ニ備フベキ兵器水雷ヲ完備シ、一切ノ雜費ヲ合セ總計通貨七千五百五十一萬四千二百四十二圓ヲ要ス。抑モ斯ノ如ク最初ノ計畫ヨリ造艦費額ヲ增加セシ所以ノ者ハ、曩ニ計畫上申セシ頃ニ比スレバ各國海軍ノ形勢大ニ皇張シ、軍艦構造ノ法改良セルニ就キ、隨テ我海軍ニモ之ニ匹敵スベキ巨大堅牢ナル甲鐵艦數隻ヲ製造セザル可ラザルト、各艦ニ許多ノ水雷ト機砲トヲ完備スルト、數十隻ノ水雷船ヲ要スルトニヨレリ。是等ノ義ハ皆ナ最初ノ計畫ニ含有セズ。故ニ造艦費ヲ增加セザル可ラザレバナリ。然ルニ十六年度以降八ケ年間ニ下附セラルベキ造艦費ノ總金額ハ通貨二千六百六十四萬圓ニシテ、此內既ニ購入セシ筑紫艦ノ代價、海門天龍兩艦ノ殘業費、浪速高千穗等十艦ノ製造費水雷機砲等ノ購求費トシテ既ニ支出セシ又ハ十九年度迄ニ支出ス可キ金額ハ別紙乙丙兩表ニ揭グル如ク、通貨千百四萬三千八百四十四圓ニシテ、二十年度以降二十三年迄ノ造艦費未出ノ殘額ハ通貨千五百五十九萬六千百五十六圓有リ。之ヲ前ノ七千五百五十一萬四千二百四十二圓ノ內ニ充ルモ尙ホ不足スル所ノ金額ハ甲號ノ末行ニ揭グルガ如ク、通貨五千九百九十一萬八千八十六圓ナリ。是レ

即チ軍艦四十八隻ト水雷船四十四隻トヲ新製スル費額ニシテ、前陳數艦隊ヲ整備セラルルニハ更ニ此金額ヲ要スル者ナリ。此議ハ曩ニ十六年軍艦費別途御下付ノ事御達有之候際ニ於ル支出ノ御計畫ニ大ナル差違ヲ生ゼシムル者ニ付、今回更ニ上稟シ、以テ支出ノ御計畫ヲ仰ギ、二十年度以降既定ノ造艦費ヲ操上ゲ尚ホ不足額ヲ更ニ增加御下附アランコトヲ希望ス。

然レドモ是非十六年度以降八ケ年間ノ造艦費二千六百六十四萬圓ヲ以テ軍艦製造ノ計畫ヲ立テ、艦隊ヲ編制セントスルニハ甲鐵艦ノ製造ヲ止メザル可カラズ。是レ他無シ甲鐵艦ハ巨多ノ經費ヲ占ムレバナリ。依テ甲鐵艦ヲ除キ艦隊ヲ編制スルニハ、即チ甲第二表ノ如ク甲艦三十六隻ヲ以テ三艦隊ヲ編制シ、三水雷船隊ヲ編制シテ各艦隊ヲ分配付屬セシムルヲ可トス。而シテ此艦隊中ニハ扶桑浪速高千穗畝傍ノ如キヲ一等巡洋艦トシ、金剛比叡海門天龍高雄葛城大和武藏筑紫ノ如キヲ三等巡洋艦トシ、磐城愛宕摩耶及ビ未ダ命名セザル軍艦一隻ノ如キヲ砲艦ニ充ツ。斯ノ如ク計畫スルトキハ同表ニ揭グル如ク、今茲ニ新造スベキ艦船ハ二十二隻ニシテ即チ二等巡洋艦二隻、三等巡洋艦三隻、砲艦十四隻、水雷艇運輸船三隻、外ニ水雷艇二十四隻、裝甲水雷船十八隻及ビ各艦ニ裝備スベキ魚形水雷二百六十八個、幷ニ水雷發射管ニシテ、其經費豫算雜費ヲ合セ凡ソ通貨千五百五十九萬六千百五十六圓ナリ。即チ二十年度以降ノ殘額千五百五十九萬六千百五十六圓ニシテ支辨スルコトヲ得ベシ。然バ別途ニ增額ヲ要セザル者トス。

以上ノ兩議ニ就テハ深ク閣議デ被盡至急御決定有之度此旨上申候也。

明治十八年

海軍卿伯爵　川村純義

太政大臣公爵　三條實美殿

別途增額

五千九百七十三萬九千六百九十九圓

大山陸軍卿陸軍經費定額減削シ能ハザル理由ノ上奏

參議兼陸軍卿伯爵　大山巖

謹ンデ陸軍經費定額ノ減削シ能ハザル理由ヲ述テ
聖鑒ヲ仰ギ奉ル事

伏テ惟ルニ兵備ハ邦家ヲ維持シ萬民ヲ保護スル所以ノ者ニシテ、其完否ハ實ニ一國盛衰ノ係ル所ナレバ、時ノ變遷ニ隨ヒ世ノ開進ニ應ジ、務メテ其宜シキヲ謀ラザル可カラズ。是ヲ以テ大政復古以還

叡思專ラ兵備ノ上ニ注ギ、舊來ノ軍制ヲ一新シ、鋭意軍備ヲ擴張セラル。是ニ於テ兵制軍備年ヲ逐フテ整頓シ、十全ノ計畫幾ント將サニ其緒ニ就ントセリ。故ニ曩者連年征討ノ役アリ、就中十年西南ノ亂ノ如キハ稀有ノ大騷擾ナリシト雖ドモ、直チニ　皇威ヲ發揚シ、速カニ戡定ノ功ヲ奏シ、之ヲ外ニシテハ七年臺灣ノ役ノ如キ、十五年十七年朝鮮兩度ノ變ノ如キ、皆一擧ニシテ之ヲ定メ、我ガ獨立帝國ノ體面ヲ保チ萬國ニ愧ルナキヲ得シ者下シテ

陛下武德ノ餘光ニ非ザルナシ。夫レ維新以後僅々一絕有餘ノ星霜ヲ以テ能ク數百年來衰頽ノ世運ヲ挽回シ、此成績ヲ見ルニ至レルコト實ニ海外諸國ノ或ハ數十百年ヲ歷テ始メテ得ル所ノ者ニシテ

聖旨ノ感孚スル所其效偉ナリト謂フ可シ。然リト雖モ以上述ル所ノ成績ハ僅ニ內地ノ亂ニ戡チ、僅ニ蠻島弱邦ノ變ニ應ジタル者ノミ。未ダ歐洲諸强國ニ對シ我武ヲ耀シタルニハアラザルナリ。我國今日ノ武備未ダ充實セズ、未ダ以テ八道ノ國境ヲ守禦スルニ足ラズ。豈小成ニ安ンズ可ケンヤ。凡ソ軍隊兵備ナル者平時ニ在テ之ヲ觀レバ殆ンド無用ノ長物ノ如ク、之ヲ有用ノ具トスルモ亦其夥多ヲ要セザルニ似タリ。之ヲ物ニ譬レバ人家ノ墻壁ナリ、海岸ノ堤防ナリ、苟クモ家ヲシテ盜賊ノ患ナク、海岸ヲシテ波濤ノ虞ナカラシメバ何ゾ墻壁ヲ構ンヤ。何ゾ堤防ヲ築ンヤ。玆ニ理財家アリ、固ヨリ盜賊波濤ノ難ヲ知ル、然レドモ財ノ構墻築堤ニ費耗スルヲ憂フ。乃チ說ヲ爲シテ曰ク、盜賊常ニ至ラズ激浪狂濤ノ害果シテ幾百年ノ後ニ在ルヲ知ラズ、墻止ニ外觀ヲ裝ハンノミ、堤豈高大ヲ要センヤト。千金築堤ノ費ヲ減ジテ五百トシ、百金ノ墻ヲ構ルニ僅カニ二三十金ヲ用ヒ、其餘ス所ヲ以テ大ニ田圃ヲ懇闢シ、大ニ什器ヲ購求シ、以テ計ヲ得タリトセシニ、詎ゾ圖ラン一朝雪浪地ヲ捲テ至リ、一夜鼠竊隙ヲ鑽テ入リ、田ヲ潰シ器ヲ奪ハレ、其失フ所既ニ節儉セシ所ニ倍蓰シ、再ビ之ヲ修繕シ且ツ其所失ヲ補ヘバ其費用復タ貲ラレザルニ至ラントハ。兵備ノ平日ニ減縮ス可カラザ

ル奚ゾ此ニ異ナラン。若シ兵備ノ墻壁ヲシテ疎ナラシメバ其家國ノ富ヲ增スモ適々、寇盜ニ資スルノミ。理財殖產モ亦何ノ益カアラン。是ニ由テ之ヲ觀レバ富國ト强兵トハ固ヨリ相須テ偏廢ス可カラザル車ノ兩輪ノ如シト雖ドモ、萬國竝立ノ世ニ於テハ實ニ强兵ヲ重トスルナリ。歐洲人言ヘルアリ。曰ク平和破裂後ニ歎ズルノ無益ヲ知ラバ、多兵ヲ平時ニ養フヲ厭フ可カラズト、又曰ク兵備ハ平和ノ保險ナリ、軍費ハ身體財產ノ保險料ナリト。又曰ク歐洲各國ノ民ハ概ネ兵ノ爲メニ其總額ノ三分一ヲ出ス、然レドモ兵ノ此稅金ヲ受ルヤ、之ヲ其庫中ニ藏スルニ非ズ、其消耗スル物品ト交換シテ其納稅者ニ還付シ、復タ一錢ヲ遺スコトナシ、故ニ歲月一周スレバ其金ノ全額再ビ納稅者ノ囊中ニ在リト。又曰ク百代ノ平和ハ古ヨリ未ダ之ヲ聞カズ、將來モ亦期ス可カラズ。若シ平和ヲ得ント欲セバ戰ノ準備ヲ怠ル可カラズトハ千歲不朽ノ確言ニシテ、弱國ノ强國ニ直接或ハ間接ニ出支スル金額ノ其養兵費用ニ超過スルハ萬古不易ノ實歷ナリ。弱兵ノ國ニシテ一タビ强兵ノ國ニ制セラレンカ、必ズ其自家ノ資ヲ擲テ强兵ノ國民ヲ養フニ至ルハ勢ノ免カレザル所ニシテ、普通自然ノ實迹ナリ。故ニ若シ自國ノ兵ヲ養フヲ厭フモノアラバ、卽チ之ヲ敵兵ヲ養フヲ好ム人民ト謂ハザル可カラズ。嚴窮ニ按ズルニ、是ノ數則ノ言一トシテ的切精確ナラザルナシ。故ニ今日ノ時勢ヲシテ永ク干戈ノ虞ナカラシメ、我日本帝國ヲシテ天地ノ間ニ獨立シ、曾テ敵國ナカラシメバ亦以テ已ム可シト雖ドモ、試ニ國形ヲ看レバ四境ノ外八面ノ海處トシテ强敵ノ衝路ニ非ザルハ無ク、又時勢ヲ考フレバ魯土清佛ノ戰爭ヨリ、亘文濟州兩島ノ事ニ至ルマデ、禍難ノ商鑒近ク目睫ニ在リ、兵備ノ益々皇張セザル可カラザル豈智者ヲ待テ後ニ知ランヤ。若シ兵備ヲシテ充實セザラシメバ何ヲ以テカ外侮ヲ禦ガン。縱ヒ天幸ニ賴リ我ニ外寇ノ事ナキモ、禍亂忽チ隣國ニ發セバ何ヲ以テカ局外中立ヲ保タン。思フテ此ニ至レバ殆ンド寢食ヲ安ゼズ。寒心ニ堪ヘザルナリ。大凡兵備ハ僅ニ守ルニ足ルヲ以テ足レリトセズ、必ラズヤ進ンデ攻ルノ力アリテ而テ後チ退テ守ルヲ得、期スルニ積極ノ遠略ヲ以テシテ始メテ消極ノ防守ヲ保ツベノキミ。故ニ今日獨立國ノ急務ハ一ニ兵備ノ皇張ニ在ル者トス。嚴謹デ按ズルニ是レ蓋シ十五年十二月ノ

勅諭アリシ所以ナラン、

勅諭ニ曰ク戊辰以來民力ヲ休養シ、根本ヲ培殖シ、偏ニ內政ノ急ヲ思シ召サルルモ、方今宇內ノ形勢ニ於テ陸海軍ノ整備ハ實ニ不得已ノ事宜ニ在リ。因テ此際時ニ措クノ宜キヲ酌定シ、國家ノ長計ヲ誤ラザル樣精々廟議ヲ竭スベシト。續テ常備兵員ヲ定數マデニ增加スベキ爲メ十六年度以降年額百五十萬圓ヲ增シ、外ニ東京灣砲臺建築費ハ年額二十四萬圓ト定メ、以上ノ年額ニ餘贏アル時ハ大藏省ノ軍備金ニ組入置カルルノ內達ヲ奉ジ、又續テ十六年一月二十二日曩ノ

勅諭ヲ貫徹セラルベキ　御趣意ヲ以テ、更ニ兵隊增置ノ爲メ十八年度以降年額二百萬圓ヲ增サレ、又續テ（十六年五月三十日）前ノ十七年度ヨリ五十萬圓ヲ加ヘ、二百萬圓ト定メラレ、卽チ十八年

度以降ハ曩ノ增額二百萬圓ト共ニ合計四百萬圓ヲ以テ軍備皇張ノ費額ト定メラルルノ内旨ヲ奉ジタリ。洵ニ

聖旨ノ深遠ナル内外ノ時勢ヲ參酌シ軍國ノ重事ヲ規畫セラルル毫モ其機宜ヲ失ハズ、滿朝ノ臣子感載セザル者ナク、殊ニ職ヲ軍務ニ奉ズル者ハ孜々汲々日夜勵精一ニ　聖旨ヲ遵奉シ、大ニ計畫スル所アリ。兵備ヲ一新シテ七軍管内師團旅團ノ編制ニ改メ、或ハ聯隊ノ數ヲ增シ、或ハ大隊ヲ聯隊ニ中小隊ヲ大隊ニ改編シ、又出師ノ準備ヲ定メ戰列補充後備諸隊ノ制ヲ建テ、明治二十一年ヲ期シ悉ク此大事業ヲ完結シ、一朝有事ノ日ニ方リ約ネ二十萬ノ戰兵ヲ興スニ足ルベキノ基礎ヲ籌畫シタルコト、向來逐次

允裁ヲ仰ギシ所ノ如シ。夫レ此事業タルヤ、兵員ノ增設ニ隨ヒ徵員ノ賦法武學生ノ養成兵器彈藥ノ製造屯營ノ新築衣食ノ調辨ヨリ醫治馬政ニ至ルマデ從テ頻繁更張セザルヲ得ズ。加之目下海防及ビ測量ノ一大要事アリ、右揭グル所ノ者ハ特ニ大綱ノミ。此他百般ノ事一トシテ會計經理ノ精算ニ基カザルナシ。凡ソ軍備ノ經理ヲ總辨スルニ、倘シ或ハ一歩ヲ誤レバ

勅諭ノ所謂國家ノ長計其レ何ニ賴テカ立ン。一念常ニ茲ニ在リ。夙夜戰競措ク能ハズ。是ニ於テ主トシテ特殊ノ節儉ヲ行ヒ、悉心委籌豫定ノ金額ヲ以テ此重要ノ計畫ニ當リ百方苦慮（節儉ノ諭達書別ニ具ス）以テ維持シテ今ニ至レリ。然ルニ今ヤ卒然軍備豫定ノ年額ヲ減削セラレントスルノ議ニ遇ヘリ。眞ニ驚歎ノ至リニ堪ヘズ、蓋シ是レ國家ノ財政ニ於テ萬已ムヲ得サセラレザルノ廟算ニ出ル者ナルベシト雖モ、抑々又乃チ十五年十二月ノ

勅諭ト相齟齬スルナカランヤ。前ニ述ル如ク嘗テ

聖旨ニ基キテ計畫シタル事業ハ目下正サニ其半バニ在リ。專心一意其成否ヲ之レ慮レリ。今ニシテ或ハ其一端タリトモ廢止スルニ至ラバ全體ノ組織計畫支離窒礙シテ進ム能ハズ。退ント欲スルモ亦能ハザル者アラン。夫レ一簣ノ力ヲ虧ク、猶ホ九仞ノ功ヲ空フス。況ンヤ半途ニシテ廢スルヲヤ。其經濟ノ道ニ於ケル亦恐クハ其方ヲ得タリト爲サザルナリ。或ハ曰ハン近來物價低落復タ前年ノ比ニ非ズ、今總額ノ幾分ヲ減ズルモ必ズ事業上ニ於テハ其差違ヲ見ザルベシト。是レ又膚淺ノ見ノミ。夫レ皇張ノ費額タルヤ、其事業ト併行スルニ至テ素ヨリ餘裕アルヲ見ズ（例ヘバ步砲兵ハ定數ニ充ルヲ得ルモ騎工輜重ノ三兵ハ增設スル能ハザルノ類）反テ漸次缺乏ヲ見ルニ至ルハ勢ノ自然ニシテ豫メ推算スル所タリ。而シテ之ニ處スル又別法ナシ。唯冗ヲ去リ簡ニ就キ節儉以テ其目的ヲ達スルノ一途アルノミ。乃チ其既往ノ計算ヲ詳ニ別紙ニ具セリ請フ之ヲ察セラレンコトヲ。又或ハ兵備增設ノ完結ノ期ヲ緩フセンカ、是レ亦行フ可カラザルナリ。方今宇内ヲ通觀スルニ、各國競フテ兵ヲ養ヒ銃砲船艦精益々精ヲ求ム。嚴昨年經歷スル所ヲ以テ之ヲ觀ルニ、獨佛英魯墺ハ論ヲ俟タズ、伊太利ノ如キモ頻年大ニ軍備ヲ張リ、巨艦大砲ノ其邦内ニテ辨ズル能ハザルハ鉅資ヲ擲テ外邦ニ購ヒ

其汲々タルノ狀恰モ焦眉ノ急アルガ如シ。國民租稅ノ多額ナル亦推テ知ルベキナリ。而シテ其兵備ノ點ニ於テハ上下一致擧テ得色アリ。宜ナル哉近來國運蒸々トシテ日ニ上リ將サニ人ヲシテ指ヲ歐陸第六强國ニ屈セシメントスルヤ、文明富强ヲ誇稱スル歐洲諸國スラ尙ホ其兵備ニ勉ムル此ノ如シ。況ンヤ積弊未ダ除カザル國ニ於テヲヤ。夫レ我國ノ兵備ヲ皇張セザル可カラザルハ上文述ル所ノ如ク、之ニ加ルニ近來歐洲諸强國ノ政略大ニ亞細亞殖民ニ在ルガ如ク、乃チ亞細亞ヲ顧レバ儼然帝國ノ實力アル者獨リ我ト淸トノミ。而シテ淸ノ內情測ル可カラズ、唇齒輔車ノ實アルナシ。是レ實ニ內外多事ノ秋、決シテ文恬武熙ノ日ニ非ズ。豈兵備增設ノ期ヲ緩フス可ケンヤ。然ラバ則チ更ニ定額ノ增加ヲ求メンカ是レ固ヨリ願フ所ナリ。然リト雖ドモ今ヤ國庫ノ甚ダ豐富ナラザルヲ聞ク、焉ゾ軍衙獨リ備ハルヲ求メン、一時默シテ目今ノ定額ヲ守リ以テ他日ヲ待タンノミ。而シテ其增額ヲ請フコトハ以テ他日ヲ待ツ可シト雖ドモ、我兵備ノ擴張ハ決シテ一日モ遲疑ス可カラズ。勉メテ經費ヲ節減シ、勉メテ多少ノ贏餘ヲ生ジ、其贏餘ノ金額ハ則チ以テ漸次現出スル缺乏ノ點ヲ補充（卽チ騎工輜重ヲ增設スル類）シ、勉メテ兵備ヲ整頓シ必ズ皇張ノ

聖旨ヲ貫徹スルヲ期セシム。果シテ此ノ如クナレバ國庫ノ出ス所ハ曾テ今日ヨリ增スコト無ク、而シテ兵備ノ張ル所ハ必ズ前年ニ加ル有ラム。兵備ヲ進メテ費額ヲ進メズ、是レ則チ巖ガ十五年ノ勅諭ヲ奉ジテ而シテ亦今日ノ廟議ニ背カザル所以ノ義務ナリ。若シ減削ヲ此他ニ求メバ、恐ラクハ唯十五年ノ

勅諭ニ反シ、我帝國ノ兵備ヲシテ退步セシメ、卽チ我ガ軍隊ヲ破壞シ、我ガ人民ノ財ヲ以テ他日敵兵ヲ養フノ針路ニ赴カシムルヲ免レザラン。巖愚昧ニシテ廟謨ノ蘊奧ヲ忖度スル能ハズ。他ニ長計ヲ求ムルヲ知ラズ。唯願クハ姑ク目今ノ定額ニ仍リ以テ他日ノ豐富ヲ待チ、專ラ皇張ノ事ニ從ヒ、着々步ヲ進メ、以テ我日本帝國强兵ノ好結果ヲ豫定ノ年期ニ見ンコトヲ實ニ希望ノ至リニ堪ヘズ。因テ謹デ既往ノ成績ヲ別單ニ具シ恭シク

聖鑒ヲ祈ル。倘々採擇允准ヲ蒙ルニ於テハ獨リ我軍隊ノ幸ナルノミナラズ、實ニ我帝國億兆臣民ノ幸福ナリ。謹奏

明治十八年十月

諸省卿

戊辰以來民力ヲ休養シ根本ヲ培殖シ偏ニ內政之急ヲ被思食候ニ有之候處、方今宇內之形勢ニ於テ陸海軍之整備ハ實ニ不得已之事宜ニ有之、因テ此際時ニ措クノ宜キヲ酌定シ國家之長計ヲ誤ラザル樣精々廟議ヲ謁スベキ旨。

御沙汰候事

大山陸軍卿陸軍經費定額減削シ能ハザル理由ノ上奏

明治十五年十二月二十五日

太政大臣　三條實美

諸省卿

維新日淺ク民力未舒之際事宜不得已之急務ニ依リ今度別紙之通被仰其候就テハ深ク宸襟ヲ被爲惱候條此際各廳ニ於テ不急之庶務ヲ節略シ深重之聖旨貫徹候樣可致此旨相達候事

明治十五年十二月二十五日

太政大臣　三條實美

陸軍省

軍備皇張ノ儀被仰出候ニ付、差向常備兵員ヲ定數迄ニ增加可致、右費用ノ儀ハ明治十六年度以降年額通貨百五十萬圓ヲ目途トシテ着手致シ、年々增加スベキ兵員及ビ之ニ係ル費用ノ豫算取調可申出、尤東京灣砲臺建築ノ費用ハ右ノ外ニ年額二十四萬圓ヅツ可相渡此旨及內達候事。

但年額ニ餘贏アルトキハ大藏省ニ於テ之ヲ軍備金ニ組入置候ニ付此旨相心得ベシ。

明治十五年十二月三十日

太政大臣　三條實美

陸軍省

軍備皇張ノ儀被仰出候ニ付、差向常備定數迄ニ增加可致旨及內達置候處、猶來ル明治十八年ヨリ兵隊增置去ル十二月廿五日御沙汰相成候御旨趣貫徹候樣可致筈ニ付、同年度以降年額通貨二百萬圓ヲ目途トシ年々增加スベキ兵員及之ニ係ル費用ノ豫算取調可申出此旨及內達候事。

明治十六年一月二十二日

太政大臣　三條實美

陸軍省

軍備皇張費トシテ十六年度以降年額通貨百五十萬圓宛相渡候積相達置候處、尙詮議ノ上來ル十七年度ヨリ通貨五十萬圓增加都合二百萬圓宛下付スベク候條、右金額ヲ目途トシ施設可致此旨內達候事。

但十八年度ヨリ二百萬圓別段增加ノ儀ハ本年一月廿二日達ノ通心得ベシ。

大山陸軍卿陸軍經費定額減削シ能ハザル理由ノ上奏

明治十六年五月三十日

太政大臣　三條實美

陸軍部内節儉ノ内諭

軍備御皇張兵員増加之儀ニ付テハ昨年十二月中厚キ御沙汰之旨幷陸軍定額金増加之儀再三御内達之趣等其時々及内達置候通ニ有之、抑軍備御皇張之御趣旨ハ方今宇内之形勢ニ於テ萬止ムヲ不被爲得ニ出タル儀ニシテ、其定額金ヲ増加セラルルハ則兵ノ給養屯營ヨリ銃器彈藥等ノ備具實ニ缺クベカラザルノ用途ニ有之、今其計畫ニ就テ將來ノ費途ヲ推算スルニ、事業ニ對シテハ金額尚ホ不足ヲ告ゲ、充分ノ成功ヲ他日ニ見ンコト未ダ以テ無覺束、去リ迚此上増額ノ儀ハ之ヲ望ムモ能ハザル所ニ候得バ、結局預定ノ額内ヲ以テ此重要ノ計畫ニ當リ百方注意配當心孜々トシテ擧行セザルベカラズ。就テハ一事一業毎ニ勉メテ冗ヲ去リ簡ニ就キ、兵員ヲ増置スルノ御趣旨ニ背カザルコト尤モ肝要ノ儀ニ有之候。然ルヲ偏ニ皇張ノ趣旨ニ馳セ、日常外務ノ間ニ於テ儘々意ヲ茲ニ用ヒズ、是迄既ニ相濟來候事ヲモ新ニ伸張若クハ増設ノ儀請求被致候間モ有之候處、右樣ニテハ前陳ノ費額倍々缺乏ヲ加ヘ終ニハ擴張スベキ事業或ハ澁滯ヲ生ズルニ至ルモ難計、萬一斯ノ如キ不幸ヲ來タスコトアルニ於テハ深重ナル

聖旨ニ對シ洵ニ不相濟次第ト痛心苦慮ノ至リ、然シテ其茲ニ至ラシメザルハ細大用ヲ節シ緩急取捨ヲ加ヘ、庶般ノ費用ヲ一層省略スルノ點ニ有之儀ニ付、深ク此邊ニ注意アランコトヲ切ニ希望スル所ナリ。右等ノ儀各長官ニ於テハ固ヨリ篤ク其心得有之事ト存候得共、尚ホ爲念此旨及内達候也。

明治十六年六月十五日

陸軍卿大山巖

軍備皇張費取調書

一、明治十五年十二月軍備皇張之儀被　仰出、差向常備兵ヲ定數迄ニ增加可致、右費用ノ儀ハ同十六年度ヨリ年額通貨百五十萬圓、同十七年度ヨリ通貨五十萬圓、同十八年度ヨリ猶通貨二百萬圓ヲ增シ、都合通貨四百萬圓宛年々增加可相成ニ付、其兵員及費用豫算取調可申出旨御內達之趣ニ依リ、增兵着手順序ノ計畫、及之ニ係ル諸費豫算ノ儀ハ當時進達致置候通ニ有之、爾來右之計畫ニ基キ、十六年度ヨリ仙臺鎭臺ニ步兵二大隊砲兵工兵一中隊宛、名古屋廣島兩鎭臺ニ砲兵工兵一中隊宛、各鎭臺ハ看護卒若干名宛ヲ召募シ、其他陸軍大學校ヲ新設シ、後備軍司令部ヲ擴張シ、戶山學校ニ士官下士ヲ入校セシメ、射的體操ノ科業ヲ傳習セシメ、及山野砲ノ改造ニ着手シ、同十七年度ヨリ各鎭臺ニ六師團ヲ置キ、步兵砲兵兩隊ノ編制ヲ改正シ、又本年度ヨリ近衞ニ一師團ヲ置キ、步兵砲兵騎兵三隊ノ編制ヲ改正ス。右之通師團ヲ置カレタルニ依リ、來ル二十一年度迄ニハ鎭臺ニ步兵二十四聯隊砲兵六聯隊、近衞ニ步兵四聯隊砲兵一聯隊騎兵一大隊ヲ完備セシメ候目的ニテ既ニ着手致候。就テハ之ニ要スル士官下士ノ生徒ヲ年々增募シ、士官學校教導團ニ於テ教育セシメ、或ハ兵營ノ建築兵器彈藥被服陣具馬匹其他增員ニ係ル諸費不少、依テ十六年度ヨリ來ル二十二年度迄七ヶ年ニ割越經理スルモ、尙御下附金ニ對シ差引朱書之通致不足候付、不得止四月入營スベキ徵兵ヲ七月ニ繰下ゲ、或ハ四月滿期除隊兵ヲ一ヶ月前乃至三ヶ月前歸鄕セシメ、之ヨリ生ズル處ノ金員ヲ以テ補塡シ、尙ホ不足ノ分ハ被服戰時豫備品ヲ以テ一時繰替支辨スル等種々繰合セ、漸ク增員兵ノ給養維持致候目的ニ有之、其順序等ハ詳ニ別表豫算書備考ニ揭ゲタル通ニ候。然ルニ今般御內儀ノ如ク增加兵ニ對スル金額ノ內二百萬圓御減雜相成候得者維持ノ道無之候事。

軍備皇張費取調諸表

擴張費豫算

名稱＼年度	十六年度	十七年度	十八年度	十九年度	二十年度	二十一年度	二十二年度
近衛六鎭臺步兵隊增費	六〇、四六八	三五四、八六五	七三一、六六八	一、〇八〇、三七〇	一、四九五、七一五	一、六五八、七七七	一、六五八、七七七
近衛騎兵隊增費	〃	一〇、二八一	一二、四一九	一二、四一九	一二、四一九	一二、四一九	一二、四一九
近衛六鎭臺砲兵隊增費	四二、三一〇	一三三、五四四	二四七、二七三	二八九、六一一	三四〇、五二八	三五三、二四〇	三五三、二四〇
仙臺、名古屋、廣島、工兵隊費	三〇、九四五	四六、二三〇	五三、一七三	五三、一七三	五三、一七三	五三、一七三	五三、一七三
近衛六鎭臺輜重兵隊增費	〃	〃	三三、六五四	八八、八三三	九八、八〇五	一〇五、八六三	一〇五、八六三
大學校費	五一、三一八	一五六、五三九	五六、五三九	五六、五三九	五六、五三九	五六、五三九	五六、五三九
士官生徒增員費	三五、〇八九	四八、一五五	八〇、五九三	七八、二九二	七三、九七〇	六四、九九一	六四、九五〇
戶山學校增費	五〇、二九六	五三、九八七	四七、七三六	五〇、二九六	五〇、二九六	五〇、二九六	五〇、二九六
教導團生徒增員費	一八二、五〇〇	六二、一四六	一〇〇、九四九	七二、一三九	七二、三八一	七二、三八一	七二、三八一
軍樂隊增費	二六、一九五	一〇、九八四	九八、八五五	九〇、四三五	九〇、四三五	九〇、四三五	九〇、四三五
後備軍司令部增員費	六四、七一七	六四、七一七	六四、七一七	六四、七一七	六四、七一七	六四、七一七	六四、七一七
看護長增員費	三、八六六	四、八七四	六、一九五	六、二六〇	六、二六〇	六、二六〇	六、二六〇

徵兵看護卒諸費	三五、六六	四三、八二一	六一、一二六	六一、一二六	六一、一二六	六一、一二六	六一、一二六
山野砲改造費	一〇〇、〇〇〇	一五六、七六六	一五六、七六六	一五六、七六六	一五六、七六六	一五六、七六六	一五六、七六六
兵器彈藥增費	九九、〇〇四	四二八、〇三七	四一、九四四	四九二、六五二	五四〇、一二	一五六、七六六	一五六、七六六
鍬兵器具費	一、一七二	九、三七三	五、二七三	二、九三〇	二、三四四	〃	〃
被服增費	一五六、三九七	四七三、九七四	四九〇、〇三三	五六、六三二	四七〇、三三九	四六〇、四五七	四六〇、四五七
陣具增費	六、〇〇三	一二八、三六八	五二、一八二	四〇、四七五	二四、五四五	八〇、六九六	八、六九六
馬匹增費	六、〇八六	四〇、六二九	四二、五四八	三〇、六四八	二三、四一六	一九、三三〇	一九、三三〇
患者增員費	五九四	一、四七三	一五、六八〇	二五、二〇六	二六、二七二	二六、二八六	二六、二八六
監獄費增額	四九一	九二一	八九〇	二二、八九三	一三、四三三	一三、四四〇	一三、四四〇
野營行軍增費	〃	一二、二八三	三一、七五八	四五、三二八	四八、八四一	四八、九八七	四八、九八七
豫備軍復習增費	〃	五〇、三一七	五〇、三一七	五四、五七〇	五八、八二一	八一、五五一	八四、六一〇
營繕費	一、〇四二、四七九	一六八、九八〇	九三四、六八六	五三、〇六六	一四二、〇六六	七五、〇〇〇	七五、〇〇〇
前項科目ノ外師團旅團本部及擴張ニ係ル諸費	〃	二六、四二二	四七、〇九七	九九、八六三	九七、六八三	一二八、三三四	一二五、六〇六
合計	一、九九四、九六一	二、三八六、六二八	三、七四一、四五〇	三、九四四、三三五	四、〇六三、〇〇七	四、〇七〇、〇〇三	四、〇八四、二五一
十六年度以降擴張費	一、五〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇
差引過不足	四四四、九六二	三八六、六二八	二五八、五五〇	五五、七七五	〃	〃	〃

此外不足金補鎮

名稱＼年度	十六年度	十七年度	十八年度	十九年度	二十年度	二十一年度	二十二年度
各兵十七年四月入營ノ生兵ヲ同年七月ニ繰下入營セシムルニ付減額	二三、五一八	〃	〃	〃	〃	〃	〃
滿期除隊兵ノ內若干十六年度ニ在テハ一ケ月前歸鄉セシムベキノ如尙二ケ月前歸鄉セシムルニ付減額	七五、三三四	〃	〃	〃	〃	〃	〃
滿期除隊各兵十七十八年兩年三ケ月前歸鄉セシムルニ付減額	〃	一二三、七〇六	一三〇、九五〇	〃	〃	〃	〃
十七年度定期豫備軍復習ヲ止メ右費用減額	〃	一五三、一〇五	〃	〃	〃	〃	〃
前同斷戰時人員外復習スベキ費用減額	〃	五〇、三一七	〃	〃	〃	〃	〃
被服費流用及在庫品繰替補辨	三一〇、〇〇〇	三八九、九五〇	〃	〃	〃	〃	〃
前條被服品買辨入戾	〃	三一〇、〇〇〇	三八九、五〇〇	〃	〃	〃	〃
再差引過不足	一三、七八二	〃	〃	五五、七五五	〃	〃	〃
營繕費年度繰上金額	〃	九三四、七六六	五三三、〇六四	一四二、〇六六	〃	〃	〃

備考

一、歩兵隊費中十六年度ニ要スル費用ハ仙臺鎭臺ニ十六年春ヨリ二大隊（十六、十七、十八、三ケ年間ニ三分一宛）增加ノ處、十五年度ニ屬スル分ハ同年度通常經費ヨリ流用支辨シ十六年度以降ニ係ル分ヲ本表ニ積算ス。

○各鎭臺歩兵隊ハ十七年度（十七年七月ヨリ）近衞歩兵隊ハ十八年度（十八年七月ヨリ）別表甲乙號ノ通編成替着手ニ付該表ニ基キ追年隊數兵員增加ニ應ジ豫算金額ヲ積算シ、而シテ通常經費豫算高ヲ引去リ超過ノ金額ヲ增加スルニ付要スル費途ト見做シ本表ニ掲載ス。

一、近衞騎兵隊ハ一中隊ノ處十七年ヨリ大隊ニ編成替ニ着手ス。其費額ハ同表附錄ニ基キ豫算シ而シテ通常經費豫算高ヲ引去リ全ク超過ノ金額ヲ積算ス。

一、砲兵隊豫費中十六年度ニ要スル分ハ仙臺名古屋廣島三鎭臺ヘ大隊幹部及一中隊宛十六年春ヨリ（十六、十七、十八ノ三ケ年間三分一宛）增加ノ處、十五年度ニ屬スル分ハ同年度通常經費ヨリ流用支辨シ十六年度以降ニ係ル費用ヲ積算ス。

○同上費中十七年度以降ノ分ハ各鎭臺砲兵隊ハ十七年近衞砲兵隊ハ十八年度（十八年七月ヨリ）ヨリ別表丙號近衞乙號表ノ通リ編成替ニ着手スル故追年隊數兵員ノ增加ニ應ジテ豫算ス、而シテ通常經費豫算高ヲ引去リ超過ノ金額ヲ增加スルニ付要スル費途ト見做シ本表ニ掲載ス、

一、工兵隊、十六年春ヨリ仙臺名古屋廣島三鎭臺ヘ一中隊宛（十六、十七、十八年三ケ年間三分一宛）新設ノ處、十五年度ニ屬スル分ハ同年度通常經費ヨリ流用支辨シ十六年度以降ニ要スル費用ヲ本表ニ掲載ス。

一、輜重兵隊ハ編成人員表未定ニ付、假ニ近衞及各鎭臺一大隊宛設置ノ見込ヲ以テ豫算シ、而シテ現在員ニ要スル費途ヲ引去リ超過金額ノミヲ本表ニ掲載ス。但東京鎭臺輜重兵一中隊ノ內一小隊

ヲ近衛輜重隊ニ充ツベキ分同所騎兵ニ組替タルヲ以テ一小隊分ニ當ル士官下士卒ノ費途不足ス。

一、大學校ハ十六年春ヨリ設置ノ處、十五年度ニ屬スル分ハ同年度通常經費ヨリ支辨シ十六年度以降ニ係ル費用ヲ積算ス。

一、士官生徒增員費ハ十七年度ヨリ步砲兩隊編成替ニ付要スル生徒增員ノ費用ニシテ、其生徒人員ハ別表丁號表面ニ基キ積算ス、尙外ニ生徒大隊ニ一中隊分ノ士官下士增加ノ費途ヲ加ユ。

一、戶山學校生徒增員費ハ十六年度ニ於テ後備軍軀員ノ少尉試補、十七年度ニ於テハ同曹長ヨリ、十八年度以降ハ各鎭臺士官下士ヨリ召集ノ費用ヲ積算ス。

一、教導團生徒增員費ハ十六年度ヨリ步兵大隊ハ六中隊分、砲兵ハ大隊分、工兵ハ一小隊分ノ士官下士ヲ增加シ生徒人員ハ別表戊己庚表面ニ基キ積算ス。

一、軍樂隊ハ三樂隊ニ編成シ一隊ハ近衛ニ、一隊ハ教導團ニ置ノ見込ヲ以テ費用積算ス。

一、後備軍司令部增員費ハ十六年度ヨリ各府縣駐在所增設ニ付要スル費途ヲ積算ス。

一、看護長增員費ハ各病院定員表改正增加ニ付要スルモノナリ。

一、徵兵看護卒ハ十六年春ヨリ（三ケ年間三分一宛）徵集セシ處、十五年度ニ屬スル費用ハ同年度通常經費ヨリ支辨シ十六年度以降ノ費用ヲ本表ニ積算ス。

一、山野砲改造費ハ一ケ年ニ金十五萬六千七百六十六圓宛向八ケ年間ヲ要スベキ見込ノ處、初年ニ在テハ金額ノ都合ニ依リ減少シ其不足金ハ後年金繰ノ都合ヲ以テ補塡スベキ見込ナリ。

一、野營演習費豫備軍復習費患者費及監獄費ノ如キハ增員ニ應ジ十六年度豫算中該費ノ比例ヲ以テ積算ス。

一、營繕費ハ增募兵同年度ニ積算スト雖ドモ事業ハ前年度ヨリ着手スルヲ以テ本表末項ノ金額ハ前年度ニ繰上ヲ要ス。

一、各兵滿期除隊兵ハ金繰ノ都合ニ依リ近衛各兵幷東京大阪府下屯在ノ鎭臺步兵ヲ除キ十六、十七、十八ノ三ケ年度ハ三ケ月前ニ歸鄕セシムルノ見込ヲ以テ本表末項ニ揭ゲ減額ヲナシ不足金ノ補塡トス。

一、兵食米ハ初發精米一石ニ付平均九圓六十八錢七厘、蕎麥料ハ平均一日馬匹一頭ニ付二十四錢二厘ヲ以テ豫算ノ處、物價下落ニ付十七年度ハ精米一石平均八圓七厘（十六年一月、六月、十二月三ケ月平均）蕎麥料右同十七錢六厘ニ更正ス。

甲

明治十七年五月　　陸軍省

步兵隊改正着手順序

※ノ隊數ハ新增ニ係ル

鎮臺	聯隊	十七年七月	十八年六月	十九年四月	二十年四月	二十一年四月
東京	第一	三大隊	同	第一大隊 二中隊	第一大隊	同
同 十五		※第一大隊	※第一大隊 ※二中隊	第一大隊 ※二中隊	第一大隊 ※第三大隊	三大隊
同 二		三大隊	同	同	同	同
同 三		三大隊	同	同	同	同
仙臺	同 四	三大隊	同	同	同	同
同 十六		※三大隊	同	同	同	同
同 五		三大隊	同	同	同	同
同 十七			※第一大隊	※第一大隊 ※二中隊	※第一大隊 ※第三大隊	三大隊
名古屋	同 六	三大隊	同	同	同	同
同 十八		※三大隊	同	同	同	同
同 七		三大隊	同	同	同	同
同 十九			※第一大隊	※第一大隊 ※二中隊	※第一大隊 ※第三大隊	三大隊
大阪	同 八	三大隊	同	同	同	同
同 九		三大隊	同	同	同	同
同 十		三大隊	同	同	同	同
同 二十		※第一大隊	※第一大隊 ※二中隊	第一大隊 ※二中隊	第一大隊 ※第三大隊	三大隊
廣島	第十一	三大隊	同	同	同	同
同 二十一		※第一大隊	第一大隊	第一大隊 ※二中隊	第一大隊 ※第三大隊	第一大隊 ※第三大隊
同 二十二		※第一大隊	第一大隊	第一大隊 ※二中隊	第一大隊 ※二中隊	第一大隊 ※第三大隊
同 十二		三大隊	同	同	同	同
同 十三		三大隊	同	同	同	同
熊本	同 二十三	※第一大隊	第一大隊	第一大隊 ※二中隊	第一大隊 ※二中隊	第一大隊 ※第三大隊
同 十四		三大隊	同	同	同	同
同 二十四		※第一大隊	第一大隊	第一大隊 ※二中隊	第一大隊 ※第三大隊	第一大隊 ※第三大隊
備考		本年新増ニ係ル朱書隊數ハ編制替ノ爲メ生ズル人員ハ唯幹部ノミニシテ其増加ヲ止マザル而シテ未ダ聯隊ヲナサザル第何聯隊第何大隊ト稱ス	本年六鎮臺ヲ師團ト又各鎮臺ニ歩兵二旅團ノ本部ヲ置キ第十五第二十四聯隊ヲ置ク	本年第十七第十九第二十一第二十二第二十三第二十四聯隊ニ聯隊本部ヲ置ク		

乙

明治十七年五月

近衞歩砲兩兵隊改正着手順序

陸軍省

※朱書ノ隊數ハ新増ニ係ル

兵種	團隊	十八年七月	十九年四月	二十年四月	備考
歩兵	第一旅團 第一聯隊	第一大隊	同	同	
	第二大隊	第二大隊	同	同	
	第二聯隊	第一大隊	同	同	
	第二大隊	第二大隊	同	同	
	第二旅團 第三聯隊	※第一大隊	同	同	
	第二大隊	※第二大隊	同	同	
	第四聯隊		※第一大隊	※第二大隊	本年歩兵第四聯隊第一大隊本部ヲ置ク
砲兵	第一聯隊 第一大隊	第一中隊	同	同	
	第二中隊	第二中隊	同	同	
	第二聯隊 第一大隊	※第一中隊	同	同	
	第二大隊	※第二中隊 一小隊	第二中隊 ※一一小隊	第二中隊 ※一二小隊	本年歩兵第一旅團本部及ビ第三聯隊本部ヲ置ク 砲兵聯隊本部幷ニ第二大隊本部ヲ置ク

丙

明治十七年五月

砲兵隊改正着手順序

※朱書ノ隊數ハ新增ニ係ル

鎭臺	聯隊	大隊	十七年七月	十八年四月	十九年四月	二十年四月
東京	第一	第一野	一大隊	三大隊	同	同
		第二野	※一大隊			
		第三山	一大隊			
仙臺	第二	第一野	※第一中隊	第一中隊 ※第二中隊	一大隊	一大隊 山第一中隊 ※山第二中隊
		第二野			※山第一中隊	
		第三山	一大隊	一大隊	一大隊	一大隊
名古屋	第三	第一野	※第一中隊	第一中隊 ※第二中隊	一大隊	一大隊 山第一中隊 ※山第二中隊
		第二野			※山第一中隊	
		第三山	一大隊	一大隊	一大隊	一大隊
大阪	第四	第一野	一大隊	三大隊	同	同
		第二野	※一大隊			
		第三山	一大隊			

丁　士官學校生徒人員取調表

（但表中※朱書ヲ加ヘザルモノハ毎年度ノ六月ニ於テ卒業退校スルモノナリ因テ其人員ヲ差引即翌年度人員トス）

			備考
廣島	第五	第一野	
		※第一中隊	本年東京大阪熊本ノ三鎮臺ハ聯隊ニ編成ス他三鎮臺ノ聯隊ヲナサザル大隊ト雖モ砲第何聯隊第何大隊ト稱シ大隊ヲナサザル中隊ニ在テモ砲兵第何聯隊第何大隊第何中隊ト稱ス
		※第一中隊 ※第二中隊	本年仙臺名古屋廣島ノ三鎮臺モ聯隊ニ編成ス
		一大隊	定表ニ因レバ本年仙臺名古屋廣島ノ三鎮臺モ野砲ヲ增加スベキナレ共先ヅ山砲ヲ以テ之ニ代フ
		山第一中隊 ※山第二中隊	本年定表ノ中隊數ニ充ツト雖モ同上三鎮臺ノ第二大隊ハ野砲大隊ニ代フニ山砲ヲ以テシ追テ編制表ノ通リ改ム
熊本	第六	第一野	
		※一大隊	
		一大隊	
		三大隊	
		同	
		同	

	十五年度	十六年度	十七年度	十八年度	十九年度	二十年度	二十一年度	二十二年度	二十三年度
現今在校	159	146	81	31	20				
	歩四十六人 騎五人 特十一人 砲生徒少尉十人 工生徒少尉十七人 初年七十人	※十二月歩四十六人 ※十二月騎五人 ※十二月特十一人 砲生徒少尉四人 工生徒少尉十人 初年七十人	砲工少尉十一人 初年七十人 内騎五人 歩四十五人 特二十人	砲工少尉二十人 ※十二月特十一人	砲工少尉二十人				
十六年九月入校	200 官百八十七人 自十三人	200 同百八十七人 同十三人	200 同百八十七人 同十三人	200 同百八十七人 同十三人	50 砲工少尉三十七人 自十三人	50 同三十七人 同上十三人			
十七年九月入校		200 官百八十七人 自十三人	200 同百八十七人 同十三人	200 同百八十七人 同十三人	200 同百八十七人 同十三人	50 砲工少尉三十七人 自十三人	50 同上三十七人 同上十三人		
十八年九月入校				200 官百八十七人 自十三人	200 同百八十七人 同十三人	200 同百八十七人 同十三人	50 砲工少尉三十七人 自十三人	50 同上三十七人 同上十三人	
十九年九月入校					官百人	同百人	官百人	砲工少尉三十五人	同上三十五人
二十年九月入校						官百人	同百人	同百人	同百人
二十一年九月入校							官百人	同百人	同百人
二十二年九月入校								官百人	同百人
計	※一五九	※三四六	※四八一	※六三一	※五七〇	※五〇〇	※四〇〇	※三八五	※三三五

一中隊分增加ノ人員如左　大尉一名　中尉二名　少尉二名　曹長一名　軍曹七名。

軍備皇張費取調諸表

戊

教導團步兵生徒人員調

※八朱書

	十五年度	十六年度	十七年度	十八年度	十九年度	二十年度
現今在團	三八〇	※十七年三月迄 三八〇	〃	〃	〃	〃
十六年七月 入團	〃	※十七年六月迄 五〇〇	〃	〃	〃	〃
十六年九月 〃	〃	四〇〇	※十八年二月迄 四〇〇			
十七年九月 〃	〃	〃	九〇〇	※十九年二月迄 九〇〇		
十八年九月 〃	〃	〃	〃	一〇〇〇	※二十年二月迄 一〇〇〇	
十九年九月 〃	〃	〃	〃	〃	五〇〇	※二十一年二月迄 五〇〇
二十年九月 〃	〃	〃	〃	〃	〃	一〇〇〇
計	〃					

己

教導團砲兵生徒增員調

※八朱書

	十五年度	十六年度	十七年度	十八年度	十九年度	二十年度	二十一年度
現今在團	一二〇	一二〇	※十七年九月迄 一二〇	〃	〃	〃	〃

十六年八月 入團	一二〇	一二〇	一二〇	※十八年七月迄 一二〇	〃	〃	〃
十七年八月 〃	〃	〃	〃	一二〇	※十九年七月迄 一二〇	〃	〃
十八年八月 〃	〃	〃	〃	〃	一二〇	※二十年七月迄 一二〇	〃
十九年八月 〃	〃	〃	〃	〃	〃	一二〇	※二十一年七月迄 一二〇
二十年八月 〃	〃	〃	〃	〃	〃	六〇	六〇
計							

庚

教導團工兵中隊編成表

	編成人員	現在人員	差引增員
中隊長	一	一	—
小隊長	四	二	二
小隊副長	一	一	—
半小隊長	八	四	四
武器掛	一	一	—
給養係	一	一	—

分隊長	十六	八	八	
馭卒長	二	一	一	
炊事係	一	一	一	
書記	一	一	一	
病室掛	一	一	一	

生徒臨時召募人員　百二十四名　十六年九月ヨリ人團　十八年二月卒業

明治十七年ニ於テ東京鎮臺輜重中隊ノ一小隊ヲ廢ス。依テ該隊全員中ヨリ十五十六年ノ兵各二十二名（合計四十四名）ヲ選拔シテ近衞騎兵隊ニ編入セシム。

近衞騎兵隊ニ於テ現在ノ十五十六年兵各五十名（合計百名）ト、輜重隊ヨリ編入ノ兵各二十二名ヲ合スルトキハ十五十六年ノ兵各七十二名（合計百四十四名）トナル。之ヲ二中隊ニ平分シテ大隊ヲ編制ス。然ルトキハ各中隊各三十六名（合計七十二名）ノ缺員ヲ生ズ、其補缺ハ十七年ニ於テ東京鎮臺騎兵大隊ニ編入スル新兵ヲ以テ之ヲ補フモノトス。

十七年ニ於テ東京鎮臺輜重中隊ノ一小隊ヲ廢スルヲ以テ當年之ニ編入スベキ新兵ハ之ヲ該臺騎兵大隊ニ編入スベシ。

十七年ニ限リ東京鎮臺騎兵大隊ヨリ新兵七十二名ヲ撰拔シテ近衞ニ編入セシムベシ。

十七年ニ於テ東京鎮臺騎兵大隊ヘ別ニ士官中少尉ノ中二名下士四名ヲ附屬シテ專ラ新兵ノ教育ヲ掌ラシム。

輜重隊ヨリ近衞ニ編入スベキ人員ニ應ズルノ馬匹ハ共ニ近衞ニ移シ、其殘餘ノ分ハ東京鎮臺騎兵大隊ニ移シ、新兵ノ教育用トナス、而シテ此馬匹ハ新兵卒業シ近衞ニ編入スルトキ共ニ近衞ニ移スモノトス。

改正案

近第二號　明治十六年十二月　陸軍省

近衞騎兵一大隊編制表

職		大隊附 人	大隊附 馬	一大隊計 人	一大隊計 馬	一中隊 人	一中隊 馬
士官	上長官						
	少佐	大隊長 一		一			
	大尉	一		一			
	中尉	副官 一		一			
	少尉	一		一			
下士	曹長	一等下副官 一		一			
		二等					
	大尉			二	一	中隊長 一	一
	中尉			五	一	第一小隊長 一	一
	少尉			四	一	第四小隊長 一	一
	曹長			十		五	
	一等下副官			一	一	第二小隊長 一	一
	二等			二	一	第三小隊長 一	一
	曹長			四		五	
	一等下副官			一	一	小隊副長 一	一
	二等			二	一		
	曹長			四		五	

員・士・軍曹・一等	書翰掛 一	一	十	十	半小隊長 四 給養掛 一 半小隊長 四	九
員・士・軍曹・二等			九	九		
員・士・伍長・一等	武器掛 一 喇叭長 一 書記 一 病室掛 一	四	十一	十一	分隊長 四 炊事掛 一 分隊長 四	九
員・士・伍長・二等			十一	十一		
士 計	六	六	十四	十四	十九	十九
兵卒・上等卒			十六	十六	分隊長 八	八
兵卒・騎卒			二百	二百八十四	騎卒 九十六 喇叭卒 四	九十二
兵卒 計			二百十六	二百	百八	百
計	八	八	二百七十二	二百五十六	百三十二	百二十四
非戰員・士官・二等軍吏 三等軍吏	計官 一	一	一	一		
非戰員・士官・一等軍醫	醫官 一	一	一	一		
非戰員・士官・二等軍醫 三等軍醫	副醫官 一	一	一	一		
非戰員・士官・二等馬醫 三等馬醫	馬醫官 一	一	一	一		
士官 計	四	四	四	四		
非戰員・下士・蹄鐵工下長	一	一	一	一		
非戰員・下士・會計書記	一		一			
非戰員・下士・二等看護長	一		一			
非戰員・下士・三等看護長						
非戰員・下士・二等馬醫生 三等馬醫生	一		一			
下士 計	四	一	四	一		
非戰員・卒・蹄鐵工	八	四	八	四		
非戰員・卒・鞍工	二		二			
非戰員・卒・銃工	一		一			
非戰員・卒・縫工	一		一			
非戰員・卒・靴工	一		一			
非戰員・卒・看病卒	二		二			
非戰員・卒・看馬卒	二		二			
卒 計	十七	四	十七	四		
計	二十五	九	二十五	九		
合計	三十三名	十七匹	二百九十七名	二百六十五匹	百三十二名	百二十四匹
備考						

通常經費取調書

一、凡陸軍經費ノ豫算ハ一人一已ヨリ積算スベキモノハ定員ニ基キ、其他ハ平均數ト前年ノ經驗ニ依ル可キト雖ドモ、十五年度以降据置年限中ハ御達ノ定額ニ基キ、豫算調整候義ニ付、右方法ニ依ル能ハズ、强テ之ニ依ラントスレバ數十萬圓超過致候ニ付、不得止各兵隊費幷生徒教育費而已定員ニ照シテ積算シ、隊外俸給宅料馬飼料ノ如キハ十五年度ヨリ十七年度迄ハ十四年十月一日調（十八年度ハ十七年九月一日調）現在人員ニ據リ積算セルガ故ニ、定員ニ滿チタル分ハ皆不足トナリ、其他兵器被服營繕旅費等ノ如キハ前項ヲ引去リタル餘金ヲ以テ實際ノ不足ニモ拘ラズ各科目ニ割賦シタルモノニ付、年々不足ヲ生ズ。此不足タルヤ全ク經理上ヨリ生ズルニアラズ、初メヨリ豫算額ヲ減ジ置キ、不足ハ年度末ニ至リ補塡スルノ見込ヲ以テ調整セルモノナリ。而シテ其補塡ハ兵隊費等定員ヲ以テ積算シタル內、病氣事故等ニテ一時缺員ヲ生ジ、或ハ物價下落ニ際シ殘餘ヲ生ジタル金圓ヲ以テ彼此流用支辨セリ。元來豫算ヨリ定メラレタル定額ニ候ヘバ、缺員或ハ物價下落ヨリ生ズル殘金ハ全ク贏餘ト成ル可キト雖ドモ、前陳ノ如ク一定ノ金額ヲ基トシ、假ニ豫算セルモノニ付、贏餘モ全クノ贏餘ニアラザルナリ。今試ニ定額据置ノ初年卽チ十五年度兵食米豫算代價ヲ十七年度實費ニ比較スルニ、別表イ印ノ通金二十二萬圓餘ノ殘餘ト相成、廳費諸品代價ノ如キハ、十四年度豫算額ヲ十七年度實費ニ對照スルニ、別表ロ印ノ通金七萬六千圓餘ノ超過ト相成候。右物品一個代價ヲ比較スルトキハ別表ハ印ノ通凡一割二分餘ノ下落ナルニ、却テ其實費金超過スル所以ハ、十六年度以降軍備皇張ニ付テハ廳費ノ如キモ間接ニ增費ヲ要スルモノ少カラザルニ依ル。又被服費ノ如キモ十五年度豫算ト十七年度實費ト其一個代價ヲ比較スルニ、別紙ニ印ノ通多少ノ增減アリ。其理由タル別紙備考ニ揭載ノ通ニテ、十四年度ヨリ十七年度迄物價下落ノ割合ニ對シ減額セザルモノハ十四年度該費豫算實費ヲ積算セズ、不足ハ兵隊費等ノ殘餘ヲ以テ補塡スルノ目的ニテ輸入品ヲ除（輸入品ハ時價ニテ積算）クノ外、內國品ハ時價ヨリ幾分下直ノ代價ヲ以テ豫算致置候儀ニ付、十四年度以降該費ノ實費ハ別紙ホ印ノ通豫算額ヨリ年々超過シ、歲尾ニ至リ豫期ノ通兵隊費等ノ殘餘ヨリ流用補塡候儀ニ有之、物價下落ノ爲メ著シク殘餘ヲ生ジタルハ前ニ述ルガ如ク兵食米代ニシテ、該金ハ二十二萬圓餘ニ相成候ヘ共、其內ヲ以テ隊外俸給宅料馬飼料下士卒手當金別表ヘ印ノ通十四年度以降年々夥多ノ不足金ヲ補塡シ其他兵器彈藥營繕赴任旅費等ノ諸費且ツ軍備皇張ノ爲メ、常費ニ於テモ間接ニ增費ヲ要スルモノハ總テ兵食米代ノ殘金幷物價下落ノ爲メ生ジタル殘餘ヲ以テ補辨致候儀ニ有之候。尤十五年度以降兩砲兵工廠興業幷營業費ニ移算ノ金額別紙ト印ノ通ニ之有候處、右ハ全ク其年度殘金ニ屬シタルモノニ

付、向後興業費幷營業費缺額有之候節別途金御下付相成候トキハ該金額ハ平均一ケ年度金十萬九千圓餘ハ贏餘ニ可相成、然ルニ十九年度豫算ハ豫算條規ニ基キ各官廨毎ニ獨立シ彼此流用ヲ禁ゼラレ條ニ付テハ、目今ノ据置額ニ被定候ドモ甚困難スベク、況ンヤ該額ヨリ減殺相成候ヘバ豫算ノ目途難相立候。然レドモ豫算ノ方法歐洲各國ノ例ニ倣ヒ各官廳ヲ併セテ陸軍省ノ定額ニ定メラレ、同科目中ハ各官廳流用シ家屋保存費ノ如キハ据置トナリ、而シテ此上非常ノ節減ヲ加ヘラレ候ヘバ多少減額致候事。

通常經費取調諸表

(イ) 兵食米比較

	豫算石數	豫算金高	豫算平均一石ノ價	實費石數	實費金高	實費平均一石ノ價	實費減少
十五年度	米八萬二千六百九十一石七斗二升六合	金八十萬七千百三十七圓四十四錢三厘	金九圓七十六錢八厘弱	米七萬一千三百二十石八斗二升八合	金六十七萬七千百三十三圓七錢六厘	金九圓四十九錢四厘強	米一萬一千三百七十石八斗九升八合 金十三萬四圓三十六錢七厘
十七年度	米八萬五千五百七十一石一斗四升八合	金六十八萬五千五百二十圓九十六錢四厘	金八圓一錢一厘強	米七萬二千六百九十一石三斗八升一合	金五十一萬七千百七十五圓十三錢六厘	金七圓一錢八厘強	米一萬三千八百七十九石七斗六升七合 金十六萬八千三百四十五圓八十二錢八厘

右兩年度比較ヲ以テ十七年度實費平均一石ノ代價七圓一錢八厘ヲ以テ、定額据置年度ノ初年度十五年度豫算總石數八萬二千六百九十一石七斗二升六合ニ乘ズレバ、此代價金五十八萬三百三十圓五十三錢三厘トナル。夫レヲ十五年度豫算代價金八十萬七千百三十七圓四十四錢三厘ニ比較スルトキハ、金二十二萬六千八百六圓九十一錢ノ差アリ、右ハ据置初年度ヨリ十七年度中兵食米下落ニ付生

ズル處ノ殘餘ナリ。

（ロ）廳費比較

年度	豫算額	實費	實費	◎超過減少
十五年度	金三十萬二千三百六十圓	金二十六萬四百四圓九十三錢六厘	金四萬千九百五十五圓六錢四厘	
十七年度	金二十一萬八千五百十六圓	金三十七萬八千三百七十七圓八錢一厘	◎金五萬九千八百六十一圓八錢一厘	
十五年度豫算額ヨリ十七年度實費ノ多キコト			◎金七萬六千十七圓八錢一厘	

（八）本省幷ニ東京府下各官廨廳中諸品十五年度及十七年度ニテ買辨代價實費比較表

品目	十五年度實費平均單價	十七年度實費平均單價	十七年度實費 ◎減 增
半紙 上	一帖 圓 ○二三	圓 ○二二	圓 ○○一
半紙 下	〃 ○一九	○一八	○○一
卷紙	一卷 ○二三	○一七	○○六
美濃紙	一帖 一一二	一一五	◎ ○○三
仙過紙	一帖 五三○	二八四	二四六
西ノ内紙	〃 一四七	一六○	◎ ○一三
美濃罫紙	〃 一一九	一一五	○○四
半紙罫紙	〃 ○二九	○四二	◎ ○一三
奉書	十枚 一二○	一三三	◎ ○一三
水筆	一本 ○三一	○三一	—
直書筆	〃 ○二二	○二三	◎ ○○一
狀袋 大	〃 一二三	二○八	◎ ○八五
狀袋 小	〃 ○七九	一○二	◎ ○二三
半切	百枚 ○六一	○六八	◎ ○○七
程村紙	一帖 二三九	二六○	◎ ○二一
表紙 大	一枚 ○二五	○二五	—
表紙 小	〃 ○一四	○一五	◎ ○○一
攀水引美濃紙	一帖 一五四	一七五	◎ ○二一
墨	一挺 一一三	一二六	◎ ○一三
朱墨	〃 ○七三	○八四	◎ ○一一
鉛筆	一本 ○二四	○三二	◎ ○○八

毛靴拭	〃	一二〇四	一二八三	◎	〇七九
火箸	一揃	〇三五	〇二九		〇〇六
火鉢	一個	七〇〇	四三〇		二七〇
十能	〃	二二九	二〇三		〇二六
面洗盥	〃	〇八九	一四八	◎	〇五九
土瓶	〃	〇七五	〇六一		〇一四
井戸繩	一尋	〇四四	〇八一	◎	〇三七
釣瓶	一組	七七九	七四二		〇三七
塵掃	一本	〇五八	〇九二	◎	〇三四
塵取	一個	二〇八	一七三		一〇七
棕梠箒	一本	一六六	一六五		〇〇一
雑巾	一枚	〇一九	〇一五		〇〇四
布巾	〃	〇二六	〇二五		〇〇一
硯箱	一個	一〇七	一四二	◎	〇三五
硯石	〃	一四三	一三六		〇〇七
朱硯箱	〃	〇六四	〇七九	◎	〇一五
朱硯箱	〃	〇六七	〇六六		〇〇一

小刀	一本	〇七一	〇七五	◎	〇〇四
錐	〃	〇二六	〇二三		〇〇三
水入	一個	〇一二	〇一四	◎	〇〇二
算盤	一挺	四三九	四五六	◎	〇一七
朱肉池	一個	〇四五	〇三五		〇一〇
朱肉	一匁	〇三五	〇二四		〇一一
文箱	一個	四一五	三一六		〇九九
目籠長持	〃	九一五	七八七		一二八
米揚笊	〃	二三二	二二四		〇〇八
ペン先	十本	〇一九	〇二五	◎	〇〇六
ペン軸	一本	〇五五	〇四五		〇一〇
インキ	一瓶	一一五	一三四	◎	〇一九
生麩	一升	一三七	一三〇		〇〇七
石鹸 上	一個	〇六九	〇四〇		〇二九
石鹸 下	〃	〇八七	〇五三		〇三四
反古紙	一帖	〇一二	〇一二		—
綴針	百本	〇四〇	〇七三	◎	〇三三

晒木綿	一反	四五四	三三九	◎	一一五
草履	一足	〇一五	〇一九	◎	〇〇四
麻絲	一把	一三六	〇八五		〇五一
磨砂	一袋	〇二四	〇二四		—
磨油	一升	五四一	四三一		一一〇
ランプ芯	一本	〇一三	〇〇四		〇〇九
石油	一升	一六〇	一一八		〇四二
西洋蠟燭	一挺	〇三一	〇三七	◎	〇〇六
和蠟燭	〃	〇四六	〇〇八		〇三八
種油	一升	三四二	二一六		一二六
燈芯	一把	〇〇三	〇〇四	◎	〇〇一
早附木	一個	〇〇五	〇〇四		〇〇一
炭	一〆目	〇九五	〇五八		〇三七
薄葉紙	一帖	〇九四	一二〇	◎	〇二六
尺度	一本	〇四五	〇八五	◎	〇四〇
竹篩	〃	〇三四	〇三五	◎	〇〇一
朝鮮篩	〃	一七〇	一四五		〇二五

茶碗	一個	〇三一	〇二九	〇〇二	
汁次	〃	二九八	二六〇	〇三八	
龜甲笊	〃	二〇六	一九七	〇〇九	
煑揚笊	〃	一五〇	一四九	〇〇一	
擔桶	〃	六三五	六八八	〇五三	◎
手桶	〃	二三二	二三二	—	
四斗樽	〃	三六三	三〇一	〇六二	
五合柄杓	〃	〇三三	〇三二	〇〇一	
竹籔	一本	〇一〇	〇〇九	〇〇一	
タハシ	一個	〇三一	〇一三	〇一八	
魚切庖丁	一丁	二一八	二〇六	〇一二	
菜切庖丁	〃	一三二	一一五	〇一七	
砥石	一個	二九一	二二七	〇六四	
荒砥石	〃	一五五	一二二	〇三三	
皿	〃	〇二七	〇一六	〇一一	
薪	一〆目	〇三二	〇二二	〇一〇	
糊入	一個	〇一六	〇一一	〇〇五	

手丸提灯	一張	一八〇	一六七		〇一三
味噌	一貫目	一七八	一三六		〇四二
醤油	一升	一〇三	〇九〇		〇一三
漬物	一〆目	〇九六	〇九一		〇〇五
茶	百目	一一九	〇五〇		〇六九
鹽	一升	〇三五	〇二五		〇一〇
砂糖	百目	〇六〇	〇四一		〇一九
鰹節	一〆目	二〇六〇	一三四七	減 二七七九	七一三
計		一六七八八	一四六九九	増 ◎七〇七	二〇八九
差引					

但十五、十七兩年度購買費比數十五年度ヨリ十七年度買上代下落ハ　凡一割二ト餘

陸軍一般需用之廳中諸品代價下落ノ歩合ハ東京府下及各鎮臺各營所等惣テ十五十七兩年度買上代價ノ實費平均額ヲ以テ比較セザレバ其實ヲ得ザルト雖ドモ、右ハ急速之取調書成兼ルニ付、府下各官廨ニ於テ實際買上代價ヲ以テ比較スルトキハ本表ノ通リ。

被服費中買辨スル品目員數ハ凡ソ二百品アリト雖ドモ、各品毎ノ代價ヲ掲グルトキハ却テ繁雜ニ亙ルニ付、該品中需要ノ多數ナルト代價高直ニシテ豫算中金額多分ナルモノ數品ノ代價ヲ比較スレバ左ニ。

(二)　輸入品

品目	十五年度豫算單價	十七年實費平均單價	豫算ニ比シ 黒ハ減 朱ハ増◎
二號紺絨	三尺 三四〇	二四五一四	六〇六四
三號紺絨	〃 三〇〇	二七一〇	二九〇
四號紺絨	〃 二九〇〇	二〇二五	八七五
五號紺絨	〃 三一六五	二九一五	二五〇
上等生雲齊	一尺 〇四二	〇四四	◎〇〇二
生雲齊	〃 〇三六	〇四〇	◎〇〇四
生天竺	〃 〇三二	〇三二	—
生金巾	〃 〇二六	〇二九	◎〇〇三
厚毛布	一枚 四七五〇	四二二〇	五三〇

内國品

上等紺小倉	一尺	一四四	一四三	〇〇一

幅廣紋羽	〃	〇四五		〇四三	〇〇二
冬襦袢袴下	一組	九六三		七八二	一八一
夏襦袢	一枚	二九四		二九三	〇〇一
同袴下	一足	二三九		二五〇	〇一一
紋羽襦袢袴下	一組	八九三		七三七	一五六
革製手套	一双	四〇〇		一三七	二六三
麻脚絆	一足	三三〇		三〇〇	〇三〇
靴下	〃	〇五〇	◎	〇五二	〇〇二
步兵背嚢	一脊	二七〇〇	◎	二九二一	二二一
各兵科手帖	一册	一二五		一〇九	〇一六
同扣	〃	〇八〇		〇六九	〇一一
騎兵長靴	一足	五二〇〇	◎	五九六五	七六五
砲兵長靴	〃	四〇〇〇	◎	四五二〇	五二〇
工兵靴	〃	一五〇〇	◎	一八七五	三七五
短靴ヨビ袖共	〃	一一八〇	◎	一四六〇	二八〇

本表十五年度豫算單價輸入品ハ前年度時價ニ基キ積算シタルモノニ付、十七年度實費ニ比較スレバ黑書之通減少スト雖ドモ內國品ハ定額金不足ノ爲メ時價ヨリ幾分軟下直ノ代價ヲ以テ豫算アルニ付、十七年度實費ハ却テ朱書之通增費トナレリ。

（ホ）　据置年限中被服費豫算額ト實費差引表

年度	豫算額	實費			
		皇張費ヘ流用	營繕費ヘ流用	實費	超過
十五年度	金百二十二萬六千六十三圓	金百三十七萬七千七百十六圓五十三錢六厘		金十五萬千六百五十三圓五十三錢六厘	◎
十六年度	金百三十六萬九千六百八十六圓	金百八萬三千三百十三圓九錢五厘	金三十二萬圓	金三萬三千六百二十七圓九錢五厘	◎
十七年度	金百七十四萬六千四百三十九圓	金百五十九萬千九百四十二圓六十七錢二厘	金十九萬四千四百六十一圓	金三萬九千九百六十四圓六十七錢二厘	◎

一、本表十六年度ニ於テ金三十二萬圓皇張費ヘ流用セシハ皇張費豫算中末項ニ揭載ノ通、同年度皇張費御下附金豫算額ニ對シ不足スルニ付、一時被服戰時豫備品ノ內ヲ以テ繰替同年度豫算ヲ維持シ、而シテ其金額ヲ皇張費ニ流用不足金ヲ補塡セシモノナリ。

一、同十七年度ニ於テ營繕費ヘ金十九萬四千四百六十一圓流用セシハ近衞步兵編制改正ニ際シ、教導團生活教育上ノ都合ニ依リ該生徒隊ヲ國分臺ニ移轉シ、而シテ同團生徒營ノ跡ニ近衞步兵隊ヲ移轉セシニ依リ、皇張費營繕費ニテ金二十萬圓不足スルニ付、右ノ內十五萬五千圓幷十七年九月十五日暴風ニ付兵營等大破修繕費ヘ金三萬九千四百六十一圓、右ハ何レモ不得止費途ニ付、前年

度ニ於テ被服戰時豫備品ヨリ皇張費ヘ繰替支辨ノ分十七年度ニ於テ戻入タル金三十二萬圓ノ内ヨリ更ニ繰替流用支辨セシモノナリ。

（ヘ）　隊外俸給宅料馬飼料下士卒手當金据置年限中豫算額ト實費差引表

年度	豫算額	實費	實費	◎超過減少
十五年度	八七二、一九七	九九六	八六九、三〇一	一一二八	二、八九六	八六八
十六年度	八八七、二六一	三九二	一、〇二二、七一七	七七一	一三五、四五六	三七九 ◎
十七年度	一、〇二七、四八六	七三六	一、一二〇、四七六	六六三	九二、九八九	九二七 ◎

一日調現在人員ニ據リ積算アルニ由リ異同ナキモノト雖モ、十六十七兩年度ニ於テ豫算若干宛增加アルハ擴張費豫算中ノ後備軍司令部各府縣郡區駐在官及隊外將校以上各鎮臺看護長等增員士官戸山教導團生徒增員ニ付、教員幷臨時修業生召集等ニ依ル俸給等組入タルニ因ル。

但參謀本部、憲兵本部、屯田兵本部等ノ經費ハ据置年限中各個經濟ヲ分任シ、該部ノ俸給宅料等ノ過不足ハ他ヨリ流用補塡セザルニ付本表全員ニ算入セズ。

十五年度實費ノ豫算ヨリ減少スルハ同年度ニ於テ第二第三ノ方面ヲ廢シ第一方面ニ合併シ第五第六ノ方面ヲ廢シ第四方面ニ合併シタルニ因ル。

又十四年十月一日調ノ十五年度豫算額ト本年九月下旬調現在人員ニ據リ積算シタル豫算額ト比較スルトキハ左ノ如シ。

十五年度豫算額	十八年九月下旬調現在人員ニ據ル豫算額	差引十五年度豫算額不足
金八十七萬二千百九十七圓九十九錢六厘	金百二十萬四千四百七十圓六十一錢六厘	◎金三十三萬二千二百七十二圓六十二錢

十五年度ヨリ十七年度迄ニ三ケ年間兩砲兵工廠興業費竝營業費ヘ移算ノ金額

十五年度

一、金一萬七千七百五十五圓二十錢九厘　大阪砲兵工廠反射爐增築費

十六年度

一、金一萬八千九百十六圓三十錢二厘　大阪砲兵工廠反射爐增築費

一、金二萬千四百九十二圓八十二錢八厘　同砲身及車臺製造所建設費

計金四萬四百九圓十三錢

十七年度

一、金一萬八百六十五圓　東京砲兵工廠銃包製造所建設費
一、金五萬四千八百二十圓十二錢七厘　大阪砲兵工廠砲身及車臺製造所建設費
一、金六萬五千百四十圓二十錢　同　製造所建設費
一、金五萬千五百七十一圓八十錢　大阪砲兵工廠製車所建設費
一、金五萬三千三百五十四圓　同　製彈所　同　斷
一、金三萬三千四百三十二圓　同　營業資本增額
計金二十六萬九千百八十三圓十二錢七厘
合計金三十二萬七千三百四十七圓四十六錢八厘
右合計高ヲ据置三ヶ年間ニ割合平均一ヶ年高左ノ如シ
一、金十萬九千百十五圓八十二錢三厘

亞歐日記

第一號　東京發程上海到着

明治二十八年十月五日午後九時五十五分東京新橋停車場ヲ發シ、六日午後六時神戸ニ達シ、七日午前九時佛國郵船オセアニヱン號ニテ該港解纜、八日午後一時三十分長崎投錨、九日午前四時解纜、支那海北風强シト雖ドモ依然速力ヲ減ゼズ、十日午前六時海水泥色ニ變ジテ既ニ揚子江口ニ接近セルヲ知リ、午後一時三十分吳淞砲臺ノ下ニ投錨セリ。オセアニヱン號ハ四千二百五十九噸ニシテ、メツサゼリームリチーム會社ノ東洋線路中第二ノ大船ナルヲ以テ、上海ニ溯ル能ハズ。同會社ノメルブールン號モ亦タ此附近ニ碇泊セリ。オセアニヱン號ハ此處ニ止リ、印度ヲ經テ佛國ニ至ルハ此メルブールン號ナルヲ以テ、會社ノ小汽船ニテ直ニ乘リ替ヘヲ爲シ、解纜ハ十二日午後ナルヲ以テ上海ニ赴キタリ。

同船中佛國ノ新任漢口領事ドートルメール氏アリ、曰ク漢口ニハ佛人指ヲ屈スルニ過ズト雖ドモ、常ニ煩ヒヲ來スハ宣教師ト支那人トノ關係ナリ。實ニ治療シ難キハ支那人ナリ。假令何十年ヲ經過

スルモ今ノ儘ニテハ到底改進ノ目的ナシ。最モ早手廻シハ大國ノ間ニ分割シテ、幾個ノ保護國ヲ組織スルニアルベシト雖ドモ、其間又諸國ニ外交政略ナルモノアリテ一二ノ思フ樣ニ行カザルコソ遺憾ナリ云々ト。一領事ノ私言固ヨリ格別ノ價値ナシト雖ドモ、世ノ風潮之ニ傾クノ有樣ナルハ確然タルヲ以テ特ニ記シテ參考トス。

佛國郵船會社ノ汽船ニシテ有事直接ニ利害ノ關係アルモノ左ノ如シ。

印度及ビ支那線

エルネシユ・シモン	5707
オセアニエン	4259
ヤラア	4255
サラジー	4255
シドネー	4232
カレドニエン	4080
メルブールン	4074
ナタル	4049
サガリエン	3790
オクシユス	2353
ラセイヌ	1480
ガタウエリイ	1852
エリダン	4861 8

交趾支那線

ダミーズ	2421
マンシエ	2395
イハホン	1548
アルチユズ	1246
合計	9448

吳淞砲臺ハ依然舊時ノ觀ヲ存シ、白字ノ紅旗營內ニ飜リ、又滑膛鐵砲ヲ備ヘシ漁船然タル水師ノ船隻外國堅艦ニ竝列スルノ風情ハ明治十七年ニ見シ所ト更ニ異ナル所ナシ。

此長江水師ノ側ラニ投錨セシハ英國軍艦二隻佛國二隻魯國一隻ニシテ、英國軍艦ハ過般示威運動ノ爲メ江寧附近ニ赴キ、目的ヲ達シテ歸來セシモノナリ。聞ク此示威運動ニヨリテ英國政府ハ遂ニ支那政府ヲシテ四川總督ヲ免官シ、且ツ其部下ノ數人ヲ罰セシメタリト。

上海ノ埠頭ニモ亦タ英米獨魯佛ノ軍艦アリ。其下流ニ一隻ノ支那軍艦ヲ泊ス。船上ノ人相見テ嘲笑シテ曰ク、マダ支那ニ軍艦アリト、此事小ナリト雖ドモ世ノ眼中既ニ支那ノ實力ナキハ確乎タル事實トス。埠頭ニ又魯國義勇艦隊ノ一隻哈巴魯布喀(ハロフカ)號ヲ繫グ。此船ハ浦潮斯德ヨリ東部西比利亞ノ總督ヲ載セ、長崎ヲ經テ此地ニ來リシモノニテ、總督ハ明十二日解纜ノ佛國郵便船ニテ新嘉坡ニ向フ由ナリ。魯國大佐ヴォートガツク今上海ニ在リ、安正遇然總督ト同船タルヲ以テ尙ホ後便報告スル所アラン。

此地日本人トノ感情別ニ異ナル所ヲ見ズ。支那ハ實ニ氣樂ノ人民ト謂ハンカ、東洋ノ危機又是ニ因テ數倍ノ走力ヲ加ヘ來ラン。

魯國ハ更ニ戰鬪艦四隻（三萬餘噸）ヲ東洋艦隊ニ加ヘ、獨逸モ亦一二隻ヲ送ラントス。然レドモ浦潮斯德ノ氷結スルハ最早數日ノ內ナルヲ以テ、解氷ノ時期ニ至ルマデハ非常ニ活潑ノ運動ヲ見ルコト無ルベシト雖ドモ、明年ノ三四月頃コソ危機破裂ノ時ト覺悟セザル可ラズ。故ニ本邦ニ於テモ今ヨリ鋭意出來得ルノ準備ヲ爲シ、就中幾隻ニテモ出來得ル限リノ水雷艇ヲ增加シテ海防ノ不足ヲ補ヒ、必死ニ待ツアルノ實力ヲ養成スルコト實ニ冬季間ノ急務ナラン。此準備整頓スルノ度合ニ從ヒ、彼等ガ我ニ加ヘントスル兇暴ノ割合ニ必ズ緩急アリテ從テ我ニ餘裕ヲ與フルニ至ラン。

東部西比利亞總督ノ聖彼得堡ニ赴クハ必ズ明年ノ準備ヲ協議スル爲メナラン。魯京駐劄ノ我公使館武官ハ一日モ早ク御派遣相成、又此武官ヲシテ直ニ緊急ノ任務ヲ取ラシムル爲メ、魯語ニ熟シ且ツ魯國ノ事情ニ明ルキ一二ノ將校ヲ御派遣相成ラバ非常ノ便利ナラン。

臺灣鎭定ノ遲速ハ大ニ彼等ガ我ニ加ヘントスル方針ニ關係スルヲ以テ、無論不日逆賊討滅ノ事タルベシト雖モ、善後軍隊ノ衞生モ亦タ頗ル我ガ志氣ニ關係シ、遂ニ彼等ニ便利ヲ與フルニ至ルモ保シ難キヲ以テ、今ヤ臺灣ノ氣候漸ク善良ニ赴クノ時ニ當テ、一二ノ軍醫ヲ蘭領諸島及非里比納群島中歐兵駐屯ノ地ニ御派遣相成、兵營建築衞生ノ方法等充分ノ研究ヲ爲シ、明年ノ夏季ニ達スル前改良ヲ加フル所アラバ著シキ結果ヲ奏シ、或ハ發明スル所ノ事物尠少ニアラザルベシト愚考仕候。蘭領印度諸島及ビ非里比納群島ハ臺灣ト均シク暖濕ノ地ニシテ、衞生ノ方法其宜シキヲ得ザレバ大ニ健康ヲ害シ、疾病續發ニ苦シム所、又駐戍ノ歐兵ハ和蘭ト云ヒ西班牙ト云ヒ皆ナ溫帶善良ノ地ヨリ來ル者ナレバ、此研究ハ我臺灣ニ駐戍スル軍隊ノ爲メ必ズ益スル所多キヲ確信ス。又衞生法研究ノ爲メ一二軍醫ノ派遣ハ彼ノ和蘭西班牙ニ取決シテ恐怖ヲ起サシムルガ如キコトナカルベシ。

右報告ト併セ意見上申仕候也

明治二十八年十月十一日

上海ニテ

陸軍歩兵大佐　福島安正

參謀總長大勳位　彰仁親王殿下

明十二日午後吳淞口解纜香港ニ向フ筈ナリ。

第二號　從上海至香港

十月十二日午前十時墺匈帝國臨時總領事シーボルト氏ヲ訪問シ、昨夜先約アリシ爲メ懇篤ノ招待ニ應ズルヲ得ザリシヲ謝ス。談次シーボルト氏曰ク、頃日魯國ハ工兵ヲ吉林黑龍江ノ地ニ派遣シテ擅ニ測量ニ從事シ、鐵道建築ノ準備ヲ爲セリ。魯國ノ第一ニ志ス所ハ朝鮮ニアラズシテ滿洲ニアリ。卽チ南進シテ大連灣旅順口ヲ占頭スルニ外ナラズ。故ニ大ニ軍艦ノ精鋭ヲ集メ、尙ホ更ニ數隻ノ堅艦ヲ增加セントスルハ明治二十九年西比利亞解氷ノ時期ニ及デ大ニ爲ス所アラントスルハ日本ニアラズシテ却テ支那ニアラン。又朝鮮ハ實ニ東洋ノ禍源ナレバ、今ノ時ニ於テ列國ノ會議ニ附シテ共ニ其獨立ヲ保護シ、一二ヲシテ其欲ヲ專ラニスルヲ得ザラシムルコソ急務ナラン。今日ナレバ列國モ喜ンデ此會議ヲ開キ、魯國モ亦タ我意ヲ張ルコト能ハザラン。魯國ニシテ若シ尺寸ノ地ト雖ドモ占領スルニ至レバ、最早動カス可ラザルニ至ラン云々ト。是レシーボルト一個ノ私見ニアラズ、一般ニ此說アルモノニ似タリ。

其歸途我領事館ニ至レバ、何ゾ圖ラン朝鮮ニ又々變亂ヲ生ゼシノ電報ヲ聞キタリ。

魯國大佐ヴオーガツク氏佛蘭西ホテルニ滯在スルヲ以テ訪問シ、談話ノ際日本ガ魯國ニ敵意ヲ示シ、半官報タル日々新聞ヲ始メ著名ノ新聞ハ悉ク魯國ヲ敵視セリ。我魯國ハ明春ニ至ラバ何事ヲカ爲サザルヲ得ズト。實ニ無禮ノ一言ト謂フベシ。彼レ暗ニ恃ム所アルニアラザレバ焉ゾ此言ヲ爲スヲ得ン。大佐ハ近日天津ニ赴キ我國會開設ノ際東京ニ赴ク由ナリ。

午後一時三十分佛國郵便汽船會社ノ埠頭ニ至リ、小汽船ニ乘ル。此時東部西比利亞總督モ亦タ夫人及ビ隨行員ヲ從ヘテ乘船セリ。佛國總領事ハ巡査二十餘名ヲ埠頭ニ出シ、捧銃ノ禮ヲ以テ其行ヲ送リ、碇泊中ノ哈巴魯布喀號ニ於テハ水兵皆ナ檣上ニ登リテ奉拜ノ禮ヲ行ヒタリ。小汽船ハ一時間餘ニシテ吳淞口ニ達シ、乘客皆ナメルブルン號ニ移リ、安正ハ大佐ヴオーガツクノ紹介ニヨリテ總督及ビ夫人幷ニ隨行ノ騎兵大佐某ニ面會セリ。總督ノ一行ハ外ニ一名ノ書記官アリ、又在漢口ノ魯國領事モ賜暇歸朝トノ事ニテ同船セリ。佛國郵船會社ハ接待員トシテ特ニ一名ノ社員ヲ乘船セシメ、注意至ラザル所ナシ。故ニ此船ハ丸デ魯西亞船ニ均シク、不愉快少ナカラザリシト雖ドモ多少ノ利益アラント樂ミタリ。

汽船ハ四時三十分ヲ以テ吳淞口ヲ解纜シ、翌十三日ノ正午マデニ二百六十六海里ヲ走リ、十四日ノ正午マデニ又三百十七海里ヲ走リ、十五日未明既ニ香港ニ投錨セリ。上海ヲ距ル通計八百二十四

海里、海上平穩ニシテ著名ノ難所タル臺灣海峽モ快談ノ間ニ經過シ、十四日ノ午後ニハ數十隻ノ支那船臺島南部ノ方向ニ駛走スルヲ目擊セリ。又香港ニ投錨スルヤ解纜ハ十六日正午ナルヲ以テ、先ヅ上陸シテ中川領事ヲ訪問シ、香港ホテルニ投宿シテ此報告ヲ認メタリ。

前陳セシ如クニシテ天氣頗ル清朗ナリシヲ以テ、彼是種々ノ談話ヲ爲シタリ。左ニ其要ヲ擧ン。

一、婦人　日本ハ血ヲ以テ支那ニ勝チ、將ニ其結果ヲ納メントスルニ當リ、彼ノ魯國ナル者ハ何者ゾ、天下ノ人皆ナ日本ニ同情ヲ表スルニモ關セズ、擅ニ其事ニ關渉シテ日本ノ戰勝ヲ妨害シ、已レ其間ニ乘ジテ先ヅ强奪ヲ試ミントス。魯國ハ巨大ノ面積ヲ支配シ、內人民ニ幸福ヲ與ヘズ、統御其道ヲ得ザルヲモ顧ミズ、外益々禽獸ノ慾ヲ逞フシ、徒ラニ人ノ國ヲ奪ヒ、人ノ權利ヲ殺ギ、而シテ他日自ラ割裂四分スルヲ知ラズ。嗚呼焉ゾ他日天ノ罰スル所タラザルヲ得ン。波蘭ノ如キ實ニ切齒扼腕ニ堪ヘザルナリ。今ノ東京駐紮魯國公使ヒトロヴオナル者ハ妾ガ相識ノ人ナレドモ、其外交ノ政略ヲ取ルヤ、實ニ殘忍酷薄ニシテ、忍ブ可ラザルヲ忍ビ、爲ス可ラザルヲ爲シ、其卑劣ナルコト言語ニ絕タリ。彼レガ布典牙利ニアルヤ、其殘惡實ニ人ノ爲ス可ラザルヲ爲シタリ。聞ク所ニヨレバ今多數ノ間諜ヲ放チ、日本沿岸ノ弱點ヲ探偵シツヽアリト、宜シク注意セラルベシ。云々ト。意氣激昂滿面血ヲ注テ痛言セリ。此婦人ハ波蘭貴族ノ流レドコンスキー氏ノ夫人ナリキ。

一、宣教師　又朝鮮ニ事アリシ由ナリ。聞ク所ニヨレバ强國聯合會議ヲ開テ、將來ノ爲メ此難國ヲ處分スト、又前ノ魯國朝鮮公使ウエーバー氏ノ墨西哥ニ轉任セシハ左遷ニシテ、事ヲ取ル軟弱ナルガ爲メニシテ、其後任者トシテ京城ニ赴キタル人ハ嘗テ書記官トシテ東京ノ魯國公使館ニ在リシ者ニテ强豪ノ人物ナリ。魯國ハ今ヤ此ノ如キ人物ヲ集メテ東洋ニ一劇ヲ試ントス。魯國ニシテ若シ朝鮮ノ一隅ヲ占領セバ、英國ハ如何ナル手段ヲ取ルベキヤ、注意ヲ要スル所ナリ。

兩江總督張之洞ハ病ト稱シテ英國東洋艦隊司令長官ヨリ申込タル面會ヲ謝絕シ、僅ニ一日ヲ隔テ欣然獨國總領事ト接見シ、以テ暗ニ英國東洋艦隊司令長官ヲ辱シメタリ。傳フル所ニヨレバ張之洞ハ他ニ轉任シテ李鴻章コソ其後任ナラント。

佛國議會ハ其開會ノ始メニ於テ英兵埃及撤去ノ事ヲ論議スベシ。英國此地ヲ占領スル爲メ陰ニ內亂ヲ煽動シ、其鎭壓ヲ名義トシテ此要衝ヲ駐戍スルニ至リタルヲ以テ、假令佛國ヨリ申込ヲ爲スモ兵力ヲ用フルニ非レバ容易ニ撤去セザルベシ。

亞爾米尼亞（アルメニア）事件モ埃及ノ二ノ舞ニシテ、實ハ英國ガ其主謀者タリ。名義ヲ設ケテ此地ヲ占領セントスルニ外ナラズ。此度其目的ヲ達スルヲ得ザリシ尙ホ魯國ヲ憚リテ然ルナリ。此問題ハ他日屢ゝ起ルコトアルベシ。

佛蘭西ハ原來義俠ヲ以テ名アリシガ、輓近ニ至リ其美風全ク消滅シテ單ニ利己一點ノ國柄ト成リ

果タルコソ遺憾ニ堪ヘザルナリ云〻。

此宣教師ハバレート謂ヒ、日本ニ在ルコト五年、能ク日本語ヲ話スノミナラズ、亦タ能ク書ヲ讀ミ軍事政略外交等ニ注意スルコト驚クベキ程ナリ。

一、英國士官　支那ハ名醫ト雖ドモ到底治療ノ術ナシ。遂ニ强國ノ間ニ分割シテ幾多ノ保護國ヲ組織スルノ止ムヲ得ザルニ至ラン。又東洋ノ危機漸ク切迫スルヲ以テ不日一大破裂ヲ見ルニ至ラント。

東部西比利亞總督　種々雜談ノ餘左ノ如キ問答ヲ爲シタリ。

貴官ノ旅行ハ政府ノ命令ニヨルカ○然リ○參謀本部ノ派遣スル所ナルカ○然リ○報告ハ參謀本部長ニ向テスルカ○勿論ナリ○高喀索ヨリ中央亞細亞ノ旅行ハ何ノ爲メナルカ○地理兵勢ヲ研究スル爲メナリ○先年ノ單騎旅行ハ誰レノ注意スル所ヨリ出シカ○人ノ注意トハ驚キ入リタリ、勿論自分ノ計畫ナリ○何ノ目的ヲ以テ騎馬ノ旅行ヲ爲セシカ○抑モ汽車汽船ノ旅行ハ一瞬數里ニシテ研究ニ便ナラズ、騎馬旅行ト決定セシハ勉メテ細密ニ詳細ニ萬般ノ事物ヲ研究スルガ爲メナリ○此ニ至テ總督又問ヲ起サズ、高喀索ノ總督ハ余ノ知己ナルヲ以テ添書ヲ與フベシ抑種々ノ色ヲ加ヘタリ○安正問フテ曰ク、閣下ハ朝鮮ニ寄港セシヤ○余ノ乘リタル義勇艦隊ノ汽船哈巴魯布喀號機關ニ故障ヲ生ジタル爲メ、艦長ノ請願ヲ許シテ釜山ニ寄港セシモ、全ク修理ノ爲メニシテ一兵ヲモ上陸スルコトヲ許サヾリシ○閣下ハ此郵船ニテ直ニ魯國ニ赴クカ○否ナ新嘉波ニ上陸シ便船ヲ待テ哇瓦ニ行ク筈ナリ○哇瓦ハ炎熱甚シク頗ル健康ニ宜シカラズト聞ク自愛セラレヨ○余ハ妻ト同行セリ、兎角婦人ハ退屈ジ易ク、長キ船旅ヲ好マズ、故ニ新嘉波ニ上陸シ一寸哇瓦ニ遊歩ヲ試ルニ過ズ云々ト。

日本政府ニ於テハ支那內地到ル處ニ變形ノ將校ヲ派遣セリ（戰爭中支那內地ノ地圖談ヲ聞テ驚訝セシモノナラン）此頃又頻リニ東西比利亞ニ變形ノ將校ヲ派遣スルハ何事ゾ、魯國ハ日本ト好隣ノ國ナリ、巡覽セントスル場所ハ一トシテ許可セザルコトナシ。何ゾ變形ヲ要セン。過日モ疑ハシキ者一人アリ、人ヲシテ問ハシメバ答テ曰ク寫眞師ナリト、依テ竊ニ警察官ニ命ジテ探偵セシムレバ果シテ士官タルコトヲ確知セリト。安正決シテ其事ナキヲ陳レドモ堅ク信ジテ疑ハズ。商人中ニモ人夫中ニモ多數ノ將校アルヲ確信スルコソ笑止ノ至リナリ。

又曰ク、過日東京地學協會ノ雜誌ニ、北京ヨリ更ニ一條ノ鐵路ヲ建築シテ山西陝西甘肅新疆ヲ貫テ噶什喀爾ヲ出デ、遂ニ中央亞細亞ニ達スルヲ得ルヲ得策ナリト論ジタリ。今ヤ數年ヲ出ズシテ西比利亞ノ鐵道ハ竣工セン。此鐵道ニシテ竣工セバ實ニ日本ノ利益ナリ。歐洲ニ輸出スルノ物產ハ悉ク此線路ヲ通過スルニ至ルベシ。日數短少ニシテ運賃輕減シ、非常ニ通商貿易ノ發達ヲ見ルニ至ルベシ。日本ハ何ヲ苦ンデ更ニ他ノ一線ヲ設ケントスルヤト、是レ固ト一學會ノ所見ニシテ

各國共ニ見ル所ナリ、敢テ關スル所ニアラズト答ヘタリ。

此一二ノ問答ニ於テ總督ノ人トナリヲ知ルニ足ラン。聞ク所ニ據レバ魯國ニ召還セラレテ後任者ハ來春到着スルニ至ラント。

近來我新聞雜誌ニ注目スルハ實ニ非常ニシテ、殊ニ日々新聞ハ半官報ナリトシ、所載スル事項ハ都テ政府ノ意向ナリト確信セリ。本日香港日報ヲ見ルニ、東京日々新聞ハ英魯ノ内日本ノ同盟ヲ得ル者能ク勝ヲ東洋ニ制スベシ。若シ日魯同盟セバ印度ハ既ニ英ノ有ニ非ルナリト極論セリ。英ハ始メヨリ日本ニ好意ヲ表シ、遼東及ビ臺灣ノ占領一トシテ異議ヲ唱ヘタルコトナシ。然ルニ日々新聞卽チ半官報ニシテ敢テ此言ヲ爲ス、日本ハ多少威力アル五六隻ノ巡洋艦ト臺灣ヲ鎭壓スルニ非常ノ困難ヲ極メシ位ノ陸軍アルノミ。英魯其一假令日本ノ同盟ヲ得ルモ固ヨリ痛痒相關セズ。若シ必要ニ應ジテ英魯同盟スルコトアラバ、日本ハ膝ヲ屈シテ其處置ヲ待ツノミナラント。日本新聞雜誌ノ志操ナキヲ罵詈セリ。是レ固ト一新聞ノ論說ニ過ギズト雖ドモ、新聞ノ品位ハ日本ニ於ルヨリモ高ク、其信用モ亦タ從テ厚キヲ以テ、參考ノ爲メ此ニ其大要ヲ擧タリ。

抑モ筆法ハ精神ヨリ發スルモノ、殊ニ我帝國人民ノ如ク愛國心ニ富ム者今日ノ形勢ニ處シテ極論セザルヲ得ズト雖モ、今日ハ實ニ堅忍スルノ時ナリ。薪ニ臥スト大言シテ薪ニ臥シ、仇ヲ報ズト放言シテ仇ヲ報ヒ、能ク其目的ヲ達セシ者ナシ。徒ニ敵ヲシテ警戒セシメ準備ヲ急ナラシメ、時期ヲ迫ラシメ、惡意ヲ增張セシメ、味方ヲ減ゼシメ、敵勢ヲ熾ニナラシメ、一トシテ我ニ利スル所ナシ。我帝國ノ人民ハ他國ノ如キ人民ニアラズ。假令新聞紙ヲ以テ喋々激勵セザルモ一朝事アリ、詔勅一タビ下レバ四千餘萬皆ナ一身同體トナリテ如何ナル强敵ト雖ドモ決シテ屈セザルハ何人モ保證信認スル所ナリ。今日ノ場合口ヲ後ニシ實ヲ擧ルコト最モ急務ナラン。セメテ半官報ノ信用深キ新聞ノミニテモ何卒十分ノ注意ト取締リアランコト切望ノ至リニ堪ヘズ。

右及御報告候也

明治二十八年十月十五日

香港ニ於テ

陸軍歩兵大佐　福島安正

參謀總長大勳位　彰仁親王殿下

第三號　從香港至柴昆

十月十六日午前十一時中川領事ヨリ日章旗ヲ樹タル小汽船ニ來リ迎ルニ會ヒ、直ニ乘船シ「メルブルン」號ハ正午拔錨柴昆ニ向ヘリ。

香港繫泊中東部西比利亞總督ハ香港ホテルニ在リ、別ニ香港知事トノ往復モナク、乘船ノ際ハ他ノ旅客ト共ニホテルノ小汽船ニテ送ラレタリ。

既ニシテ船ハ香港ノ南門ヲ出ヅ、嶋端ノ一角ニ一堡壘アリテ砲二三門ヲ備ルヲ見ルノミ。別ニ防禦ノ計畫ナシ。聞ク對岸九龍地方英ノ所領ニ歸スルモノ其幅僅ニ二哩ニ過ギズ、敵此方面ヨリ來襲スル時ハ頗ル危險ナルヲ以テ、英國ハ清國ニ迫テ更ニ幅員ヲ增加セント欲シ其機會ヲ待ツ者ノ如シト。

又香港ニ一ノ至難ナルハ飲水ノ不足ナリ、山上二個ノ貯水池ヲ設クト雖ドモ二十餘萬ニ給スルニ足ラズ、明年一二月ニ至ラバ大ニ不足ヲ感ズベキ恐レアルヲ以テ、今ヨリ水量ヲ制限セリ。此ノ如キヲ以テ下水通ゼズ、地中溝渠ノ不潔想像スベシ。近年惡疫頻リニ流行スルハ實ニ之ガ爲ナラント。

中川領事ニ聞ク、香港ノ石炭ハ概ネ日本炭ニシテ三井ノ一手ニテモ毎月汽船六七隻ヲ輸入シ、來往ノ汽船皆ナ供給ヲ之ニ取ルヲ以テ、萬一我石炭ノ輸入中止スルニ至ラバ少クモ一噸ニ付四圓ノ高價ヲ見ルニ至ルベク、各國ノ汽船ハ之ガ爲メ頗ル困難スベシト、其他東京及ビ波羅島產出ノ石炭アリト雖ドモ、東京炭ハ粉炭ニシテ用ユルニ足ラズ、僅ニ廣東商人ニ少許ノ需用アルノミ。又波羅炭ハ產出僅少ニシテ廣ク船舶ノ供給ヲ爲スニ足ラズ。過般魯國艦隊ノ香港ヲ通過スルヤ、出來得ル限リ多量ノ石炭ヲ搭載シ、最小ノ軍艦ト雖ドモ尙ホ甲板上ニテ滿積セリト。是レ平時ト雖ドモ魯國軍艦ニ石炭ヲ得ルノ困難ナル一證ニシテ、又我石炭ノ大ニ利害ニ關スルヲ見ルニ足ラン。

若シ我石炭ノ輸出中止スル時ハ、朝鮮沿岸及ビ牛莊天津芝罘上海香港等ノ地一時非常ノ困難ヲ見ルニ至ルベシ。而シテ我石炭ノ中止ヲ補ハン爲メ他ヨリ輸送シ來ルモノト假定セン、然ラバ則チ其產出場ハ何地ニシテ產出ノ高幾何ナルヤヲ研究セザル可ラズ。若シ其產地墺洲、波羅島等ノ如キ英領ノ外ニ出ズトセバ、假令英ガ我ニ同盟セザルマデモ嚴正中立ヲ爲サバ我ニ益スル所ハ實ニ巨大ナルベシ。此ノ如ク我石炭ヲ得ルニ道ナク、又英炭ヲ得ルコト能ハズ、魯國ノ恃ム所ハ單ニ薩加連極北ノ石炭ニ過ズトセバ、彼レ假令幾何ノ軍艦ヲ集メテ如何ニ虛勢ヲ張ルト雖ドモ決シテ恐ルヽニ足ラザルナリ。又密ニ我屈强ノ巡洋艦ヲシテ不意ニ薩加連ノ極北ヲ襲擊シ、其貯蓄場ヲ燒盡セシメバ頗ル愉快ノ成果ヲ見ルニ至ラン。

兎ニ角我領事ノ各地ニ在ル者ハ或ハ他ノ手段ヲ盡シテ東洋石炭ノ命脈ヲ調査スルコト又目下急務ノ一ト愚考仕候。甲板ノ長椅子ニ凭リテ彼是ト夢想ヲ畫キツヽアル內、汽船ハ益々南進シテ群嶋ノ南端將ニ盡ントス。左舷ニ巨岩上ノ燈臺ヲ望ム、時ニ午後二時四十分ナリ。

香港ヨリノ乘客中米國ノ男女七八人アリ、米國ハ未ダ腕力爭奪ノ渦中ニ卷キ込レザルヲ以テ世上ノ事物ハ單簡ニシテ其問ヤ又頗ル無邪氣ナリ。曰ク支那皇帝ノ妻君ハ豪傑ナリ、日本ハ償金ノ外ニ朝鮮ト臺灣トヲ取リタルガ、支那ハ償金ヲ拂フ事能ハザルベシ。支那政府ガ重稅ヲ課スルニ至ラバ人民ハ非常ニ難儀ナラン。

日本ハ米國ニ四隻ノ軍艦ヲ注文セシト聞ク、支那ニテ若シ償金ヲ拂ハザル時ハ軍艦ノ代價ハ如何爲スヤ、日本ノ陸軍ハ幾萬アルヤ云々、日本ノ議會ヲ通過シテ定メタル陸海軍費アリ、陸軍ハ戰時直ニ二十五萬ヲ擧グベシ。尙ホ精强ノ國民軍ハ五十餘萬ニ達スベシ。瑣々タル二三億ノ償金ノ如キハ齒牙ニ掛ルニ足ラズト謂フヲ聞キテ皆ナ目ヲ丸クセリ。

下等乘客中又三人ノ日本婦人アリ、香港ヨリ蘭領印度或ハ澳洲ニ向テ南進スルノ途ナリ、單衣輕裝腰邊一條ノ細帶アルノミ。平氣ニ甲板ヲ來往シテ眼中人ナキガ如ク、其起居動作本邦ニ於テモ未ダ嘗テ見ザル所ナリ。

十月十七日正午マデニ三百十海里ヲ走リ、十八日ノ同時マデニ又三百三十九海里ヲ走リ、此日午前十時三十分、始メテ右舷ニ安南ノ陸地ヲ望ム。此朝虹アリ人アリ曰ク、夕虹ハ水夫ノ喜ビナレドモ朝虹ハ水夫ノ憂ヒナリト。稍ヤ北風アリ、二會ノ急雨ニ逢ヒタレドモ幸ヒ平穩ニシテ右舷常ニ安南ノ山色ヲ望ミ、此夜三時頃汽船ハ既ニ河口ノ燈臺下ニ投錨シテ明朝ノ滿潮ヲ待チタリ。安南ノ沿岸一隻ノ帆影ヲ見ズ風色實ニ慘憺ニ堪ヘザルナリ。

此夜酷熱ニシテ艙內ニ安眠スルコト能ハズ。四時ノ鈴聲ヲ聞クマデ甲板上ニ假睡セリ。

同十九日朝階段上ニ最近ノ電報ヲ揭ゲタリ、曰ク

一、佛ノ陸軍遂ニ馬達噶斯喀爾（マダカスカル）ノ王城安達那々利（アンタナナリヴ）威ヲ攻略セリ。

一、馬嶋ハ全ク佛ノ保護國トナリタリ。

一、魯帝ハ電報ヲ發シテ其成功ヲ賀シタリ。

一、佛國ハ更ニ數多ノ領事館ヲ新設セントス。

一、佛國ハ馬嶋戰役ノ從軍章ヲ制定セントス。

一、支那ノ南部亂レントス。

一、朝鮮ノ王妃ハ暗殺セラレタリ。

八時四十五分拔錨河ヲ溯ルコト四十海里ニシテ午後一時三十分柴昆ノ埠頭ニ繫泊セリ。此間ハ流沙ニ因テ成リタル一面ノ平原ニシテ、大約二十海里以下ハ樹木欝生シテ水濱處々ニ漁夫ノ外更ニ人影ヲ見ズト雖ドモ、夫ヨリ以上ハ廣大ナル米田ニシテ、村落處々ニ散在セリ。家屋ハ皆ナ芭蕉葉ノ如キモノヲ以テ作リ、僅ニ雨露ヲ凌グニ足ルノミ。頗ル貧賤ノ有樣ナリ。人民ハ裸體或ハ不潔ノ單衣ヲ纏ヒ、其日ノ勞働僅ニ其日ノ生命ヲ繫グニ過ギズ。稍ヤ利益アル事業ハ皆ナ支那人ノ掌握スル所トナリ、其狀實ニ憫然ニ堪ヘザルナリ。

船ヲ橫ニ埠頭ニ繫グヤ、交趾支那總督ハ傳令使ヲ西比利亞總督ニ派シテ其安着ヲ賀シ、西比利亞總督ハ一行ヲ從ヘ直ニ上陸シテ旅館ニ赴キタリ。埠頭ハ三色旗大小幾百旒ヲ飜シテ盛ニ裝飾セリ。聞ク交趾支那總督此佛船ニ乘リ込ミ歸國スルヲ送ル爲メナリト。

又埠頭ニ二人ノ日本婦人意氣揚々トシテ徘徊スルヲ見タリ。

河中ニハ佛國軍艦二隻及ビ汽船七隻ヲ投錨セリ、其二隻ハ英船ニシテ他ハ皆ナ佛船トス。

柴昆ヨリ內地ニ通ズル小距離ノ鐵道アリ、明治十九年此地ヲ經過セシ時ト別ニ異ナル所ナシ。

政府ハ保護ヲ與ヘテ六十萬圓ヲ以テ一大劇場ヲ建築ス、殖民地ヲ經營スル英佛異ナル所ハ啻ニ此一點ノミニアラザルナリ。

汽船ハ本日午後二時解纜新嘉波ニ向フベキ筈ナリ。

右及御報告候也

明治二十八年十月二十日

柴昆ニ於テ

陸軍歩兵大佐　福島安正

參謀總長大勳位　彰仁親王殿下

第四號　從柴昆至新嘉坡

十月二十日午後一時三十分交趾支那總督ハ文武官七八名ヲ從テ「メルブルン」號ニ乘船セリ。聞ク本年ノ佛國議會ニ出席スル爲メナリト。文官武官紳商等送テ甲板上ニ來ル者百餘名、然レドモ軍隊ノ整列ナク又軍艦ヨリノ禮砲ナシ。蓋シ東部西比利亞總督ニ遠慮セシ故ナラン。東部西比利亞總督ハ昨秋交趾支那總督ト劇場ニ至リタリ。兩國交際上ノ義理トハ謂ヘ、只サヘ流汗禁ジ難キ炎熱ノ時節ニ於テ、演劇見物トハ定メテ非常ニ困難ナリシコト、察セラル。

午後二時汽船解纜シテ河ヲ下ル四時間、卽チ午後六時河口ノ燈臺下ニ出デタリ。時ニ東風强ク船舶動搖スト雖ドモ柴昆ノ苦熱ヲ洗ヒ去リテ大ニ爽快ヲ覺ヘタリ。

柴昆河口ハ依然舊時ノ觀ヲ存シ、更ニ防禦ノ設計ヲ見ズ。佛人ハ原來安逸ヲ好ミ、困難ナル殖民畫策ノ如キハ其長所ニアラズ。安南東蒲寨ノ如キ幸ヒ無智惰弱ノ人民ナルヲ以テ、辛フジテ其主權ヲ維時スルノミ。故ニ假令支那ノ積弱ニ乘ジ、且ツ魯西亞ノ勢力ヲ借テ南方ノ一部ヲ占領スルヲ得ルモ、雲貴兩廣ノ志士一タビ憤慨シテ其精鋭ヲ訓練シ、境ヲ越テ南下スルコトアラバ、交趾支那ノ劇場大ニ見ルベキモノアラン。

午後六時ノ鈴聲ニ從テ人皆ナ食卓ニ就ク、食卓ハ二行ニシテ其右方ヲ魯佛同盟卓トシ、其左方ヲ諸國雜種卓トス。同盟卓ハ船長ヲ主人トシ、其右ニ東部西比利亞總督ノ夫人ヲ置キ、左ニ總督ヲ置キ、夫人ノ右ニ交趾支那總督ヲ置キ、次ニ漢口領事ニ至ルマデ總テノ魯人ヲ置キ、次ニ交趾支那總督ノ隨行員ヲ坐セシメ、追從至ラザル所ナシ。食卓ニ就ントスルノ前、東部西比利亞總督ノ婦人ハ

其席船長ト交趾支那總督トノ中間ナルヲ一見シ、魯國大佐ノ夫人ニ耳語シ、右手ヲ胸ニ當テ天ヲ仰デ大息セリ。夫人ノ腦中外交ナク、只ダ究屈ナルニ當惑セシモノ、如シ。其無邪氣ナルコト愛スベシ。

雜種卓ハ機關長ヲ主人トシ、其左右ニ米國ノ婦人ヲ置キ、次ヲ安正ノ席トシ、次ニ英米獨佛（同盟卓ニ列スルノ價ナキ者）ノ男女十七八名ヲ坐セシメタリ。其内香港ヨリ乘船セシ英ノ一紳士（其弟ハ緬甸鎮守英軍ノ將校ナリト）ヲ最末席一小童ノ側ラニ坐ラシメタリ。然ルニ此紳士ハ平然トシテ眼中人ナク、過飲大食常ニ食卓ノ後殿（シンガリ）ヲ爲シタリ。

船益々南進スルニ從ヒ海面愈々平穩ニシテ、恰モ我内海ヲ航行スルガ如ク、氣候却テ冷涼ニシテ二十一日ハ終日一物ヲ見ズト雖ドモ、二會急雨アリテ大ニ爽快ヲ覺ヘ、半月馬來半島ニ沒スルヲ見テ寢ニ就キ、二十二日早起シテ甲板ニ上レバ右舷遙ニ孤峯連山ノ波ヲ破テ突出スルヲ望ミ、午後一時新嘉坡ニ投錨セリ。柴昆ヲ去ルコト六百四十五海里トス。

東部西比利亞總督ノ一行ハ此地ニ上陸セリ。聞ク蘭領ノ哇瓦島ニ游ビ、次便ノ佛船ニ塔シテ馬爾塞（マルセユ）ニ赴ク筈ナリ。此炎熱ノ時ニ於テ哇瓦ニ赴クハ何事ゾ、港灣ノ概況人心ノ意向石炭ノ模樣等ヲ研究スル爲メナラン。然レドモ蘭領哇瓦ノ如キハ已明ノ地殊ニ强國ノ壓力ニ堪ザルノ國ナリ。何ゾ總督ノ親游ヲ要セン、思フニ方今ノ時事ニ際シ、少シク景氣ヲ示サンガ爲メナランカ、前ニ總督ハ謂ラク錫蘭島ニモ一游セント、而シテ今日ハ曰ク行カズト、英領ニ二週間ノ滯在ハ頗ル不愉快ナラン、行カズトハ實ニ尤ノ至リナリ。

右及御報告候也

明治二十八年十月二十二日

新嘉坡ニ於テ

陸軍歩兵大佐　福島安正

參謀總長大勳位　彰仁親王殿下

埃及ハ時節稍ヤ早クシテ目的上ノ調査ニ不便アルノ恐アルヲ以テ、始メニ君士丹丁堡ニ赴キ、土耳其目下ノ難事ヲ研究シ、夫ヨリ埃及ニ赴クベキ筈、御諒承奉願候

第五號　從新嘉坡至哥倫坡

十月二十二日午後一時汽船進デ新嘉坡沖ニ停止スルヤ、檢疫醫來テ下等ニ乘リ込ミタル支那人ヲ檢査ス、幸ヒニ無事ナリ。船ハ直ニ進デ會社ノ埠頭ニ繫泊セリ。歐洲ヨリ來リシ同船ノ汽船ヤラ號既ニ在リ、藤田領事來ル、曰ク維也納在勤ノ大山書記官妻子ト共ニヤラ號ニテ今朝八時着港、今三

井物産會社支店ニアリト。依テ同支店ニ赴キ同氏ニ面會シ、亞歐日記第三及ビ第四號ヲ封入セシ公信二通ヲ依托シ、同氏一行ト共ニ領事館ニ赴キ叮嚀ナル日本料理ノ饗應ヲ受ク。

領事館ハ埠頭ヨリ稍ヤ高燥ノ地ニシテ、二層樓ノ建築ナリ。周圍ニ庭園アリ熱帶ノ樹木ヲ植ユ、聞ク此頃約成リ移轉セリト、我帝國領事館トシテ辱カシカラズ、只ダ領事ノ財政限リアルヲ以テ、內部ノ裝飾寂寥タルハ誠ニ氣ノ毒ノ至リナリ。

新嘉坡在留ノ日本人大約四百人ノ內、三井物產會社員ヲ除クノ外ハ總テ淫賣ヲ業トスル者ナリ。領事ノ日夜多忙ナルハ皆ナ之ガ爲メナリト。安正船中ニ於テ彼種ノ賤婦ヲ目擊スルニ、汚衣細帶甲板ヲ徘徊シ、或ハ長椅子ニ橫臥シ、或ハ欄干ニ倚リ、白人ヲ見レバ其貴賤ノ何タルヲ辨ゼズ、且ツ愚弄サルルヲモ知ラズ、或ハ之ヲ意トセズ、目ヲ長フシテ其愛ヲ買ハントスルノ醜態實ニ名狀ス可ラズ。此辱ナキノ徒ヲ以テ充滿ス。領事ノ苦心察スルニ餘リアリ。

三井物產會社ハ則チ石炭ノ商賣ニシテ、每月平均新嘉坡石炭ノ需用五萬噸許ノ內二萬五千餘噸ハ同會社ノ石炭ニシテ、先ヅ十ノ六ヲ占ムルト云フ。其他ハ澳洲炭婆羅島炭ナレドモ、常ニ物產會社ニ壓倒セラルルノ有樣ナリ。過般魯國ノ軍艦此地ヲ過ルヤ、魯國領事ハ我藤田領事ニ面會シテ長崎ニ於テ石炭ヲ買ヒ得ラルルヤ否ヲ質問シ、大ニ氣遣ヒタリト、彼レガ石炭ニ困難スルノ狀見ルベシ。

東部西比利亞總督ハ一行ト共ニ哇瓦ニ赴クガ爲メニ上陸セリ。魯佛領事燕尾服ニテ來リ迎ヘ、新嘉坡知事モ亦タ副官ヲ遣ハシテ兩總督ノ安着ヲ賀シタリト。

哇瓦島邊ニ魯國軍艦三隻アリト、何地ヲ繫泊場ト爲シ何地ニ石炭ヲ貯積スルヤ常ニ充分ノ調查ヲ要スルコト必要ナリ。

我戰勝ノ結果日本ノ名聲天下ニ發揚スルト同時ニ、東方危機ノ焦點ニ立ツノ時運ニ至リタル以上ハ、天下ノ大勢諸國ノ實力ヲ詳悉スル更ニ幾層ノ急務トナリタリ。彼レ世ノ形勢ニ明ラカニシテ我レ之ニ暗キハ、彼レ運動ヲ自由ニシ、我レ遲疑逡巡進退時機ヲ失スルノ恐レナシトセズ。故ニ今日假令通過商上ノ必要ナキモ、前件ノ急務アルヲ以テ、東方亞細亞ノ地方ニ於テハ少クモ馬尼利（マニラ）、磐谷（バンコク）、巴達威亞（バタヴィヤ）ニ領事或ハ副領事ヲ置キ、又便宜ノ方法ヲ設ケテ軍人ヲ分置スルコト實ニ緊急ナラン。

先年ヨリ着手セシ新嘉坡ノ防禦工事ハ竣工セリト、只ダ東方開濶ニシテ頗ル脆弱ナリ。

港內繫泊ノ汽船四十二隻アリ、實ニ東亞南門ノ重地トス。

東部西比利亞總督ハ添書ヲ與ル抔賴ミモセヌ世辭ヲ重ネタリシガ、知ラザル爲ネシテ其儘上陸セリ。魯國ノ官民言ヲ左右シ約ヲ履行セザルハ通常ノ事ニシテ又怪シムニ足ラズ。

同二十三日午前五時解纜哥偏坡ニ向フ屢々急雨アリ、頗ル冷凉ヲ覺ユ。

此朝三要件ヲ知ル、曰ク我軍臺灣ニ一萬ノ賊兵ヲ粉碎シテ臺南ヲ占領シ、賊將永福山中ニ逃走セ

リ。曰ク三國合同シテ遼東ノ撤兵ヲ迫レリ。曰ク魯ノ總理大臣獨帝ニ謁見ノ際、魯清ノ安寧ヲ維持スル爲メ日本ノ勢力ヲシテ朝鮮ニ擅ニセシメザルヲ要スト陳ベタリ。

聞ク魯國公使ヒトロヴオ氏ハ忍ブ可カラザルヲ忍ビ、爲ス可ラザルヲ爲スノ人物ナリト。彼レ如何ナル卑劣手段ヲ以テ或ハ我無志操ノ暴漢等ヲ使用シ、如何ナル事ヲ爲スヤヲ豫知シ難シ。彼レ布爾牙利ニアルヤ、不平ノ惡徒ヲ使役シテ己レニ不利ナル者ヲ暗殺シ、或ハ反亂ヲ煽動セシコト一ニシテ足ラズ、警察ノ用意固ヨリ周到ナルベシト雖ドモ、此際尙ホ數層ノ注意ヲ爲シ、魯館ニ出入スル者ヲ詳察スルコト實ニ急務ト爲ス。布公謂ルコトアリ、余ノ身邊總テ魯ノ間諜ヲ以テ苦メラル、余ノ一言一行細大トナク皆ナ魯國ノ知ル所ナリ、障子壁板ト雖ドモ決シテ油斷ナラザルナリト、宜シク鑑ムベキナリ。

此日船ハ蘇門多剌海峽ヲ進行スト雖ドモ、强雨陰雲ノ爲メ左右陸地ヲ見ズ、夜間ハ屢々汽笛ヲ鳴ラシテ警戒セリ。其翌二十四日モ亦タ曇天ニシテ屢々强雨アリシガ、午後三時雨纔ニ止テ蘇門多剌東岸ノ連山一起一伏雪ヲ破ツテ近ク右舷ニ顯ハレタリ。蘇門多剌島ハ南洋ノ一大島ニシテ土地豐饒ニシテ物產ニ富ミ、和蘭ノ版圖ト稱スレドモ其實政權ノ及ブ所ハ僅ニ沿岸點々ノ小部分ニ過ギズ。他日山川其主ヲ替ヘザルヲ得ン。嗚呼神州男子タル者永遠ノ大志ナカラザル可カラズ。

同二十五日未明船動搖甚シ、艙間之ヲ望メバ左舷近ク蘇門多剌島北角ノ燈臺ニシテ、既ニ印度洋ニ入リシヲ知リ、二十六及ビ二十七ノ兩日ハ渺々タル滄海ヲ行キテ波濤ト飛魚ノ外一物ヲ見ズ、此夜十一時右舷ニ錫蘭島ノ南島（嘎爾）ニアル回轉燈ヲ望ンデ寢ニ就キ、其翌二十八日午前八時哥倫坡ニ投錨スルヤ、直ニ上陸シテ大東ホテルニ投ジ報告ヲ認メタリ。

最近ノ電報ニ因テ左ノ事ヲ知レリ。

一、魯國ハ清國ト條約ヲ結ンデ滿洲ヲ横斷シテ鐵路ヲ浦潮斯德ト旅順口ニ延伸スルノ自由ヲ得、又軍艦ヲ旅順口ニ碇泊スルヲ得ルニ至レリ。

嗚呼支那ニ一人物ナシ、然レドモ尙ホ五六年ノ時日アリ、注意セザル可ラズ。

右及御報告候也

明治二十八年十月二十八日

哥倫坡ニ於テ

陸軍歩兵大佐　福島安正

參謀總長大勳位　彰仁親王殿下

汽船ハ本日午後六時三十分解纜亞丁ニ向フ筈。

第六號　從哥倫坡至亞丁

哥倫坡碇泊中最近電報トシテ新聞雜誌ニ散見スル所左ノ如シ。

一、在韓京ノ三浦公使ハ召還セラレ廣島上陸ノ際捕縛セラレタリ。

二、朝鮮王妃ヲ殺害セシハ日本人ナリ。

三、朝鮮國王ハ難ヲ米國公使館ニ避ケタリ。

四、芝罘ニアリシ米國軍艦ペトレル號ハ護衞ノ爲メ朝鮮ニ行キタリ。

五、魯國ハ更ニ巡洋艦三隻ヲ增加シ朝鮮沿岸ノ變ニ備フベキヲ命ジタリ。

六、清國政府ハ十一月八日ヲ期シテ三千萬兩ヲ拂ヒ、遼東占領ノ日本軍隊ハ來年一月下旬マデニ撤回スル筈ナリ。

七、魯國ハ工兵三中隊ヲ滿洲ニ進メテ鐵道線路ノ測量ヲ爲サシム。

八、魯國ハ清國政府ノ承諾ヲ得テ鐵道ヲ滿洲ヨリ浦潮斯德ニ及ビ支線ヲ大連灣旅順口ニ築設セントス。

九、魯國ハ清國政府ノ承諾ヲ得テ軍艦ヲ旅順口ニ碇泊スルノ自由ヲ得タリ。

十、伊太利ノ前軍亞比西尼ノ的克利斯兵一萬五千ヲ擊破セリ。

十一、亞比西尼王墨尼里克病死シ伊太利トノ平和條約其緒ニ就カントス。

十二、西班牙ハ更ニ兵三萬ヲ克巴島ニ增遣セリ。

十三、西班牙ノ砲艦一隻克巴島ノ沿岸ニ坐礁シテ沈沒セリ。

十四、亞爾米尼事件ハ又益々切迫セリ、魯ハ佛ヲ携ヘテ英ノ政略ヲ妨害セントス。

十五、下部埃及ノ達迷多ニ虎烈刺病發生シ漸ク蔓延ノ勢ヒアリ。

十六、西部魯西亞ノ虎烈刺益々猖獗ヲ極メ、二週間內ニ死亡セシ者一千七百餘人ニ達セリ。

十七、佛兵東京ニ於テ海賊ト戰ヒ、死者三十餘名傷者七十餘名ヲ生ジタリ。

魯國ガ此ノ如キ無法ノ所業ヲ爲スモ、英國政府ハ尙ホ默スルカ、今ニシテ干涉セザレバ何ヲ以テ英國政府ハ立ツカト龍動ノ電報トシテ痛論セリ。

西班牙人ハ其性質殘忍懶情ニシテ植民地ノ人民ヲ御スルコト極メテ苛酷ナリ。克巴人ノ西班人ヲ嫌惡スルコト實ニ甚シク、遺恨骨髓ニ徹スルコト固ヨリ一日ニアラズ。是ヨリ先キ屢々密ニ克巴ノ物產ヲ輸出シテ、加拿他或ハ合衆國等ニ至リ、兵器彈藥ト交換シ、其根底既ニ深キヲ以テ西班牙軍隊ノ力能ク今回ノ反亂ヲ鎭定スルヤ否ヤ甚ダ覺束ナシ。殊ニ合衆國中ノ十七州ハ克巴ヲシテ西班牙ノ苛政ヲ脫セシムベシト主張シ、天下ノ人皆ナ同情ヲ克巴人ニ表スルヲ以テ、西班牙ハ遂ニ此一大島ヲ失フニ至ルベシ。而シテ克巴ガ獨立國タルヤ或ハ合衆國ニ入ルヤハ他日ノ問題トス。西班牙頻

リニ非里比納群島ノ將來ヲ顧慮ス固ヨリ正ニ然ルベキナリ。

今回伊太利ガ亞比西尼征討ノ軍ヲ興セシハ亦タ其原因ヲ魯西亞ノ陰謀ニ歸スルモノナリ。魯西亞ハ前ニ希臘教ヲ亞比西尼ニ傳布シ、過般其教頭數人ヲ聖彼得堡ニ召シテ之ヲ厚遇シ、且ツ之ト謀ル所アリタリ。元來亞比西尼ハ伊太利ト最近ノ條約ニ於テ伊太利ノ許諾ヲ得ズシテ外國ト交通スルコト能ハザルナリ。然ルニ亞ハ魯ノ陰謀ニ因テ之ヲ爲シタリ。故ニ伊ハ征討ノ軍ヲ興シタルナリ。聞ク魯國及ビ獨逸ノ奸商等ハ其汽船ヲ亞刺比亞ノ海岸ニ繫ギ、伊國ノ目ヲ盜ミテ密ニ來ル亞國ノ帆船ヨリ沙金或ハ象牙等ヲ得テ銃器彈藥ト交換スト、故ニ亞國ノ兵ハ精良ノ兵器ヲ携帶シ、尙ホ速射砲ニ至ルマデノ準備アリ、又亞國ハ亞佛利加黑人中ノ最强國ナリ。

下部埃及ニ發生セシ虎烈刺病ハ安正ノ調査上又多少ノ妨害ヲ爲スニ至ラン。

聞ク此頃甲克他及ビ孟買地方ニ暴風アリト、印度洋中波濤ノ著シク高カリシハ全ク此影響ナリシト。

既ニシテ午後四時旅店ヲ出テ小舟ヲ買フテメルブルン號ニ乘船ス。舟中錫蘭人及ビ印度人アリ、頻リニ日本ノ戰勝ヲ稱揚シ、手眞似口眞似以テ戰爭ノ狀ニ擬シ、頗ル羨シキ有樣ナリキ。安正曰ク斯クマデ羨シキハ尤モナリ。何故汝等モ自ラ强キヲ欲セザルカト、彼等悄然トシテ曰ク、昔シハ强カリシガ國ハ英ニ亡サレタリ、我々今ヤ君主ナシ、皆ナ貧困ニシテ如何トモスル能ハズ。嗚呼日本ノ軍隊ガ此邊マデ來リシナラバ、我々ハ如何ニ愉快ナラント、每度ナガラ亡國ノ民ホド憫然ナル者ハアラザルナリ。

時ニ急雨アリ、殆ンド咫尺ヲ辨ゼズ。哥倫坡ノ苦熱ヲ洗ヒ去テ頗ル爽快ヲ覺ヘタリ。午後七時三十分拔錨防波ノ突堤ヲ出ルヤ波濤忽チ高ク船動搖ヲ始メ且ツ屢々急雨アリ。翌二十九日正午マデニ二百十八海里ヲ行ク、終日曇天急雨數回西風强ク波濤高ク氣候冷涼タリ。三十日正午マデニ又三百六海里ヲ行ク、天候前日ト同ジ。三十一日正午マデニ又三百十六海里ヲ行ク、黑雲漸ク散ジテ屢々太陽ヲ見ル、風向波濤前日ノ如シ。此夜頗ル冷氣ヲ覺ヘ、寢具ニ毛布ヲ用ヒタリ。上海以來曾テ無キ所トス。十一月一日正午マデニ又三百三十四海里ヲ行ク、天氣始メテ快晴トナル。風向尙ホ前日ニ同ジ。二日正午マデニ又三百三十海里ヲ走ル殘雲散ジ盡シテ一天拭フガ如シ。此日蘇哥都拉島ニ接近スルヲ以テ屢々甲板ヲ徜徉シテ其方向ヲ望ミタリシガ、午後一時ニ至テ一線ヲ水天彷彿ノ所ニ認メ、三時ニ至テ左舷ニ蘇島ノ拉斯摩都拉角ヲ望ミ船ハ進ンデ亞丁灣ニ入ル。

蘇哥都拉島ハ英國ノ所屬ニシテ東西ノ長サ大約八十哩幅大約三十哩ニシテ、亞佛利加東北角ノ一大島トス。聞ク人口ハ僅々數千ニ過ギズ。英國別ニ島守ヲ置カズト、而シテ船ハ近ク其北岸ニ沿フテ走リ、親シク其形勢ヲ見ルニ、滿目峩々タル山脈ニシテ一起一伏砂礫落々トシテ處々ニ綠色ノ點々タルヲ見ルノミ。沿岸絕テ人影ヲ認メズ。其赤地ニシテ人煙ノ繁殖セザル又想像スルニ足ル。只

々北岸ノ中央ニ一村落アリ、達摩里(タマリダ)達ト云フ。戸數多キモ百ニ過ギズ。人家斜陽ニ映ジテ白色ヲ呈セリ。蓋シ石片ヲ以テ建築セシモノナラン。其北大約一里許ノ處ニ四五軒ノ人家ヲ認メ、一隻ノ帆船達摩里達ニ向ツテ來ルヲ見ル、哥倫坡ヲ發セシ以來茲ニ五日、常ニ茫々タル大洋ニシテ時ニ飛魚ノ波間ニ跳ルヲ見ルノミ。眼界更ニ一物ヲ見ズ、頗ル徒然ニ苦シム折柄ナルヲ以テ、蘇島ノ風色實ニ爽快ヲ與ヘタリ。船ノ亞丁灣ニ進入スルヤ、波濤頓ニ靜穩ニシテ此夜ハ愉快ニ安眠シ、其翌三日早起シテ身體ヲ清メ、旭日將ニ東天ニ昇ラントスル時、甲板ノ最高所ニ上ツテ遙ニ　皇城ノ方位ヲ拜シテ

天皇陛下ノ萬歲ヲ祝シ奉レリ。此日天色晴朗ニシテ一點ノ殘雲ナク風向東北ニ變ジ、海上平穩ニシテ船動搖セズ。此夜ハ恰モ滿月ニシテ一輪拭フガ如ク、靜カニ波ヲ破ツテ上ルヲ見ル。其爽快實ニ言フ可ラズ、夜半ニ至ルマデ甲板ヲ去ルコト能ハザリシ。

四日日出甲板ニ上レバ船首近ク巨大ノ岩石海面ニ突出スルヲ望ム、卽チ亞丁ト爲ス。一根ノ草木ヲ見ズ、人類ノ棲息シ得ベキ所ニアラズ。地ノ要ヲ見人工ヲ以テ天險ニ勝チ、遂ニ紅海南門ノ鎖鑰ト爲ス。英國ガ今日ノ盛大ヲ致ス者亦遇然ニ非ラザルナリ。

汽船ハ午前八時港內ニ投錨セリ碇泊十二時間ニシテ解纜蘇士ニ向フ筈ナリ。

右及御報告候也

明治二十八年十一月四日

亞丁ニ於テ

陸軍歩兵大佐　福島安正

參謀總長大勳位　彰仁親王殿下

第七號　從亞市至蘇士

十一月四日亞丁碇泊中最近電報トシテ見聞スル所ノ要件左ノ如シ。

一、日本ハ强國ニ向ツテ明言シテ曰ク、遼東撤兵ノ日ヲ以テ駐韓ノ日兵ヲ引揚グベシト。

二、朝鮮國王ハ新ニ王妃ヲ立テタリ、又皇帝ト稱サントセシガ列國ハ之ヲ拒メリ。

三、獨逸ハ清國政府ヨリ天津ニ於テ稅界ヲ得タリ。

四、回匪ノ亂益々猖獗諸道ノ官軍皆ナ敗レ甘肅省城蘭州ハ遂ニ賊有トナル。

五、清國內地ニアル一派ノ祕密教徒賊軍ニ合セントス。

六、魯國ハ巡洋艦一隻ヲ更ニ日本海ニ向ツテ增遣セントス、而シテ此艦內ニハ多數ノ補充海兵ト巨多ノ軍需品ヲ積載ス。

七、魯國ハ益々東洋變亂ノ時機ヲ利用スベシ。

八、魯國ハ二百五十萬ルーブルノ資本ヲ以テ波斯ノ德黑蘭ヨリ裏海ノ沿岸ニ至ル車道ヲ建築セントス。

九、亞爾米尼人二萬五千餘人山中ニ籠リタリト。

十、土耳其人ノ亞爾米尼人ヲ殺セシハ其數七八百ナリ。

十一、土耳其人亦タ亞爾米尼人二百餘ヲ殺シ、婦女ヲ姦シ且ツ其村落ヲ燒キタリ。

十二、エルゼルムニ於テハ優勢ノ亞爾米尼人其土耳其ノ鎮營ヲ圍ミ事急ナリ。

十三、英國大使ハ土耳其皇帝ニ謁見シテ一時間餘ノ長談ヲ爲セリ。皇帝ハ大使ノ意見ヲ採用シテ十分亞爾米尼事件ノ處分ヲ爲スコトヲ約シタリ。

十四、亞爾米尼改正委員ノ編成ハ異議アリテ成立セズ。

十五、土耳其皇帝禁衞ノ亞爾米尼兵中容易ナラザル企謀アルコト發覺シ、其内八人ハ直ニ死刑ニ處セラレタリ。

十六、土耳其ノ財政ハ益々困難ナリ。

十七、魯英ノ間ニ紛議ヲ生ゼントスルノ模樣アリテ相場ニ變動ヲ起サントス。

十八、土耳其ノ總理大臣ハ辭表ヲ呈セリ後任ハ外務大臣サイド巴沙ナラン。

十九、英領印度政府ハ舊交ノ情誼ヲ以テゴアノ一揆ヲ鎮定スル爲メ補助ヲ與ヘンコトヲ申出セシガ、葡萄牙ハ軍隊ノ到着不日ニアリトシテ之ヲ謝絶セリ。

此日港内碇泊ノ汽船大小約二十餘隻アリ、其内獨逸船二隻佛國船二隻及ビ葡萄牙船一隻ヲ見ル、葡萄牙船ハ印度額亞ノ騷動ヲ鎮定スル爲メニ發遣スル運送船ニシテ、甲板上兵ノ徜徉スルヲ見タリ。

午後五時三十分拔錨蘇士ニ向フ、北風船ヲ送リ亞丁ノ苦熱ヲ拂ヒ去テ大ニ爽快ヲ覺ヘタリ。

其翌五日日出甲板ニ上レバ船ハ夜半既ニ紅海南門ノ重地ペリムヲ過ギ、去テ今左舷ニ近クツガールル群島ヲ見テ針路北方ニ向ヘリ。此群島ハ落々タル砂礫岩石ノ童山ニ成リ、海濱稀ニ數株ノ樹木ヲ見ルノミ。沿岸ニ一家屋ト二張幕アリ。其傍ラニ長キ一旗桿ヲ樹ツ、蓋シ此邊常ニ難船多キヲ以テ豫メ之ニ備フルナルベシ。

正午右舷ニゼバエル群島ヲ見ル、小嶼點々其數五六、皆ナ赤土岩石ニシテ草木ヲ見ズ。午後三時又右舷ニ一孤島ヲ過グ。甚ダ大ナラズ。遠望恰モ一笠ノ波際ニ浮ブガ如シ。又砂礫ノ赤土トス。

此日朝來南風强ク吹イテ怒濤甚ダ高カリシガ、晩來風收ツテ蒸熱最モ甚シク、人皆艙内ニ止ル能ハズ、三々五々甲板ニ集ツテ談笑セリ。南方忽チ雲起リ電光閃々時々遠雷ノ響クヲ聞ク。思フニ摩蘇阿ノ方位ナラン。恰モ伊軍亞兵ト夜戰ヲ爲スヲ遠望スルノ感アリ。既ニシテ甲板ニ眠ルヤ夜半一雷近ク響キ其聲水雷ノ爆發ニ似タリ。快夢之ガ爲メニ驚カサレ、且ツ急雨襲ヒ來ルヲ以テ始メテ甲

板ヲ下リ艙内ニ睡眠セリ。六日朝來風向頓ニ變ジテ北トナリ、稍々冷氣ヲ覺ヘシト雖ドモ、午後ニ至リ熱氣次第ニ加ハリ流汗油ノ如シ。日沒後風威愈々加ハリ船體左舷ニ傾キ、且ツ風最モ熱クシテ不快言フ可ラズ。蓋シ亞剌比亞ノ沙漠未ダ冷却セズ其上ヲ吹キ來ル風ナルヲ以テ然ルナリ。故ニ地ノ冷却スルニ從ヒ風モ亦タ冷氣ヲ帶ビ、夜半後愉快ニ安眠セリ。此日天氣晴朗ナリシモ終日一物ヲ見ズ。抑モ地球全圖ニ就テ之ヲ見レバ、紅海ハ狹長ナル内海ニシテ亞細亞、亞佛利加ノ大地其水ヲ壓シ、其間ニ航海スル者常ニ山色ヲ稱スルコト恰モ我内海ノ如クナランコトヲ想像スト雖ドモ、其實決シテ然ラズ。亞丁ヨリ蘇士ニ至ルノ距離ハ一千二百海里餘アリテ、横濱ヨリ神戸長崎ヲ經テ上海ニ至ルヨリモ遠ク、又其幅ハ二三百海里アリテ間々神戸馬關ノ距離ニ等シ。而シテ兩亞ノ濱海礁岩出沒危險甚シキヲ以テ航路ハ其中眞深水ノ所ニアリ、終日一物ヲ見ザル又怪シムニ足ラズ。淼渺トシテ其大ナルコト想像スベキナリ。

此渺々タル大海ニ在テ終日一物ヲ見ズ、甲板ニ靜座シテ沈思默考スレバ感慨焉ゾ涌出セザルヲ得ン。請フ之ヲ諒セラレンコトヲ。

魯西亞ハ工兵三中隊ヲ出シテ滿洲地方ノ測量ニ從事シ、假恩ト暴威トヲ以テ清國ニ迫リ、西比利亞大鐵道ノ進路ヲ滿洲ニ取テ直ニ浦潮斯德ニ通ジ、更ニ支線ヲ大連旅順口ニ出シ且ツ軍艦ヲ旅順口ニ碇泊スルノ自由ヲ得ンコトノ承諾ヲ爲サシメタリト。

魯國ハ獨佛兩國ノ同盟ヲ利用シ、我戰勝ノ結果ヲ妨害シテ曰ク、日本ノ遼東ヲ占領スルハ東洋ノ安寧ニ害アリ、決シテ占領スルコト勿レト、彼ノ屈指ノ艨艟ヲ集合シ威力ヲ以テ無法ノ運動ヲ爲シタリ。

其言未ダ止マズ、其舌未ダ乾カザルニ彼レ以爲ラク、日本爲ス無ク清國實力ナク、獨佛亦タ背ク能ハズ、時機失フ可ラズト、是ニ於テ多年ノ陰謀ヲ暴露シ滿洲ヲ併呑シテ以テ旅順口ニ出ントスルノ計畫ニ着手スルニ至レリ。

然リト雖ドモ魯國ハ時機全ク熟シテ而シテ後チニ發セシニアラズ、意外ノ急變ニ乘ズルモノナレバ、陸ニ送糧運兵ノ不便アリ、海ニ船渠石炭ノ困難アリ、彼レ如何ニ虛勢ヲ張ルト雖ドモ未ダ決シテ其暴威ヲ逞フスルノ實力アラザルナリ。

彼レ實ニ滿洲ヲ併呑シテ東洋ニ望ムノ陰謀ヲ暴露シタリ。

我レ之ニ對スルノ計畫ヲ爲シ、孜々汲々實力ノ養成ニ從事セントスルハ彼ノ明ラカニ知ル所ナリ。彼ノ準備全ク整頓スルハ西比利亞鐵道全通ノ時ニシテ、尙ホ早クモ五六年ノ日月ヲ要サン、而シテ此五六年間ニ駸々トシテ我實力ノ進歩スルハ彼ノ最モ不便トスル所ナリ。

魯國ハ元來信義ナク、殘忍酷薄ニシテ國ヲ亡シ地ヲ奪ヒ、己レ境域ヲ廣メテ暴威ヲ擅ニセントスルモノナリ。故ニ其言ヲ容レテ一ヲ讓レバ二ト言ヒ、二ヲ讓レバ三ト言ヒ、益々得テ益々飽クナキ

ヲ常トス。

顧テ我國ノ形勢ヲ沈思スルニ、實ニ忍ブ可ラザルヲ忍ビ薪ニ臥シ膽ヲ嘗メ、鋭意實力ノ養成ニ從事シ、以テ五ケ年後ノ危機ニ應ズルノ準備ヲ爲シ、又時機ニ應ジテ進取ノ雄略ヲ取ルノ道ヲ講ズルコト目下ノ急務ナルコトハ又喋々ヲ要セザルナリ。

然レドモ彼ノ要求ヲ容ルルニ於テ固ヨリ制限アリ、彼レ益々乘ジテ若シ此制限ヲ越ンカ、決シテ承諾スルコト能ハザルナリ。

假令バ彼レ曰ク、日本ノ兵備擴張ハ魯國ニ敵意ヲ含ムモノナリ、强テ擴張セバ之ヨリ生ズル事變ハ貴國其責ニ任ズベシト、或ハ軍港ノ新設或ハ軍艦ノ增加ニ向ツテ容喙スル等ノ事アレバ、最早決シテ許スコト能ハズ、全國假令燒土トナルモ飽クマデ爭ハザル可ラザルナリ。

嗚呼波斯五百萬ノ大軍ヲ破リシモノハ僅ニ希臘一萬ノ兵ナリ、西班牙三百餘隻ノ艨艟ヲ沈メシモノハ區々英吉利數十隻ノ小艦ノミ。而シテ波斯及ビ西班牙ハ此大敗ヨリシテ四分五裂シ、遂ニ爲スコト能ハザルノ弱國トナリタリ。

當時ノ波斯及ビ西班牙ハ今日ノ魯西亞ヨリ更ニ盛强ニシテ、今日ノ日本ハ當時ノ希臘及ビ英吉利ノ類ニアラザルナリ。四海天險國ヲ爲シ、人口四千有餘萬皆ナ一身同體ニシテ異人種ヲ雜ヘズ上ニ皇統連綿ノ　陛下ヲ戴キ、忠君愛國ノ精神ニ富ムコト天下古今其例ヲ見ズ。加フルニ土地豐饒ニシテ他邦ノ食品ヲ仰ガズ、自國ノ產物ヲ以テ能ク自活スルヲ得ルノ國ナリ。今此邦土ト此國民トヲ以テ向フ、天下何物カ恐ルルニ足ラン。他日ノ魯西亞ヲ粉碎スルモノ豈ニ日本タラズト言ンヤ。只々前途ノ消長興敗ハ實ニ國家今日ノ決心如何ニアルノミ。

又作戰及外交上參考トシテ研究利用スベキ事件一ニシテ足ラズ。幸便追々陳述スル所アルベシ。

七日天氣晴朗朝來右舷ノ方位水天漂渺ノ間半螺ノ出沒スルヲ望ム。卽チ亞剌比亞ノ西岸黑若斯（ヘジヤス）地方ノ山脈トス。此日正午船ノ位置ハ北緯二十四度三十三分ニシテ既ニ溫帶ニ入リタリ。此日北風アリ冷涼ニシテ昨日ノ如キ苦熱ヲ覺ヘズ。船ノ進ムニ從ヒ左舷ノ天末恰モ雲煙ノ如キヲ認ム。卽チ亞佛利加ノレルマ山ニシテ圖上記シテ曰ク百二十海里ノ所ニ在テ之ヲ望ムヲ得ベシト。午後二時三十分左舷ニダーダルス燈臺ヲ望ム。此燈臺ハ嶋嶼ノ上ニ築クモノニアラズシテ海中一點ノ巖上ニアリテ、兩亞大陸ノ沿岸ヨリ幾ンド同距離トス。夕陽將ニ水下ニ沈マントスル時、船ハ既ニ蘇士灣口ニ接近スルヲ以テ、亞佛利加沿岸ノ山脈一起一伏地平線上ニ出沒セリ。午後十一時又左舷ニ兄弟嶋ヲ望ム。小嶋二アリ、故ニ名ク上ニ燈臺アリ、海中兩陸ヨリ又幾ンド同距離ノ所ニシテ航海者ノ最モ注意ヲ要スルノ點ナリト云フ。

八日未明寢室ノ窓ヨリ回轉燈（左舷）ヲ望ム。卽チ蘇士灣口ニシテ是ヨリ海水直ニ狹隘トナリ、其幅僅ニ二三十海里ニ過ギズ。兩亞大陸ノ山脈起伏連互シテ兩舷ニ迫リ、形勢一々指點スルヲ得ベ

シ。而シテ其長サハ大約百八十海里ナレドモ、兩岸ノ地勢ハ總テ燒岩熱砂ノ外幾ンド一樹木ナク、滿目ノ風光頗ル蕭索トシテ一モ旅情ヲ慰ムルニ足ル者ナシ。

此百八十海里間二ケ所ニ燈臺アリ、皆ナ西岸埃及ノ地トス。東岸ハ卽チ亞喀巴灣トニ因テ成セル支內半島ニシテ埃及ノ所領トス。

支內ハ西岸（蘇士灣）百八十六哩ト東岸（亞喀巴灣）百三十三哩ト北方陸地（蘇士、亞喀巴間）百五十哩ヨリ成ル三角形ノ半島ニシテ、面積實ニ一萬一千五百方哩アリト雖ドモ、人口僅ニ五千ニ過ギズト。太古ヨリ著名ノ地ニシテ尙ホ此ノ如シ。其赤土荒蕪ナルヲ察スルニ足ル。然レドモ半島中ニ聳ユル支內山ハ摩西斯ノ埃及ヨリ逃避セシ時、種々ノ不思議アリシト稱スル舊約全書ニ名高キ所ナルヲ以テ、歐米人ノ登山スル者年々少ナカラズ。此案內賃コソ實ニ貧困ナル此半島人民ニ對シ最モ大ナル歲入ナリト云フ。

一昨日マデハ暑氣酷烈ニシテ流汗油ノ如ク甲板上椅子ヲ以テ餘地ナク、皆ナ白衣ヲ着シ互ニ日陰ヲ爭ヒタリシガ、汽船既ニ溫帶ニ入リテ益々北進シ、此日朝來北風殊ニ甚シク寒冷頓ニ加ハリタル爲メ、皆ナ急ニ冬服ヲ着シ、甲板上寂トシテ空シク、椅子ノ狼藉スルヲ見ルノミ。遇〻兩岸ノ地勢ニ注目スル者モ亦タ務テ風威ヲ避ケ太陽ニ面スル方ヲ選ミテ其位置ヲ占ムルニ至レリ。

午後六時汽船ハ進デ蘇士運河ノ南口外ニ投錨セリ。亞丁ヲ去ルコト一千二百十海里滿四日ニシテ到達セリ。我橫濱ヲ去ルコト卽チ八千四百八十海里ニシテ三十五日ヲ費シタリ。其里程ヲ細別スレバ卽チ左ノ如シ。

橫濱、神戶	三百三十海里
神戶、上海	七百五十五海里
上海、香港	八百三十海里
香港、柴昆	九百十五海里
柴昆、新嘉坡	六百三十七海里
新嘉坡、哥倫坡	一千五百七十海里
哥倫坡、亞丁	二千九十五海里
亞丁、蘇士	一千二百十海里

汽船投錨スルヤ、運河局員小汽船ヲ走ラシ來テ噸數人員等ノ檢査ヲ爲セシ後チ貨物ノ積卸ヲ爲シ、而シテ卸セシ貨物ハ艀舟三隻ニ積ミ會社ノ小汽船之ヲ牽テ蘇士市ニ向ヘリ。安正ハ交趾支那總督アルマン、ルツソー氏其他ノ知人ニ告別シ、此小汽船ニ便乘セリ小汽船ハ其途次暫時同社ノ汽船澳州號ニ寄セタリ。澳州號ハ馬耳塞、澳州間定期郵船ノ一ニシテ塔積六千噸アリ其結構ノ壯麗ナルコト實ニ人目ヲ驚カセリ。乘客ハ概ネ英人ナリ、聞ク佛國郵船ガ英國比阿會社ノ線內ニ突入セシ後

チ遂ニ此結果ヲ得ルニ至リシマデニハ容易ナラザル困難ヲ經過セリト。

既ニシテ安正ノ乘リタル小汽船ノ蘇士市ニ到着スレバ夜ノ十時過ナリキ。市ハ直ニ海ニ瀕ミ埠頭ニ埃及政府ノ稅關アリ。既ニ閉局ノ後ナルヲ以テ手荷物ノ檢査ハ明朝八時マデ待タザルヲ得ズ。然ルニ幸ヒ郵船會社ノ支店長同船ナリシガ、稅關ノ夜番ニ高貴ノ人ノ上陸セシヲ告ルヤ、番人ハ直ニ走テ稅關長ニ報告シ、稅關長ハ直ニ制服ヲ着シテ出場シ、先ヅ安正ノ姓名ヲ問フ、安正卽チ名刺ヲ出シ且ツ密ニ銀貨三圓ヲ其手中ニ投ジ、彼又巧ニ之ヲ受ケタリ。而シテ檢査ハ只々一鞄ヲ開キテ表面上一寸儀式的ノ手續ヲ爲セシノミニテ瞬間ニ之ヲ終リ、他ハ又問フ所ナクシテ叮嚀ニ握手シテ別レタリ。此時瑞士人二名同船シ來リシガ此事ヲ爲サヾリシ爲メ嚴密ナル檢査ヲ受ケ、且ツ旅行券ノ有無ヲ問ハル、等頗ル餘計ノ時間ヲ費シタリ。

ヲリエンタル、ホテルニ到着セシハ十一時過ナリシ、而シテホテルハ希臘人ノ營ム所ニシテ甚ダ不潔ヲ極メ室內密閉シテ空氣ノ流通惡シク、且ツ太陽ノ爲メニ蒸シ燒カレタル臭氣紛々トシテ頭痛ヲ起シ、岑々トシテ終夜安眠スルコト能ハザリシ。

埃及土耳其間來往定期ノ郵船ハ墺他利ノロイド會社伊太利ノルバチノ會社佛蘭西ノメサゼリー會社埃及ノケヂーヴ會社等ナリ、皆ナ亞歷散德亞ヲ以テ起點ト爲ス。故ニ明朝蘇士發程爲替曳出シノ爲メ一日改羅ニ止マリ、直ニ亞歷散德亞ニ赴キ早便君士丹丁堡ニ向フベキ筈ナリ。

右及御報告候也

明治二十八年十一月八日

蘇士ニ於テ

陸軍歩兵大佐　福島安正

參謀總長大勳位　彰仁親王殿下

第八號　從蘇士至改羅

蘇士運河　蘇士地峽ハ亞細亞、亞佛利加ノ兩大陸ヲ接續スルニ古來最モ要衝ノ地トス。其幅僅ニ七十哩ニ過ギズ、而シテ運河ハ中間ノ鹹湖ヲ利用シ長サ八十七哩アリ。

此運河ハ埃及ノ副塞德巴沙ノ治世佛人勤塞布ノ經營ニ基キ、一千八百五十九年四月二十二日ニ起工シ一千八百六十九年十一月十六日ヲ以テ竣工開河ノ盛典ヲ擧ゲタリ。此間實ニ十年餘日ニ二三萬ノ役夫ヲ使用シ、總計大約一千九百萬磅ヲ費シタリ。深サ二十六呎ニシテ喫水二十四五呎ノ船艦ハ自由ニ往復スルニ至レリ。

此ノ如ク地中海ト紅海トヲ連絡スルニ至リ左ノ大變化ヲ生ゼリ。

龍動香港間	一萬五千二百二十九哩	喜望峯通リ	一萬一千百十二哩
同		同	
阿德薩香港間	一萬六千六百二十九哩		八千七百三十五哩

此變化ハ以テ亞細亞、歐羅巴ノ二大陸ヲ近接セシメ、特ニ通商貿易ノ利害ニ關スルノミナラズ、東方策略ニ非常ノ速力ヲ與ヘシ者ト謂フベシ。

爾來兩陸ノ交通年々益々頻繁ニシテ、明治二十六年ニハ此運河ヲ通過セシ船艦總數三千三百四十一隻（一千七十五萬三千七百九十八噸）ニシテ蘇士運河會社ノ收入實ニ二百八十二萬六千六百九十四磅（一日ノ收入我銀貨大約七萬圓）ニ達セリ。

此通過セシ船艦ヲ國別スレバ左ノ如シ。

英吉利	二千四百五隻
獨逸	二百七十二隻
佛蘭西	百九十隻
和蘭	百七十八隻
伊太利	六十七隻
墺太利	七十一隻
諾爾威	五十隻
西班牙	二十九隻
葡萄牙	十隻
魯西亞	二十四隻
土耳其	三十四隻
比耳義	一隻
日本	一隻
埃及	五隻
亞米利加	三隻

英吉利ノ船隻ハ全數三分ノ二以上ニ居ルコトニ注意スルヲ要ス。

蘇士運河ノ工事費一千九百萬磅ノ內一千二百八十萬磅ハ株券募集ノ金額ニシテ、其他ハ都テ克德威（埃及王）ノ出ス所ナリシガ、一千八百七十五年英國政府ハ四百萬磅ヲ以テ克德威所有ノ株券十七萬七千枚ヲ買收セリ。故ニ英國ハ船隻ノ大數ヲ占ムルノミナラズ、又全權ノ大部分ヲ有スル者トス。

今ヤ蘇士運河ハ歐洲兩亞大陸ノ命脈ニ關スル最大緊要ノ地ニシテ、此地ヲ領スル者ハ埃及ナリ。埃及ハ財政困難士氣敗頽强國ニ干渉セラレテ一ノ自由ノ運動ヲ爲スコト能ハズ。幾ント獨立ノ實ナシト雖ドモ、尙ホ其命脈ヲ維持スルモノハ全ク天下ノ要衝ニ位置シ、强國相ヒ嫉視シテ互ニ手ヲ下ス能ハザルニ因ルナリ。

英國ハ蘇士運河ヲ通過スル船隻ノ三分ノ二以上ヲ有ス。則チ此八十七哩ノ水道ガ印度及澳洲ノ運命ニ大關係ヲ有スル所以ニシテ、英國ハ必死ニ此全權ヲ掌握セント欲シ、亞剌比巴沙（アラビヤ　パシヤ）ノ反亂以來一層埃及ノ政治ニ干渉シ、文武諸官衙緊要ノ地位ハ皆ナ英人ノ號令スル所ナリ。歐洲各國近年益々東洋ニ威權ヲ擴張セントスルニ當リ、漸ク蘇士運河ノ利害ヲ感ズルコト急ニシテ、英ノ政策ヲ妨害セントスル者續出シ、埃及人ノ英人ヲ嫌惡スルノ間隙ニ乘ジテ益々陰謀ヲ逞フシ、魯佛ノ如キハ常ニ相ヒ提携シテ事每ニ英ノ政略ニ反對スト謂フ。

形勢既ニ此ノ如シ、故ニ各國政府ハ運河ノ利害ニ關スルノ輕重ヲ問ハズ、埃及問題ハ以テ天下ノ重事ヲ左右スル者ト爲シ、國ノ大小ヲ論ゼズ、皆ナ使臣ヲ其首府改羅（カイロウ）ニ派遣シテ常ニ注意ヲ怠ラズ、今日ノ改羅ハ實ニ天下政略ノ中心ナリト斷言ス。

蘇士市街　人口大約一萬ニ過ギズ、頗ル不潔ノ市街ニシテ此附近三大陸各色各樣ノ人種相雜ハリ、物價高ク人氣惡シク、盜賊多ク臭氣深ク、不快ニシテ少シモ油斷ノナラザル地トス。旅店ノ一宿、行季ノ運搬、貨幣ノ兩替等ニ非常ノ注意ヲ要セシ上ニ過分ノ金錢ヲ貪ラレタリ。

此市街ハ船舶碇泊ノ場所ヨリ數哩ノ內地ニ位シ、貨物ハ多ク波爾多塞德（ボルトサイド）ニ卸載スルヲ以テ通商貿易ノ要點ニアラズ漸ク衰敗ニ傾クト云フ。

蘇士改羅間汽車　百四十八哩ニシテ上等九十七ピヤストル中等四十九ピヤストルトス。埃及ノ貨幣ハ百ピヤストルヲ以テ一埃及磅トシ、一埃及磅ハ英ノ一磅ヨリモ大ナリ。則チ英ノ一磅ハ埃及ノ九十七ピヤストル半ニ相當スル者トス、又貨幣ニ左ノ種類アリ。

銀貨

一ピヤストル
二ピヤストル
五ピヤストル
十ピヤストル
二十ピヤストル

白銅貨

半ピヤストル

金貨ハ未ダ目ニ觸レズ、從前廣ク通用セシト言フ銅貨モ亦タ之ヲ見ズ。一般ニ流通スルハ前記六種ノ補助貨幣ト、英ノ一磅金トニシテ、稀ニ佛ノ金貨ヲ見ル拿破崙一個（二十佛（フラン））ハ埃ノ七十七ピヤストル四十分ノ六トス。

總テ價ヲ命ズルニ或ハ磅ト云ヒ或ハ佛ト云ヒ或ハピヤストルト云ヒ各商勝手次第ニシテ歸一スル所ナシ。故ニ游歴者ノ爲メニハ非常ノ煩雜ヲ來シ、狡奴ノ爲メニ乘ゼラル、コト少シトセズ。最初ハ各國貨幣比例表ヲ集メタル小冊子ヲ携帶スルコト最モ必要トス。

十一月九日早起窓ヲ開テ不潔ノ空氣ヲ散ジ、一碗ノ珈琲ヲ喫シ、嚮導ヲ從ヘテ市中ヲ一覽シ、郵便局ニ赴キ書翰ヲ投ズ。墨西哥銀及印度魯比(ルピー)ノ外英モ佛モ埃ノ貨幣モ携帶セザルヲ以テ、奴輩ノ術ニ陷ルヲ知ルモ止ムヲ得ズ一魯比ヲ五ピヤストル銀ト交換シテ郵税ヲ拂ヒ、歸途銀行ニ赴キ印度魯比ト英ノ磅ト兩替シテ汽車賃ヲ準備セントセシモ、銀行ニ謝絶セラレ、又止ムヲ得ズ雜貨店ニ至リ依賴セシニ固ヨリ信義モ廉耻モアルベキ筈ナキ射利一方ノ下等人種ナルヲ以テ、又知リツ、乘ゼラルル所トナリ、六十魯比ヲ以テ僅ニ三磅ト交換シ、之ニテ先ヅ改羅ニ達スルマデノ顧慮ナキヲ得タリ。

旅店ニ歸リテ怪シキ朝食ヲ喫シ、不潔ノ一室ヲ得テ終夜頭痛ニ苦シミシ代價トシテ二十佛(フラン)ヲ貪ラレ、午前十時後匆々停車場ニ至ルヤ、嚮導及荷物ノ役夫ニ取リ卷カレ、奪ハヌ計リニ過分ノ賃銀ヲ强請セラレ、且ツ荷物ノ看守、切手ノ購求、盜賊ノ用心實ニ混雜ヲ極メタリ。而シテ發車ノ時間切迫スルモ荷物ノ始末附カズ、依テ役夫ニ命ジテ上等ノ車中ニ荷ヒ入レシメントスルヤ、書記走リ來テ之ヲ遮リ、漸ク割符ヲ與テ荷物ヲ貨物車ニ入レタリ。書記曰ク荷物賃トシテ三十五ピヤストルヲ與ヘヨト、之ヲ與フ、役夫又來リ曰ク酒手ヲ與ヘヨト、此奴輩ト思ヘドモ面倒ナレバ一小銀貨ヲ與ヘシニ、不足ナリトテ呶鳴リ大銀貨ヲ與ヘザレバ荷物ヲ貨物軍ヨリ卸スト云ヒテ强迫セシヲ以テ、止ムヲ得ズ杖ヲ握リ大喝シテ曰ク、直ニ卸セ、余汝ヲ警官ノ元ニ引摺リ行ント、彼レ默シテ去ル。彼レ去ルヤ乞丐來リ昔シノ兵卒ナリ、今飲食ニ困ス助ケクレヨト袖ニ觸レテ動カズ、一個ノ白銅錢ヲ與フルヤ、之ニテハ不足ナリ、銀貨ヲ與ヘヨト迫リ、汽車ノ發スルマデ頗ル紛雜ヲ極メタリ。

午前十一時汽笛一聲煙ヲ吐テ走ル、滿目ノ風光只々渺漠ニシテ北方伊士買利(イスマイリヤ)亞ニ達スル五十一哩間ハ二三ノ寒村アルノミ。三四ノ停車場アレドモ皆ナ一軒家ナリ。然レドモ天氣晴朗空氣乾燥ニシテ爽快言フ可ラズ。運河ハ鐵路ト遠ク並行シ、電信柱ハ默シ沙原ニ湮沒シテ船艦ノ往復スルハ恰モ沙上ヲ走ルガ如ク、處々ニ白壁ノ孤屋アリテ旗桿ヲ樹ルハ運河ノ停船場ト爲ス。又鐵路ノ右ニ沿フテ一條ノ長溝アリ。卽チ飲水溝ニシテ尼爾(ナイル)河ノ甜水ヲ蘇士ニ引用スル者トス。運河ノ大工事中又之ヲ起工シ一千八百六十九年十二月二十九日始テ竣工セリト云フ。此利便ヲ得ザル以前ハ四千個ノ大桶ヲ造リ、一千六百頭ノ駱駝ヲ役シテ二三萬人ノ飲水ヲ運搬シ、之レノミニテモ一日ニ八千佛(フラン)ヲ費シタリト謂フ。以テ其工事ノ困難ニシテ且ツ盛大ナリシヲ想像スルニ足ル。此日沙漠ニ亞剌比亞人ノ數隊ヲ見ル。皆ナ駱駝或ハ駿馬ニ跨リ紅帽ニ白布ノ鉢卷ヲ爲シ、白衣ノ上ニ黑布ヲ纏ヒ、劔ヲ帶ビ銃ヲ携ヘ、疾驅奔馳スルノ狀實ニ勇壯ヲ極メタリ。殊ニ酋長ラシキ者ハ銀ヲ以テ刀劔馬鞍ヲ彫鏤セリ。

伊士買利亞ハ鹹湖ニ臨ミ蘇士、波再多塞德中間ノ地ニシテ、運河工事ノ當時ハ此ニ本部ヲ置キ一時隆盛ヲ極メシ所ナリ。今改羅、蘇士、波爾多塞德鐵路ノ三叉點ニシテ、再ビ繁盛ニ赴カントシ人口衆多ナラズト雖ドモ街衢井然上等ノ旅店アリ。旅客ノ來游スル埃及名所ノ一トス。

汽車伊士買利亞ニ停止スルコト大約三十分ニシテ發シ、飲水溝ノ北岸ニ沿フテ西ニ走リ、二三ノ蕭條タル停車場ヲ經、二十八哩ニシテ達スルヲ的勒爾克比爾ノ停車場トス。又一寒村ニ過ギズト雖ドモ一千八百八十二年九月十三日英軍ガ埃及ノ反將亞剌比巴沙ヲ破リシ所ナルヲ以テ著名ナリ。村ノ東端ニ記念碑アリ、戰死セシ英軍ノ士卒ヲ葬ル。此一敗ニ於テ埃及ノ全軍潰走シ、翌朝兵員ヲ點檢セントセシニ軍旗銃砲空シク陣營ニ狼籍タリ。亞剌比巴沙ヲシテ復タ爲スコト能ハザラシムルニ至レリ。

汽車ハ尚ホ西ニ向テ走リ尼爾薩喀日特ヲ經比拿尼爾亞士爾ニ於テ亞歷散德里ノ線路ト會シ、之ヨリ南ニ轉ジ、夕陽尖塔ノ下ニ沒スルヲ望ミ、午後六時改羅ノ停車場ニ到着セリ。

的勒爾克比爾ヨリ改羅ニ至ル六十九哩間ニ汽車所謂尼爾河ノ三角地ヲ走ルヲ以テ全ク光景ヲ異ニシ、地勢平坦土壤膏沃ニシテ人煙稠密樹林村落ノ爲メニ眺望甚ダ狹キヲ覺ユ。尼爾河夏月ノ漲溢今ヤ沃土ヲ殘シテ減退ノ極度ニ達セントスル時ニテ、五穀豐熟農民田圃ニ繁忙ナルヲ見受タリ。耕ス所ハ多ク豆、麥、王米、棉花等ナリ。

改羅ノ停車場ニ至ルヤ各旅店ノ手代爭フテ客ヲ迎フルヲ見ル。則チ案内記ノ筆頭ニアルシエツフエルド、ホテルノ手代ヲ呼デ荷物ヲ托シ一鞭馬車ヲ驅テ旅店ニ達セリ。

改羅ハ歐米ノ豪富紳士等避寒ノ地ナルヲ以テ旅店ノ多キト結構ノ宏大ナルコト歐羅巴ニ於テモ大國ノ大都會ニ非レバ見ルコト能ハザル程ナリ。

右蘇士改羅間ノ概略及御報告候也

明治二十八年十一月二十四日

埃及國改羅ニ於テ

陸軍歩兵大佐　福島安正

參謀總長大勳位　彰仁親王殿下

亞爾米尼事件ヲ略言スレバ、一等國ハ涎ヲ流シ互ニ相ヒ嫉視シテ容易ニ手ヲ下スコト能ハズ。二等國以下ハ歐洲ノ大亂ヲ惹起センコトヲ恐レ、皆ナ土耳其ノ獨立ヲ希望スルハ確然タルヲ以テ、今般ノ事件ヲ以テ未ダ分奪ノ時機ト謂フ可ラズ。伊ノ艦隊ハ英ノ艦隊ニ繼テ發シ、佛ノ艦隊ハ魯ノ艦隊ト提携シテ、獨モ墺モ又相應ノ軍艦ヲ派遣シ、皆ナ群島海邊薩魯尼喀、士迷爾那等ノ所ニ出沒シ、非常ノ意氣込ヲ示シタリト雖ドモ、今ハ少シク間ノ拔ケタル有樣ナリ。故ニ土耳其ノ軍隊ニシテ能

ク鎮壓ノ功ヲ奏スルニ於テハ平穩ニ事局ヲ結ブコト疑ヒナシト雖ドモ、土耳其ノ近況ヲ熟視スルニ、特ニ亞爾米尼(アルメニヤ)及亞那多里亞(アナトリヤ)地方擾亂スルノミナラズ、亞剌比亞人四萬餘土耳其ニ叛テ黑若斯(ヘジヤス)ノ鎭臺ヲ襲擊シ、達馬士克(ダマスク)近傍ノ回徒又耶蘇教徒ヲ殺戮セントシ、亞爾巴尼(アルバニヤ)ノ人民ハ土耳其ノ政令ヲ肯カズ、干德亞(カンデヤ)島ノ希臘人ハ背叛ヲ圖ラントス。而シテ土耳其政府ハ方向ノ歸一スル所ナク、屢々內閣ヲ更革シ大軍召集ノ令ヲ發スルモ之ヲ實行スルノ軍資ナク、實ニ紛擾錯雜ノ國勢ナルヲ以テ、今後如何ナル變化ヲ生ズルモ計ラレズ。本日ノ龍動電報ヲ見ルニ、魯西亞ハ黑海艦隊及阿德薩(アデサ)ノ軍隊ニ戰鬪準備ヲ命ジタリト、兎ニ角天我帝國ニ鋭意改進ノ時機ヲ與ヘシ者ト謂フベシ。將來ノ四五年間ハ實ニ國家ノ興敗ヲ決スル最大緊要ノ時ナリ。

是ヨリ先キ日清戰爭ノ起ルヤ、天下ノ皮相者皆ナ我帝國ノ小ヲ以テ清國ノ大ニ當ルニ驚歎シ、悉ク同情ヲ我ニ表シタルコト疑ヒナシト雖ドモ、戰勝ノ結果臺灣ヲ領土トシ二億萬兩ノ償金ヲ取リ、次デ三國ノ干涉トナリ、又駸々國運ノ進步スルヲ見テ今ハ嫉妬ノ時期トナレリ。英國及東洋ニ深キ關係ヲ有セザル諸國ノ人士ハ相見ル每ニ戰勝ヲ賀スルト雖ドモ、獨、魯、佛、蘭、西等諸國ノ人ハ話頭ヲ兩國戰爭ノ事ニ及ボサズ、勿論戰勝ヲ賀スル等ノ事ナキハ奇妙ナリ。之ニ反シテ英國軍人等ハ到ル處非常ノ好意ヲ表シ、談話將來ノ佳境ニ入ルコト多シ。

此ノ如キ有樣ナルヲ以テ、從前ノ如ク行ク先每ニ好意ヲ受ケ、只々珍物トシテ待遇セラレシ時節柄ト異ナリ、一方ニ都合ヨケレバ一方ニ惡ク、又好意ヲ以テ親交スル者モ他ヲ顧慮スルノ觀アリ、事物ノ調査ハ從前ノ如ク容易ナラザレドモ、我帝國ノ威嚴ニ關シ大ニ面白味ヲ加ヘ來レリ。當地ニ各種ノ新聞紙アリ、英字新聞ハ喋々先年旅行ノ事マデモ賞揚シ、一擧一動之ヲ紙上ニ揭載スルモ、佛字新聞ノ如キハ一語ヲ紙面ニ顯ハセシ事ナク、嫉視スルノ有樣ナルハ誠ニ妙ナリ。以上ノ事實頗ル小ナリト雖ドモ我帝國ノ利害ヲシテ彼等ニ感ゼシムルニ至リタルノ一證トシテ見ルニ足ラン。

第九號　改羅滯在摘要第壹

抑モ蘇士ニ上陸シテ道ヲ改羅ニ取リタルハ爲替金受取ノ爲メニシテ、直ニ亞歷散德里ヨリ乘船君士丹丁堡ニ赴ク豫定ナリシガ、改羅到着ノ翌日ハ日曜日ニシテ、銀行ハ休業シ蘇士ニ於テ兩替セシ三磅ノ英貨ハ幾ント消費セシヲ以テ、終日旅店內ニ在リ亞爾米尼事件ノ近況ヲ研究セリ。

此時土耳其ノ內閣ハ變更シ、各國ハ軍艦ヲ派遣セントシ、土耳其內地ノ秩序ハ紊亂シ、君士丹堡ハ非常ノ混雜ニシテ、今此地ニ踏ミ込ムモ到底相手ニスル者ナク、空シク時日ヲ費シテ徒ラニ世人ノ疑念ヲ抱カンヨリ、寧ロ改羅ニ滯在シテ埃及ノ軍事及形勢ヲ研究シツヽ、亞爾米尼事件ニ注目スルノ得策タルヲ熟考シ、斷然明日ヨリ其計畫ニ着手センコトニ決心セリ。

十一月十一日　快　晴

一、午前九時里昂銀行ニ至リ英貨五十磅ヲ受領ス。手數料トシテ百分ノ一ヲ引キ去ルハ至當トス。上海等ニテハ百分ノ五ヲ引キ去ルト謂ヘリ。

二、同十時埃及駐紮英國特命全權公使ロールド、グロメル氏ヲ訪問シテ我東京駐紮ノ同國特命全權公使サトウ氏ヨリノ添書ヲ交附スルヤ、直ニ埃及全軍ノ司令官陸軍少將キチネル氏及埃及占領軍ノ司令官陸軍少將ノール氏ニ宛タル書翰ヲ交附シテ曰ク、余ノ盡力ヲ求メラルヽハ大慶ノ至リナリ。此書ヲ二少將ニ示シテ相談セラレヨト。

三、陸軍少將ノール氏ヲ訪問シ書翰ヲ渡シテ埃及占領英兵ノ兵營一覽ヲ依賴ス。少將曰ク不日余自ラ貴官ヲ亞巴西亞ノ兵營ニ誘導セント、少將ハ此頃馬爾他ノ陸軍司令官ヨリ轉ジ來リシ人ナリ。曾テ日本ニ游ビシ時、外務省參事官本野一郎氏ノ案内ニヨリテ詳カニ東京ノ見物ヲ爲セリト頗ル喜ビ居レリ。室内ハ日本ノ美術品ヲ以テ裝飾ノ大部分ヲ占領セリ。

四、陸軍少將キチネル氏ノ邸宅ニ至ル、門上赤地ニ白ノ半月ト星トヲ顯ハシタル旗章ヲ揭グ、即チ埃及ノ國旗ナリ。少將不在ノ故ヲ以テ陸軍省ニ至リ面會ス。少將先ヅ我戰勝ヲ賀シ、公使ヨリノ書翰ヲ見テ萬事盡力スベキヲ述ベ、直ニ諜報課長少佐ヴインケツト氏（埃及軍ノ大佐）ヲ呼ビ、所要ノ質問ニ答ヘ萬端ノ助勢ヲ爲スベキ事ヲ命ゼリ。

少將ハ數年間埃及ニアリ。大尉ノ時ヨリ蘇丹遠征軍ニ從ヒ勳功ヲ奏シ、歷進シテ遂ニ今日ノ位置ニ達セシ沈重果敢ノ人ナリ。

少佐ヴインケツト氏ハゴルドン將軍救援軍ノ先鋒トシテ沙漠ヲ踏破シテカルツームニ進ミ、爾後賊軍埃及ノ南境ニ大擧シ來リシ時、トスキーニ激戰シテ之ヲ破リ殊勳アル將校ノ一人ニシテ、且ツ最モ學術ニ長ジ、埃及蘇丹等ニ關スル著述少ナカラズ。又亞剌比亞語ヲ能クセリ。諜報課長ハ恰モ埃及軍ノ參謀長タルガ如ク最モ重要ノ位置ナリ。今ヨリ七八ケ月前墺地利人ニシテ埃及ノ將校トナリ、埃及ノ盛時蘇丹達爾布爾ノ知事ニ任ジ、摩的ノ大亂興ルヤ屢々賊ヲ破リタリト雖ドモ、援軍絶ヘ遂ニ賊ノ捕フル所トナリ、十一ケ年間捕虜トナリテ阿摩德拉曼（カルツームノ對岸）ニアリ。幾度カ死生ノ間ニ出入シ、非常ノ辛酸ヲ嘗メタル斯拉丁巴沙ヲ救ヒ出シタルヲ以テ頗ル著名ナリ。

五、埃及國外務大臣ノ祕書官ニ面會シテ外務大臣ニ紹介ノ手續ヲ依賴セント欲シ外務省ニ至ル。時ニ午後一時ナリ。既ニ退省シテ一人ヲ見ズ、後チニ聞ク執務時間ハ午前九時ヨリ午後一時マデナリト。

六、墺國政府派遣ノ埃及財政整理委員伯爵薩爾斯幾氏ヲ訪問シテシーボルト氏ノ添書ヲ交附ス。氏大ニ喜ビ談話二時間ヲ經テ歸ル。氏ハ先年特命全權公使トシテ我東京ニ駐紮セシ人ナリ。

七、軍事研究トシテ東部歐羅巴、埃及及亞細亞諸國ヲ游歷スルハ人ノ最モ奇トスル所ナリ。故ニ

輜重運輸ノ研究ヲ以テ第一ノ目的トストノ返答ヲ以テ本領トセリ。

八、虎烈刺病始メテ發セシ以來十一月九日マデノ總計六百五十八人ニシテ死亡五百十五人トス。

九、毎年十一月初旬ヨリ避寒ノ爲メ歐米各國ヨリ來游スル者頗ル多數ノ由ナルガ、本年ハ虎烈刺流行ノ爲メ旅店ハ今ニ寂寥タリ。

十、埃及政府ニ派遣セル外交官ノ主ナル者左ノ如シ。

北米合衆國　外交事務官兼總領事
墺地利　同　斷
土耳其　辨理公使兼總領事
叮嗎　外交事務官兼總領事
佛蘭西　特命全權公使外交事務官兼總領事
獨逸　總領事
英吉利　特命全權公使外交事務官兼總領事
希臘　外交事務官兼總領事
和蘭　同　斷
伊太利　同　斷
諸威瑞典　同　斷
波斯　同　斷
葡萄牙　同　斷
魯西亞　同　斷
西班牙　同　斷

以上十五ケ國ニシテ商業上强テ利害ヲ感ゼザル者マデ外交官ヲ此地ニ駐紮セシムルハ前便既ニ略報セシ如ク此地ハ實ニ三大陸ノ鑛鑰ニシテ外交政略ノ中心ニ位スルヲ以テナリ。天下ノ形勢ニ明カナラザレバ天下ノ活劇ニ勝利ヲ占ムルコト能ハズ。此邊宜シク御一考本邦ヨリモ有爲ノ外交官一二名御派遣アランコトヲ切望ス。

同　十二日　快　晴

一、午前十一時陸軍省諜報課ニ至リ課長少佐ヴインケツト氏ニ面會シテ調査ノ端緒ニ就ントス。少佐一書ヲ示シテ曰ク、書中ノ第七編ハ埃及軍ノ編成ヲ略記スルモノ、先ヅ之ヲ一讀シテ其大體ヲ知リ、疑問ノ要領ヲ集メラレテハ如何ント、安正其注意ヲ謝シ此書ヲ携テ旅店ニ歸リ、先ヅ面積、人口、沿革、編成、教育、俸給、糧餉、被服、武裝、結婚、造兵、警務、學制等ニ關スル主眼ノ問題數十ケ條ヲ作ル。

二、此日重要ナル電報左ノ如シ。

甲、土耳其ノ財政ハ將ニ整理セラレントス。

乙、伊國ノ艦隊ハ英國艦隊ニ繼テ進發セントス。

丙、日爾薩勒摩近傍ニテ土民英國ノ教堂ヲ襲ヒ牧師ハ逃レタレドモ從僕ハ殺サレタリ。

丁、土都駐紮ノ各國大使ハ土廷內閣會議ノ決議ヲ待テ最後ノ手段ヲ取ラントス。

同　十三日　快　晴

一、午前陸軍省諜報課長ニ就テ前記要領ノ研究ニ着手ス。

二、諜報課ニハ出仕トシテ大佐士拉丁巴沙アリ、大佐ハ前ニ既ニ記セシ如ク十一年間賊將亞布德拉ノ捕虜トナリテ阿摩德拉曼ニ在リ少佐ヴインケツト氏ノ苦心計畫ニヨリテ生還セシ人ナリ。

三、阿摩德位曼ハ蘇丹ノ首府ニシテ亞布德拉ノ牙營ナリ。白青兩尼爾河ノ合流ニ位シ其左岸ニアリテ喀爾都摩ノ敗跡ト相對ス。聞ク亞布德拉ハ親兵數萬人ヲ首府ニ駐メ、後裝銃尙ホ四萬餘梃ヲ有シ、製造場ヲ設ケテ彈藥ヲ製造シ、堅固ノ堡壘ヲ築テ防禦ノ計畫嚴重ナリト。又聞ク常ニ間諜ヲ埃及ニ放テ時事ヲ探究シ、改羅ニアル國語ノ新聞ハ常ニ竊ニ講究スル等最モ注意ヲ密ニスト、原來亞布德拉ノ目的ハ摩的教ヲ頑信スル無智決死ノ蠻民ヲ驅テ埃及ヲ併合シ、遂ニ君士丹丁堡ヲ攻略スルニアルヲ以テ、早晩一大衝突ヲ起スコトアルベシ。故ニ英國政府モ大ニ此ニ顧慮スル所アリテ、埃及軍及占領英軍ノ主力ハ盡ク埃及ノ南境ニ集メテ亞布德拉ノ來襲ニ備ヘ常ニ警戒ヲ嚴重ニセリ。

四、少佐ヴインゲツト氏ニ埃及軍ノ步騎砲兵營、駱駝隊、士官學校、武庫及練兵ヲ一覽スルノ許可及其手續ヲ依賴ス。

五、同少佐ノ注意ニヨリ少將キチヲル氏ノ紹介ニテ新任陸軍大臣ニ面會ス。昨日內閣ニ變動アリ總理大臣拏巴爾巴沙ハ其職ヲ辭シ、陸軍大臣麻斯達佛巴沙其後任トナリ、式部長官亞巴尼巴沙其後チヲ襲ヘリ。埃及ノ陸軍ハ都テ全軍司令官ノ指揮經營スル所ニシテ、陸軍大臣ハ只々其椅子ニ坐スルノミ。誰ニテモ能ク問ニ合フコトヲ得ルノ職務ナリト。

六、軍人倶樂部ノ名譽會員トナル。

七、此夜伯爵薩爾斯幾氏ヨリコンネンタールホテルニ晩餐ニ招カル。獨逸國派遣ノ埃及財政整理委員男爵リヒトホーヘン氏及スラチン巴沙同席タリ財政整理委員ハ英佛獨墺伊魯六大國ヨリ派遣スル者トス。

八、此日重要ノ電報左ノ如シ。

土耳其政府ハ地方ノ知事ニ命ジテ銳意亂民ヲ鎭壓セシム然レドモ兵力ト金力ノナキヲ奈何ニセン。

同　十四日　曇夜强雨

一、午前十一時陸軍省ニ赴キ研究スルコト前日ノ如シ。

二、少佐ヴインゲツト氏ノ案内ニテ外務省ニ赴キ、外務大臣ニ面會シテ我外務大臣ヨリノ公文ヲ呈ス。

三、此朝少將キチネル氏克德威(ケヂブ)(埃及王)殿下ニ謁見セシ時、日本ノ福島大佐ヲ同道シテ謁ヲ請ハンコトヲ奏上セシニ、殿下ハ喜ンデ相見ルコトヲ答ヘラレタリ。然ルニ少將ヨリ此事ヲ外務大臣ニ如何スベキヤ、貴官ガ同道セラルベキヤト書翰ヲ以テ照會セシニ終日返答ヲ得ズ。

四、昨日ノ記事中少將諾爾(ノール)氏ヨリ午餐ニ招カレタルノ一項ヲ脫セリ。

同　十五日　曇夜雷鳴强雨

一、此日金曜日ニシテ埃及ノ休暇ナリ。

二、午前九時三十分少將諾爾氏馬車ヲ以テ迎ヘ來リ、同車シテ改羅府ノ東北亞巴西亞(アバシヤ)ノ練兵場ニ至ル、前驅騎兵二騎銃ヲ携ヘ一騎劒ヲ拔テ車後ニアリ、市民少將ヲ見テ敬禮スルコト恰モ王公ニ對スルガ如シ。

練兵場ハ既ニ沙漠ニシテ英國占領軍騎兵一聯隊埃及軍步兵四大隊ノ兵營及士官學校病院監獄ヲ置ク、西南遙ニ古城沙山ヲ望ミ西北近ク綠樹ノ間ニ什布拉(シユブラ)ノ王宮アリ、風光最モ美ナリ。少將亞巴西亞(アバシヤ)ニ到着スルヤ、工兵大隊長誘導シテ綿火藥及地雷ノ試發ヲ爲シ、夫ヨリ英軍近衞輕騎兵第二聯隊營ヲ見ル、此聯隊ハ數年間印度ノ北部ニアリテ數月以前當地ニ來リシ者ナリ（軍事ニ關スルコトハ特報ニ明記スルヲ以テ此ニ略ス以下之ニ同ジ）

兵營中曹達水ノ製造所アリ。機器頗ル單簡ナレドモ一日ニ能ク三千本ヲ製スルヲ得ベシト。又原價ハ十二本ニテ我大約二錢ニ過ギズ。印度ニテハ聯隊ニ使用スル殘餘ヲ廉價ヲ以テ希望者ニ讓與シ、聯隊ニ要スル種々ノ費用ニ充ルト。

實ニ有用ニシテ輕便ノ機器ナリ。本邦ニテ臺灣鎭守ノ兵營ニ御使用アラバ其功頗ル大ナリト確信ス。

三、獨逸派遣埃及財政整理委員男爵リヒトホーヘン氏ノ案内ニテ克德威倶樂部ノ客員トナル。

四、埃及地學協會ヨリ單騎遠征ノ一話ヲ請ハル固辭ス。

五、此日重要ノ電報左ノ如シ。

甲、五隻ヨリ成ル佛國艦隊土耳其ニ向フ、

乙、五隻ヨリ成ル魯國艦隊同斷、

丙、米國ノ一艦隊同斷、

魯ハ佛ト提携シ伊ハ英ト提携ス獨ノ魯ニ親密タランヲ望ムト同時ニ、伊ノ獨ニ於ケル親交ハ

漸ク輕薄ニ傾ントシ、魯ノ亞比西尼ニ陰謀ヲ爲シ、且ツ佛伊ノ間常ニ圓滑ナラザルヨリ伊ハ益々英ニ親シミ、英モ亦タ伊ト提携スレバ地中海ノ威權ヲ維持シ得ルヲ以テ其交情日ニ益々厚キ模樣ナリ。

丁、土耳其ノ人民ハ歐羅巴人ニ對シテ益〻不穩ノ色アレドモ土耳其政府ハ之ヲ鎭壓スルノ實力ナシ。

戊、土耳其政府ハ達爾丹尼爾(ダルダンネル)峽ノ兵備ヲ倍セリ。

右及御報告候也

明治二十八年十一月二十五日　改羅ニ於テ

陸軍歩兵大佐　福島安正

參謀總長大勳位　彰仁親王殿下

埃及占領英軍ノ司令官陸軍少將諾爾氏檢閲ノ爲メ國境ニ赴キ、又國境全軍司令官タル陸軍大佐(埃及少將)ハンテル氏賜暇歸英中ノ處期滿テ兩三日前改羅ニ到着シ、少將ノ南行スルト同時ニ國境ノ任地ニ赴ク由ニテ、今朝少佐ヴインゲツト氏ノ紹介ニテ面會セリ。國境ノ軍事及形勢ヲ視察研究スルノ好時機ナルヲ以テ、明二十六日午前十時當地ヲ發シ尼爾阿ヲ遡テ豫定ノ通リ瓦德哈爾佛(ワデーハルフア)ニ赴キ、十二月三十日ヲ以テ改羅ニ歸着スベキ筈ナリ。途中處〻ニ郵便局アルヲ以テ時々ノ模樣ハ續テ御報告スベシ。

吉野艦回航視察書

軍艦吉野英國ヨリ廻航ノ途次視察ノ爲メ孟買ヘ寄航セシメ候處別紙ノ通リ同艦長ヨリ報告書差出候ニ付爲御參考及進達候也

海軍大臣伯爵　西　郷　從　道

内閣總理大臣伯爵　伊　藤　博　文殿

（吉野第一三五號）

印度孟買港ヲ開航ニ付意見具申

今回日本郵船會社ガ印度孟買港ヘ定期航路ヲ開始スルヤ、彼阿會社ハ先キニ世上ニ宣言セルカ如ク大ニ運賃ヲ減ジ、以テ競爭ノ端緒ヲ開ケリ。抑モ彼阿會社ハ久シク大東及ビ濠洲ニ於ケル航權ヲ專ラニシ、次第ニ規模ヲ擴張シ、已ニ今日ニ在リテハ英國中屈指ノ一大會社タルノ面目ヲ致セルコトハ世人ノ能ク知ル所ナリ。誠ニ孟買コロンボ新嘉坡香港ノ各港ニ於テ、東ヨリ西ヨリ南ヨリ北ヨリ舳艫相銜ンデ出入スル船舶ヲ見ルニ、美ニシテ且ツ大ナルモノハ皆彼阿會社ノ所有ニ非ザルハナシ。同社ノ東洋及濠洲ニ於ケル業務ハ復タ盛ナリト謂フベシ。

今郵船會社ハ微々タル四五艘ノ荷物ヲ以テ彼ト競爭スルハ殆ント望ムベカラザルノ事タリ。故ニ同社ハ日本ノ諸會社トノ契約期限ヲ經過スルノ曉ニ至ラバ、一敗地ニ塗ルノ境遇ニ陷ルナカランヲ。夫レ日本ノ富國强兵ヲ經營スルノ國是ハ外國貿易ニ在リテ、而テ外國貿易ヲ發達スルノ術ハ一ニシテ足ラズト雖ドモ、先ヅ海洋運輸ノ權ヲ我ニ收ムルヲ以テ第一着手トナスコト素ヨリ言ヲ要セザルナリ。然ラバ則チ我政府ハ直接ニハ金錢上ノ保護ヲ郵船會社ニ與ヘ、且ツ間接ニハ內國ニ於ケル諸會社ヲ糾合シテ今日ノ契約ヲ永遠ニ繼續セシメ、以テ同社ヲ保護スルノ方針ヲ執ルコト今日ノ急務ナルガ如シ。

右意見具申仕候也

明治二十七年二月十五日

海軍大臣伯爵　西　郷　從　道殿

吉野艦長　河　原　要　一

追テ本文ノ開航ニ關シ孟買一般ノ人氣ヲ察スルニ、我郵船會社ニ相應ノ信用ヲ置キ且ツ其永續ヲ希望シ誠ニ好機會ト被存候

（吉野第一二八號）

孟買港碇泊中實況報告

一、本年一月十六日孟買港ニ投錨スルヤ、直ニガバーナー、「ハーリー」男爵幷當地陸軍司令官先任大佐バツヂエン氏ヲ訪問、然シテ碇泊ノ英艦マーソン、マクダーラー、ユーフレーテス、プラスシー號等ノ各艦長ト互ニ往復公問セリ。

一、同十七日陸軍司令官來艦アリ退艦ノ節禮砲十一發ヲ爲ス。

一、同十八日午後ガバナー夫妻「ロース」舞踏會ノ催ニ招待セラレ參會セシガ至テ懇切ナル取扱ニ有之候。

一、同二十日午前十一時三十分新任印度太守「ヱルギン」伯「ピーオー」會社所有船「ローム」號ニテ英國ヨリ着港ニ付左ノ儀式英先任艦長「ヒール」大佐ヨリ依頼ス。

一、ローム號入港ノ際滿艦飾、

一、同號投錨ノ節禮砲二十一發、

但英艦幷砲臺ハ三十一發ヲ爲ス。

一、太守上陸ノ際ハ惣員一舷側面ニ整列衞兵隊ハ「ゲルンフオツクスル」ニアツテ捧銃。

右ノ如ク依頼ニ付本艦ニ於テハ其儀式ヲ執行セリ。

但其詳細ハ別紙甲號新聞切抜ニ在リ。

一、「ローム」號投錨スルヤ英先任艦長「ヒール」大佐始メ本職モ該商船ニ至リ太守「ヱルギン」伯ヲ公問セシニ幸ヒ面會ヲ得テ種々ノ懇話アリ。

一、同夜十時「ガバナー」官宅ニ於テ太守「ヱルギン」伯ノ「レセプション」ニ招待セラレ再ビ面接スルコトヲ得タリ。

一、同二十二日午後當港豪商ターナー氏（日本郵船會社ト特約シタル會社長ナリ）ヨリ本職幷士官一同茶話會ニ招待セラレタリ。

一、同二十三日午後四時ヨリ六時迄本艦ニ於テ茶話會ヲ開キ、ターナー氏始メ三井物産會社出張店東京綿會社及大阪綿株式會社ニ關係アル各商人（歐洲人土人）ヲ招待セシニ、來艦スルモノ男女二百餘名ナリ。副長各士官一統ノ懇切ナル接待行屆キ來客人惣テ滿足ヲ表シ退艦シタリ。

但其景況翌二十四日ノ新聞紙乙號ニアリ。

一、孟買港ニ於テハ本邦人ハ勿論本艦ノ風聞先ヅ宜シク則別紙新聞切抜御參考迄送呈仕候也。

右實況報告仕候也

明治二十七年一月二十四日

吉野艦長　河原要一

海軍大臣伯爵　西郷從道殿

日本巡洋艦吉野

當港碇泊日本巡洋艦吉野艦長河原氏ハ昨夕紳士貴女二百餘名ヲ其艦ニ招待シテ晩餐ヲ供セリ。宴會ハ午後四時ヲ以テ開キ、同六時ニ終リ來賓皆該艦長及士官ノ鄭重ナル待遇ヲ受ケ、圖ラズ同艦ヲ視察スル機會ヲ得タリ。該艦ハ東京ニ於ケル日本朝廷ノ命ヲ以テ有名ノ「アームストロング及ミツチエル」商會附屬ノ造船所「エルスウキク」ニ於テ製造シタル一良艦ニシテ、一週日以前當港ニ來着シ、本日ヲ以テ再ビ當港ヲ解纜シ、「コロンボ」ヲ經テ日本ニ向ハントス。該艦ノ製造費ハ四十萬磅ニシテ、其速力ノ大ナルハ巡洋艦中無比ト稱スベシ。現今日本ノ海軍ハ三十七隻ノ艦船ヲ以テ成リ、尚ホ其他ニ水雷艇許多ヲ有ス。吉野ノ艦長河原氏ハ昨年初秋其乘員二百八名ト共ニ本國ヲ發シ、英國ニ至リ製造受負人ヨリ該艦ヲ受取リ歸途「プリマス」「ジブラルター」「マルタ」「ポルトセツト」「アデン」等ニ寄リ、去一月八日「アデン」ヲ發艦シタルナリト云フ。吉野ハ全ク鋼製ニシテ汽機汽罐推進器等全備シ、其防禦甲板ノ鋼鐵ハ斜側ニ於テ四吋二分ノ一、平行部ニ於テ一吋四分三ナリ。其船穀ハ數多ノ防水區隔ニ分タレ防禦甲板ト其上部ニ直接スル甲板トノ間ニ設ケタル區隔ハ概ネ炭庫ニ充ツ。又其塔載石炭額ハ一千噸ニ達スルヲ以テ、巡航速力ニ於テ非常ノ遠距離ヲ航走スルコトヲ得ベシ。其機關ハ「ハンフレー及テンナント」商會ノ製造ニ係リ、最新式三回膨脹機關ニシテ、一時間二十三節ノ速力ヲ出スベシ。又電氣燈ノ設ケアリテ總テ艦内ヲ照スベシ。其砲煩ハ「エルスキツク」工場ノ製作ニ係ル最新式精巧ノ速射砲數門六吋及四吋砲四門三斤砲二十二門等ヲ備ヘ、又水雷發射管五個ヲ設ク、其容積ハ長サ三百六十呎幅四十七呎吃水十九呎排水量四千二百噸トス。而シテ「ホクスル」ニ鋼製甲鐵塔ヲ設ケ戰鬪ニ際シ、艦ノ運動ニ必要ナル諸器具ヲ收ム。吉野ノ定員ハ元ト三百八十名ナレドモ現今ハ唯ダ之ヲ本國ニ廻航スルニ足ル丈ケヲ乘組シム。故ニ本國ニ歸着セバ其定員總數ニ乘組シムルナルベシ。又其煙筒ハ二個檣ハ前後ニ一基ヅヽ端艇ハ六隻ニシテ、別ニ小蒸汽艇一隻アリ。艦長室及士官室ハ艦ノ中甲板ニ設ケ水兵ハ下甲板ニ起臥セシム。以上記スル所ニ據レバ日本政府ハ實ニ精良ノ巡洋艦ヲ有スルヲ知ルベク、而シテ此巡洋艦ハ卽チ本日ヲ以テ孟買ヲ發シ日本ニ向フベシ。

（千八百九十四年一月二十四日孟買ガゼット新聞）

（吉野第一二八號ノ二）

孟買視察ノ儀ニ付別紙ノ通リ擔任順序相定候處各自ヨリ報告書差出候間茲ニ進達仕候也

明治二十七年二月二十八日

吉野艦長　河原要一

海軍大臣伯爵　西郷從道殿

我吉野艦ヲ孟買ニ派遣セシメラルヽ事ハ「モルタ」ニ於テ電令ヲ受ケタルノ當時既ニ諸君ヘ御通知ニ及ビ置キタル通ニ候處、抑モ此行タルヤ航路擴張ノ爲ナルコト素ヨリ電文ニ示スガ如クナレドモ、如何ナル條件ヲ視察スベキ乎等ノ明細ニ至リテハ之ヲ知ル由ナシ。故ニ暫ク本官ノ見ル所ヲ以テ其條件ヲ別紙甲號ノ通假定セリ。又視察ノ便宜ヲ計リ其擔任順序ヲ乙號ノ通定メタリ。一週間ノ短日月ヲ以テ充分ノ視察ヲ望ムコト殆ンド難出來事ナレドモ、士官各自能フ丈ケ御盡力相成度、且ツ假定條件外ト雖ドモ諸君ニ於テ必要ト認ラルヽ件ハ御報告相成度。

又今回吉野ヲ彼地ニ派遣セラルヽ第二ノ點ハ以テ我國威ヲ彼ニ示スニ在ルコトヽ信ゼラレ候處、僅少ノ回航員ヲ以テ常備艦同樣ノ勢力ヲ顯スコト是亦タ至難ノ事ナレドモ、士官諸君ニ於テ能フ丈ケ御盡力相成度。

右希望致候也

明治二十七年一月九日

アデン港ニ於テ

吉野艦長　河原要一

士官各位

甲號

一、孟買沿革

一、教育警察

一、孟買市内一般ノ景況

一、各國領事館ノ數及其位置、日本領事館ヲ置クベキノ位置

一、港灣一般ノ景況
一、錨地入港ニ關スル港則
一、天候風候
一、眞水通舟ノ便否
一、一個年間各國軍艦及商船ノ出入數
一、孟買沿岸景況
一、造船所及船渠ノ景況
一、ピーオー會社ノ船渠景況
一、軍艦（印度艦隊）ノ數及其配置
一、砲臺ノ位置及構造
一、兵營及兵數
一、諸機械工場ノ景況
一、飲食及衞生ノ景況
一、稅關ニ關スル件
一、人種人口及外國人ノ數竝區別

一、商業上ノ景況
一、貿易及輸出入ノ件
一、本邦產物輸入ノ適否
一、日本人在住數
一、石炭眞水糧食其他諸物價
一、郵便電信鐵道ノ交通車輛ノ價格
一、水產鑛產物
一、銀行及諸會社ノ景況
一、家　賃
一、○本邦ヨリ商船航路ヲ開始シタルニ付當地希望ノ有無及本邦商船ノ當地ニ於ケル信用ノ有無

右項目中○點ノ分ハ乙號擔任順序ニ拘ラズ各自御意見御報告相成度候也

乙　號

一、孟買沿革
一、教育警察

一、孟買市内一般ノ景況及人情
一、各國領事館ノ數及其位置、日本領事館ヲ置クベキノ位置
　一、以上　高桑大尉、秋山少尉擔任
一、港灣一般ノ景況
一、錨地入港ニ關スル港則
一、天候風候
一、眞水通舟ノ便宜
　二、以上　梶川大尉、木山少尉擔任
一、一ヶ年間各國軍艦及商船ノ出入數
一、孟買沿岸ノ景況
一、造船所及船渠ノ景況
一、ピーオー會社ノ船渠ノ實況
　三、以上　村上大尉、井出少尉擔任
一、軍艦(印度艦隊)ノ數及其配置
一、砲臺ノ位置及構造

一、兵營及兵數
　四、以上　加藤大尉、西大尉、田所少尉擔任
一、諸機械工場ノ景況
　五、以上　深見機關少監、三宅大機關士、鈴木大機關士、中島大機關士、鈴木少機關士擔任
一、飲食及衞生ノ景況
　六、以上　荻澤大軍醫、鈴木大軍醫擔任
一、稅關ニ關スル件
一、人種人口及外國人ノ數竝區別
一、商業上ノ景況
一、貿易及輸出入ノ件
一、本邦產物輸入ノ適否
一、日本人在住數
一、石炭眞水糧食其他諸物價
一、郵便電信鐵道ノ交通車輛ノ價格

一、水産鑛産物
一、銀行及諸會社ノ景況
一、家　賃

七、以上　片桐大主計、櫻大主計擔任

孟買ノ沿革

孟買ハ一六六一年葡萄牙ヨリ英國ニ讓リ、英政府東印度會社ヲシテ之ヲ管セシム。東印度會社ハ一六六〇年政府ヨリ獨占貿易ノ免狀ヲ受領シ、印度ニ航路ヲ開キテ其通商ニ從事セリ。而シテ印度ニ於テ其勢力盛大トナルニ及ンデ時世ニ迫ラレ隱然藩屬政府ノ體裁ヲ爲シ、土地ヲ領シテ租稅ヲ徵收シ、又軍隊ヲ編制シテ兵權ヲ執レリ。當時印度ハ支離分裂シテ邦國相犯シ、徒ラニ白哲人種ヲシテ其釁隙ニ乘ゼシム。十六世紀以降葡萄、蘭、佛ノ人民印度ニ交涉シテ前後英人ト對抗シタレドモ、葡國ハ衰微シテ蘭國ハ疲弊シ、聲威海外ニ加ハラズシテ人氣沮喪ス。而シテ佛ノ東印度會社ハ英ノ東印度會社ト多年輸贏ヲ爭ヒ、佛人屢〻印度ニ英人ヲ困蹙セシメタリト雖ドモ、佛國當時已ニ海洋ノ勢ヲ以テ英ニ一着ヲ讓レルガ故ニ、印度ノ事亦竟ニ英人ヲシテ其志ヲ得セシメタリ。一七〇八年英ノ東印度會社ヲ孟買府ニ開キ、知事及參事官ヲ撰任シテ其施政ヲ掌ラシム。一八一三年英政府獨

占貿易ノ制度ヲ廢シテ印度ノ通商ヲ公開自由ニシタルヨリ、輸出入ノ額年々增殖シ、商業頗ル活潑トナレリ。一八五八年印度叛亂鎭定ノ後政府會社ノ積弊ニ見ル所アリ、會社ニ令シテ其免狀ヲ還納セシム。是ニ於テ印度始メテ政府ノ直轄ニ歸ス。而シテ一八七七年英國皇帝印度皇帝ノ位ニ卽キ道臺及知事ヲ親任ス。印度ノ政務ヲ釐革セシム。道臺ハ「カルカツタ」ニ政廳ヲ置キ任期四年ナリ。

教育及警察

教育事業ハ印度政府ノ直轄ニシテ大小ノ學校皆政府ノ補助金ヲ受ケ政府ノ監督周密ナリ。

印度全國諸學校ノ總數六萬六千餘、生徒總數百八十八萬ニシテ、之ヲ土地人口ニ比例セバ土地一平方「マイル」ニ一校、人口百ニ生徒一人トナル。孟買ニ大學校アリ、一八五七年ニ創立シ龍動大學校ト其程度ヲ同クス。諸科專門學校ノ總數十三ニシテ生徒千八百五十五人ナリ。

普通學校アリ、高等中學初等ノ別アリ、高等學校ニテハ英語ヲ教ユルノミナラズ、英語ヲ用ヒテ諸學科ヲ授ク、高等學校ノ數ハ全國ニテ五百三十生徒八萬アリ。中等學校ハ小都會大鄉邑ニアルモノニシテ中等教育ニ適シ、其一部ハ英語ヲ用ヒ、他ハ土語ヲ用フ。中等學校ノ數全國ニテ三萬八千生徒十七萬人アリ。初等學校ハ全國ニ散在シテ土語ヲ用ヒ均一ノ學制ヲ定メズ。

印度ノ警察ハ兵隊組織ナリ。巡査ハ土人ヲ使役シ、白哲人ノ警察官ヲ以テ之ヲ指揮引率セシム。警察員ノ總數全國ニテ十五萬人アリ。凡ソ六平方「マイル」ニ一人人口千五百人ニ一人ノ比例ナリ。

市内一般ノ景況及人情

孟買ハ印度貿易ノ十分ノ四ヲ占有シ、通商國中英國ニ次グハ支那ナリ。其最要ナル輸出品ハ亞片ニシテ次ニ綿糸ナリ。其他生棉製雜貨ナリ。其輸入品ハ銀、銅、生絲、絹布、砂糖、茶等ナリ。

孟買市ハ人口八十萬人ヲ有ス。其重ナルモノハ婆羅門教徒五十五萬人、回々教徒十五萬人、耶蘇教徒四萬五千人、「パルシー」人四萬七千ナリ。印度社會ノ事物總テ宗教ノ制裁ニ由ラザルナシ。社會ノ階級世襲ノ職業皆之ヲ天賦宿因ニ歸シ、人爲ヲ以テ之ヲ移スベカラズトナス。同宗教ノ人民トハ雖モ階級異ナレバ互ニ婚嫁セズ。共ニ飲食セズ。冷淡相見ルコト異邦ノ人ニ於ケルガ如シ。

土人ハ概シテ骨格大ナレドモ肉瘦セテ氣力壯ナラズ。氣質溫順ニシテ險兇ノ相アルモノ少シ。衣服單純ニシテ文飾セズ、裸體ヲ露ハス。生計ノ程度一般ニ低ク、淡味粗食ニ安ンズ。住居ハ市中別ニ街衢ヲ爲シ、造家麁大ニシテ三階若クハ四階ニ作リ、家族數十戸一屋ノ下ニ群集ス。富豪ノ長者モ多クハ貧賤ノモノト伍ヲ同クシ、一意ニ蓄財ヲ以テ無上ノ快樂ト爲スガ如シ。

回々教徒、婆羅門教徒多少其風俗ヲ殊ニスト雖ドモ、社會ノ大體ニテハ之ヲ識別シ難シ。回々教徒ハ婆羅門教徒ヨリ較ヤ强硬事ニ耐フルノ風アリ。市中ノ商權多ク回々教徒ノ手裡ニアリト云フ。回々教徒、婆羅門教徒何レモ宗教ニ熱心ニシテ氷炭相容レズ、動モスレバ瑣末ノ事情ヨリ大紛亂ヲ釀シ、政府竟ニ兵力ヲ以テ之ヲ鎭壓スルコトアリ。

「パルシー」ハ古代「ペルシヤ」ノ遺民ニシテ、拜火宗ヲ信仰スルモノナリ。回々教軍ノ侵略ヲ避ケテ印度ニ流浪シ、後チ英領印度ニ歸化ス。是ノ人種ハ服裝容態白哲人種ニ摸擬シテ別ニ一風ヲ爲セリ。性質怜悧ニシテ華美ヲ好ミ、英語ヲ善クス。社會ニアツテ中等ノ位置ヲ占メ、官吏書記ニ從事スルモノ多シ。英人ト土人ノ間ニ立チ政府ニ益スルコト多シト云フ。

各國領事館ノ數及我國ノ額事館ヲ建ツル地所

孟買市ニ領事ヲ駐在セシメ、領事館ヲ設クル國十五アリ。佛蘭西、獨逸、墺利亞、比耳義、和蘭、伊太利、葡萄牙、瑞典(諸威)、土耳其、邏羅、波耳西、西班牙、嗹馬合衆國、智利是ナリ。

孟買市内緊要ノ地ハ悉ク家屋公園、道路ヲ以テ充滿シ、亦寸地ヲ餘サズ。已ムヲ得ズ市中適宜ノ家屋ヲ借リテ之ニ充テンカ、「アポロバンダ」波止場ニ近接シテ「コロバ」街アリ此邊我領事館ヲ設クルニ適スベシ。

右報告仕候也

明治二十七年二月七日

海軍大尉　高桑　勇
海軍少尉　秋山眞之

海軍大佐　河原要　一殿

孟買港一般ノ景況（英版第二千六百二十一號及六百五十五號ヲ參觀ス可シ）

孟買港ハ印度西岸ノ濶大ナル一港ニシテ、長サ北々東ヨリ南々西ニ大凡十五里、幅四里乃至六里、港内水深概四尋乃至六尋ニシテ底質ハ泥土ノ部最モ多シ。其海濱ハ縈回折シテ數多ノ灣㽞海門ヲナシ、恰モ鋸齒ノ如シ。且ツ對面ニハ島嶼堆灘羅布ス。

港ノ區域ヲ定ムルコト左ノ如シ。

南界　「クンダワ」島ヨリ對岸ノ大陸ニ至ル
西界　「クンダワ」島ヨリ外燈船ヲ經テ「マラバー」角ニ至ル
北界　「ホグ」島ヨリ「トロンベー」立標ニ至ル
東界　「ノカル」角ヨリ「ペン」河口ヲ横ギリ「カランジヤ」島ノ南端ニ至ル

一般ノ錨地ハ港ノ西側孟買市ノ近傍ニアリ。而シテ孟買城旗杆ト「サンクー」岩燈臺トノ間ヲ以テ軍艦錨地ニ充テ、數多ノ繫留浮標ヲ設置セリ。

入港ノ諸船舶ハ季節ニ應ジ左ノ如ク双錨泊スルヲ通則トス。

九月十五日ヨリ五月十五日ニ至ルノ間卽北東信風時中ハ南々西ト北々東ノ方向ニ錨鎖各四十五尋ヲ出ス可シ。

五月十五日ヨリ九月十五日ニ至ルノ間卽南西信風時中ハ南々西ニ六十尋北々東ニ四十五尋ノ錨鎖ヲ出ス可シ。

孟買市ハ隆盛ノ開市場ニシテ人口常ニ一定セズ。其住民ハ歐洲人「バルシー」人波斯人阿剌比亞人「シヂース」人「マラツタ」人「カマイース」人俄亞（ゴア）地方ヨリ來レル印度葡萄人及諸國ヨリ渡來セル海員ヨリ成ル、千八百九十一年ノ統計ニヨレバ八十二萬一千七百六十一人アリト云フ。

鍼路法　孟買港ヘ西方ヨリ入港スル諸船舶ハ流潮及漁柵ニ注視シ、「クンダリ」島及「プロングス」燈臺ヲ最初ニ發見ス可シ。既ニ發見スレバ位置ヲ定メ、外燈船ノ北側二鏈或ハ三鏈ニ向フ可シ。（夜中ナレバ南側ヲ可トス。何トナレバ「サンクレ」岩ノ指導白燈アルニ依ル）該燈船ニ至レバ「プロングス」淺堆ニ注視シ、「カランジヤ」赤土標ニ向フ可シ。既ニ北「バツプ」立標ト「サルノブ」立標トノ一線ニ入ラバ「プロングス」淺堆ニ一層注視警戒シテ航進ス可シ。「サンク」岩燈臺ニ並

バヾ容易ニ錨地ニ至ル可シ。

南方ヨリスル諸船舶ハ港外漁柵禁止場ヲ除キ、凡ソ水深十尋ノ處マデハ漁柵設置シアルヲ銘記スベシ。殊ニ「クンダリ」島沖ニ多シ、故ニ該島附近ノ十尋界ヲ避ケ外燈船ニ至ル可シ。

南西信風季節中ハ漁柵ナシト云フ、然レドモ實驗ナキヲ以テ確言スル能ハズ。

天候及風候

本艦碇泊中ハ所謂好季節ニシテ連日晴、夜ニ入リ霞アリ、或ハ日中ト雖モ對岸ノ諸山ヲ隱匿セシコトアリ。晴雨計ハ定則ノ昇降ヲナシ、寒暖計ハ七十三度乃至八十二度ナリ。

風候概シテ午前北東午後北西ノ輕風アリ、蓋シ海陸風ナラン、天候風候等ハ別表ノ如シ。

月日	天候 午前	天候 午後	風向 午前	風向 午後	風力 午前	風力 午後	晴雨計 最高	晴雨計 最低	寒暖計 最高	寒暖計 最低
一月十八日	B.C	B	N°E	NWbW-N°E	1	1	30,012	29,620	80	73
十九日	〃	〃	NW	S-NNW	0—1	1	29,999	29,970	79	73
二十日	B.M	B.C.M.	NE	W-NW	1	1	30,035	29,964	80	76
二十一日	B	B.M	NE	NW-NE	0—1	0—1	30,070	29,980	82	76
二十二日	B.M	〃	N-EoN	NW-E	0—1	0—1	30,086	30,014	81,5	75
二十三日	〃	〃	W-WNW	WNM-NW	0—1	0—2	30,074	29,964	81	74

淡水及通舟ノ便否

淡水　市内ニ淡水ヲ供給スルニ水道ノ裝置アリ。水源ハ數個ノ人造湖水ヨリ成ル。概ネ「サルセツト」島ニアリ。最モ遠キモノハ五十里ヲ距ツ。雨水ヲ貯藏シ濾過シテ飲料ニ供ス。湖水ノ主ナルモノヲ「タンサ」「ツルシー」「バウアイ」「ベハー」等トナス。是等ノ淡水ハ皆「ベハー」湖ニ湊合シ、該湖ヨリ更ニ「コラバー」丘山ノ貯水罐ニ至ル。此處ニ濾水及配給ノ機關ヲ設ケ、大小數多ノ鐵管ヲ市内ノ各部ニ導キ、更ニ無數ノ支管ヲ設ケテ公私百般ノ需要ニ應ゼリ。各處ニ小罐ヲ備ヘテ此淡水ヲ貯フルノ設アリ。水管ニ依テ淡水ノ供給ヲ受クルモノハ、其量ニ應ジ一定ノ價格ヲ市役所ニ支拂ハザル可カラズ。近時ノ統計表ヲ閲スルニ、毎日此水管ニ依リ市内ニ供給スル水量ハ二千九百萬瓦（ガロン）ニシテ、之ヲ人口ニ平均スレバ毎一人ノ消費三十六瓦餘ナリトス。

船舶ニ淡水ヲ供給スルニハ水船アリ、淡水六十噸ヲ積ムニ足リ、又汽械ヲ備ヘテ自ラ進退ス可シ。此等ノ水船ニ滿水スルニハ海岸數處ニ噴水口（スルイス）ヲ設ケ、水管ノ水ヲ引ク可シ。港廳、諸會社等ニ分屬ス碇泊スル船舶ニテ淡水ヲ要スルトキハ直ニ港廳（ポートラスト、オツフヒス）ニ請求スルカ、或ハ糧食受負人ヲ經テ通知ス

可シ。水船ニ滿水スルニハ凡三十分時ヲ要シ、之ヲ船舶ノ水罐ニ注入スル亦二時間ヲ越ヘズ。而シテ該船ニハ蒸氣喞筒所屬蛇管等ヲ全備スルヲ以テ、特ニ船員ヲ煩ハスコトナシ（本艦ニテハ一噸ニ付一「ルピー」十二「アンナ」ヲ支拂フ）

船舶船渠中ニアルトキハ、港廳ノ許可ヲ得テ其附近陸上ノ噴水口ヲ使用スルコトヲ得ルト云フ。

此淡水ハ飲料ニ適ス。然レドモ亞硝酸ノ少量、硝酸ノ痕跡及少許ノ有機物ヲ含有セリ。而シテ南西信風濕潤ノ候ニハ稍此有機物ノ量ヲ加ヘ、北東信風乾燥ノ候ニハ之ヲ減ズト云フ。

通舟旅客海員ノ上陸搭船スルモノハ「アポロバンドル」及「カルナツクバンドル」ノ二埠頭ヨリスルヲ例トス。而シテ概ネ前者ヨリス。該埠頭ハ石造ニシテ數箇ノ階段ヲ設ケ、潮ノ漲落甚大ナルモ昇降頗ル便ナリ。唯南西信風ノ候波濤其外面ニ激スルトキハ其側面ヨリ昇降スト云フ。

通舟ハ其數多ク埠頭ニ群集ス。之ヲ大別スレバ二種トナル。即「ジョリーボート」及「トニース」ナリ。「ジョリーボート」ハ小形歐風ノ端舟ニシテ、概ネ青色ノ塗料ヲ施セリ。「トニース」ハ狹長ニシテ稍「カイ」ニ類ス。而シテ三擢ヲ備ヘ、其他ノ一擢ヲ以テ舵ニ代フ。共ニ印度形三角帆ヲ備フ。是等ノ舟夫ハ土人ニシテ一定ノ家居ナク、此舟中ニ起臥スルヲ常トスレバ、晝夜ヲ問ハズ雇役スルコトヲ得可シ。其雇賃ハ左表ニ據ルモ、舟夫狡猾ニシテ多キヲ貪ラント欲シ、過高ノ精求ヲナスコト少ナカラズ。注意セザル可カラズ。

トニース	陸岸ヨリ碇泊船ニ至ル	北東風時	三アンナ
		南西風時	五アンナ
	滿一日	北東風時	一ルピー
		南西風時	一ルピー四アンナ
ジョリーボート	陸岸ヨリ碇泊船ニ至ル	北東風時	八アンナ
		南西風時	一ルピー
	陸岸ヨリ「シツドルグラウンド」砲臺外ニ至ル	北東風時	十四アンナ
		南西風時	一ルピー四アンナ
	滿一日	北東風時	十四アンナ
		南西風時	三ルピー

其他滿一日ニ滿タザルモノハ別ニ減價ヲ給ス可シ、又船舶ヨリ陸岸ニ至ルハ上記ノ半額ヲ給スルヲ例トス。

「ジョリーボート」ハ六名「トニース」ハ四名ヲ以テ搭舟ノ限トス可シ。

右別冊港則及船渠規則相添へ此段報告仕候也　（別冊略ス）

明治二十七年二月八日

海軍少尉　木山信吉

海軍大　梶川良吉

吉野艦長　河原要　一殿

命ニ依リ別項ノ視察ヲ爲シ謹テ報告仕候也

明治二十七年二月十日

海軍少尉　井出謙治

海軍大尉　村上格一

吉野艦長　河原要　一殿

造船所及船渠ノ景況

孟買市ニ造船所（ドックヤード）ト稱スルモノ二ケ所アリ、一ヲ官有造船所（ガバーメントドックヤード）トシ、他ヲPO會社造船所トス。而シテ共ニ船舶修理用ノ船渠（ドック）ヲ有ス。又此船舶修理用ノ船渠（ドック）ノ外、當市沿岸ニ三ケ所ノ船舶繫留用ノ船渠（ドック）アリ。前者ヲ乾船渠（ドライドック）ト云ヒ後者ヲ濕船渠（ウエットドック）ト稱ス。

官有造船所ハ「アポロ」埠頭（バンダー）ト稅關ノ間ニアリ。西曆千七百三十五年東印度會社ノ創設シタルモノニシテ、爾來年ヲ追フテ盛大ニ趣キ、千八百十年ニハ五個ノ乾船渠ヲ有スルニ至リ、往時木船時代ニ當テハ英國軍艦大小十九艘（最大ナルモノ二千四百トン）印度海軍ノ小艦十七艘千七百「トン」ヨリ二百五十「トン」ニ至ル商船六十六艘及ビ數多ノ小舟ヲ此造船所ヨリ進水シ、一時全盛ヲ極メタリシモ、木船廢タレ鐵船世ニ出ルニ及ビ、英國ニ於テ製造スル方遙ニ廉價ナルト、且ツ印度海軍ヲ廢セラレタルヲ以テ千八百五十四年以來大船ノ新造ヲナサズ。故ニ諸工場ノ規模縮少シ、當時ハ造船所ト言ハンヨリ寧ロ船舶修理所ト稱スル方妥當ナラン。

所内使役スル所ノ工夫平均一日三百人弱、工場長ハ重ニ英人ニシテ通常大修理ト雖ドモ爲シ得ザルコトハナカル可ク、兎ニ角印度第一ノ造船所タル可シ。

又構内海岸ニ近ク英國東印度艦隊用ノ炭庫六棟アリ。其容積千噸内外ヲ容ルニ足ラン、又該艦用舍庫アリト雖ドモ其内部ヲ視ル能ハザリシヲ以テ詳細ヲ知ル能ハズ。

海岸ニ一個ノ擧重機アリ、水壓力ヲ以テ運轉スルモノニシテ五十噸ヲ擧グルニ足ル。又船渠ノ外方ニ他ノ擧重機アリ、人力ヲ以テ動作セシムルモノニシテ擧重力二十五「トン」トス。此他擧重力三十噸ノ浮用蒸汽擧重機船一艘ヲ備フ。

當造船所乾船渠ノ容積次ノ如シ。

渠名		長サ	入口ノ幅	干潮時ニ於ケル深サ	記事
オールド、ボンベイドツク	上	二〇九呎	四七呎七吋	一四呎	三渠ヲ合シテ長サ六四八呎ノ一渠トナスコトヲ得
	中	一八三〃	五一呎一〇吋	一七〃	
	下	二五六〃	五一呎一〇吋	一七〃	
ダンガンドツク	上	二八六〃	六三呎一〇吋	一八〃	二渠ヲ合シテ長サ五三二呎ノ一渠トナスコトヲ得
	下	二四六〃	六三呎一〇吋	一八〃	

右船渠ニ於ケル干潮時ノ水深十七呎ナリ。

此他尚一ノ小乾船渠アリ其容積ヲ詳カニスル能ハズト雖ドモ、水雷艇若クハ「タグ」ノ如キ小舟ヲ容ルニ足ルノミ。

船渠ノ南方海ニ面シテ四個ノ船臺アリト雖ドモ、前記ノ如ク當時新造船ナキヲ以テ悉ク端艇置場若クハ修理場ニ充ツ。

P〇會社造船所ハ孟買市ノ北端「マザゴン」ニ在リテ同會社所有ノ船舶修理ノ爲メニ設置シタルモノニシテ、蘇士運河通ゼザルノ往時ニ在テハ甚ダ必要ナリシニ相違ナキモ、同運河開通シ、且ツ船舶ノ構造好良ニ趣キシ今日ハ、往時ニ比シ斯ル獨有ノ工場船渠モ大ニ其必要ヲ減ジ、所内大體ノ景況漸次縮少ノ狀ヲ呈スルハ自然ノ勢ニシテ怪シムニ足ラザルナリ。所内工場倉庫及乾船渠一通リ備ハリ居レドモ自己ノ便利ニ任セテ普通一般商買的造船所ノ觀ヲナサズ。

構内ノ概況次ノ如シ。

乾船渠　二ケ所

一ハ長サ四百六十六呎幅六十六呎干潮時ノ水深十八呎

一ハ凡ソ百二十呎幅三十呎深五呎

而シテ後者ハ舊式半壞殆ンド用ニ堪ヘザルモノヽ如シ。兩者共蒸氣排水喞筒ヲ備フ。

機械工場　一棟

旋盤工場模型場鍛冶工場ヲ有ス。

鑄物場　一棟

小形ノ鑄物ヲナシ得ルノミ。

塗具庫　一棟

倉庫　三棟

内ノ一棟ハ新舊船具類ヲ收メ一棟ハ索具庫ニ充テ一棟ハ入渠船ノ物品ヲ陸揚スルニ用フ。

模型場　一棟

一端斜メニ海ニ入リ端艇ヲ引揚ゲ修理蓄藏スルニ便ニス。

石炭庫　外壁ナキモノ三棟
一棟大凡一千噸ヲ入ルヽニ足ル。
石炭積上ゲ置クベキ空地一段計リ
石炭若クハ貨物上下ノ爲メ特設ノ一裝置アルヲ認メズ、只構内ノ鐵路停車場ニ連絡スルノミ。
清水タンク　一個、五十トン位六個
入渠船舶ノ用ニ供スルモノニシテ大形人力喞筒ヲ備ヘタリ。
役員用住宅兼事務所　一棟
構内ノ一隅樹間清冷ノ位置ニアル大厦ニシテ總テノ工場倉庫ヲ合スルモ此一棟ニ及バザルベシ。

港奥「ホグ」島ト稱スル一小島ニOP會社ニ屬スル「ハイドロリック、リフト、ドック」アリト云フ、視察ノ便ヲ得ズ、情況ヲ知ル能ハズト雖ドモ七千乃至八千「トン」ノ擧重力アリト云フ。但シ「マザゴン」乾船渠ノミニテ不足ヲ告グル場合ニノミ使用スルモノヽ如シ。

「アポロ」埠頭ノ南方綿花壓縮會社ニ接シ、一ノ濕船渠アリ。「サウスーン、ドック」ト云フ。規模狹少吃水十八呎以下ノ船舶僅カニ二艘ヲ容ルヽニ足ル。是レ往時當市唯一ノ濕船渠ナリシモ、商業貿易ノ發達ニ隨テ大濕船渠ノ新造ヲ促シ、稅關ノ北方ニ「プリンセス」及「ヴヰクトリヤ」ト稱スル二大濕船渠ヲ築造スルニ至レリ。

「プリンセス」船渠ハ千八百七十五年起工同七十九年ニ竣工、「ヴヰクトリヤ」船渠ハ同八十五年ニ起工シ、同八十九年ニ竣工シタルモノニシテ、二渠相隣シ規模廣大貨物上下ノ方法陸便トノ聯絡周到ナルモノヽ如ク、稱シテ東洋第一ノ濕船渠ト云フ。蓋シ過稱ニアラザル可シ。

「プリンセス」渠内ニ一ノ乾船渠アリ。側ニ蒸汽喞筒ヲ備フルノミ。故ニ修理ヲ要スル船舶ハ他ノ機械工場ニ托スベキモノトス。

是等ノ船渠内ニ於テハ石炭ノ陸揚若クハ搭載ヲ許サズ。蓋シ當市第一ノ輸出品タル綿花ヲ汚スヲ避ケンガ爲メナリ。

右兩濕船渠ノ要領別表及圖面ノ如シ。

是等濕船渠ノ外沿岸ニ小ナル「ベトズレ」羅列シ、小形船舶此ニ泊ル貨物ヲ上下ス。然レドモ多クハ水底甚ダ淺ク干潮時ニハ船舶多ク瀏スルヲ見ル。

別表